
ONE PIECE 秘境と悪魔の実を持つ青年

山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 秘境と悪魔の実を持つ青年

【コード】

N1137Q

【作者名】

山茶花

【あらすじ】

彼、黒渡譲は何処にでもいるただ他の人よりも武術が出来るとかほんの少しのとりえを持つ青年だった。

そんな彼が生前子供に対して見せた優しさと行動は女神の気紛れを呼び「ONE PIECE」の世界に転生。

異世界に行った彼の物語が今始まる！

プロローグ〈転生手続き〉（前書き）

12月まで書いていたのですがやはり読んでくださっていた皆さまから寄せられてきた時間軸の矛盾（シトラスの寿命が長すぎて変なことになっていたりモリアが子供なのに勝負していた）や設定忘れなど色々な問題点を改善する為に新しく書き直すことにしました。

あの話に目を向けてくださっていた人たちにこの場所を借りてお詫び申し上げます。

どうもすみませんでした。

プロローグ／転生手続き

……自分は真つ白な空間に漂っていた。

一体此処は何処なのだろうか？、そして何故自分は此処にいるのだろうか？

しかし其の事を思い出そうとすると頭が疼いてしまい痛さで思考を中断してしまう。

もしかしたら思い出さたくない事柄などが含まれているのかもしれない。

ならばこの場所とこの場所にいる自分、それについて状況を整理しよう。

そう思つて自分の下をよく見たらまず足が地面についていない、いわゆる空中浮遊の状態だ。

まあ、これだけでも明らかに普通ではないのは分かった……しかしそれ以上に奇妙なのは自分の上を凝らすように見ていたら子供の泣き顔が浮かんでいた。

ゆすりながら誰かに対して呼びかける、其の涙でグシャグシャになった顔は返答を返さずぐったりしているのを見るとさっきよりもっと泣いて顔を歪ませていた。

しかしあれは誰だ……何処かで見た事のある顔でその顔は死にそうな怪我を負つていても苦痛に顔を歪ませることなく微笑んでいた。

そしてずっと上を向いていた為に首が痛くなってきた、そう思つて体勢を変えた時自分の上で微笑んだ綺麗な女性が自分同様浮かんでいた。

「あら、綺麗だなんて口が上手ね、坊や」

「坊やじゃない！、俺の名前は……あれっ？」

「残念だけど死んでいる時点で名前の記憶は失っているのよね」
「死んだ……、俺が？」
「うん、さっき上を見た時に分かったと思うけど君は子供を庇ってビルの落下物の下敷きになってこの世を去った……って事になってる」
「まあいくら空手で鍛えてても落下物は……えっ？、って事になってるとは？」
「こつちにも不手際があつて本当なら時間を止めたりする事が不慮の事故に関してには可能だったの」
「其れを怠つたと言いたいのかい？」
「そう……言う事になるね」
「まあ……そんな事ができる時点で貴方が誰かを聞いていないから何とも言えないがね」
「そう言えば名乗るのが遅れたね、私の名前は『フレイヤ』、女神だよ」
「女神様ねえ……」
「坊や、信じてないでしょ」
「そりゃいきなり言われて信じる方が変でしょう、其れに時間云々だとしても俺は子供を見殺しには出来ない」
「そうか……其処まで言うならこちらとしては不祥事のお詫びとして君に選ぶ権利を上げよう」
「選ぶ権利？」
「そうだよ、1つはこのまま蘇つて人生やり直すか、もう1つはこの浮世からオサラバして漫画の世界に行っちゃうか」
「明らかに大サービスなんじゃないかな、だってどっちも選び甲斐があるもの」
「ははっ、女神様がお詫びだつて言ってるんだしこんな破格なのは、まあ……気紛れ料だと思つてね、気にしない気にしない」
「なら漫画の世界でお願いします」
「元の世界じゃ無くていいの？」

「臨死体験とかこういうチャンスは2度と無いと思うし、それなら漫画の世界の方が良いかと」

「そう、じゃあ……「ONE PIECE」の世界にしようかな」
「そんなあ、選べないんですか!？」

「言っただでしょ、気紛れだって」

そう言いながら悪戯っぽい笑顔を浮かべるフレイヤ、そんな顔をされたらこちらとしても怒る気が失せるじゃないか。

「その代わりといたら何だけど3つのプレゼントをあげるよ、見知らぬ土地でぽっくりは酷いでしょ？」

「良いんですか？」

「あまりチートな要求じゃなければね、さぁどんと来なさい!!」

「なら……最初の1つは「六式」や「剣術」を覚えられる最低限の身体能力の保障を」

「2つ目は悪魔の実を、これはランダムでいいです。」

「そして最後に巨人族の寿命が有れば」

「努力で身体能力は底上げできるし、悪魔の実のランダムはいいけど、最後はちよつとずるくない？」

「だって原作開始100年前とかだったら洒落成んないじゃないっすか」

「まあ……其れもそうだね」

「そして何だか……段々体の感覚が実感帯びてきたんですが」

「魂が近づいてるんだよ、「ONE PIECE」の世界に」

「そうなんですか、じゃあそろそろお別れですね」

「うん、縁が有ったら又会おうね」

「で、俺は一体何処に落ちるんですか？」

「ランダムだよ、そして名前も変えた方が良いと思うから教えてあげる」

「えっ!」

「驚いちゃってえ、君の名前は「黒渡 譲」って言うのよ」「あっ、有難うございます!！」

そう言っつて俺は深々とお辞儀をした

「反復しないと忘れちゃうからね〜…っつて落ちてちゃった。」

「一応最後の言葉をちゃんと聴きながら俺は「ONE PIECE」の世界に上から落ちていった

プロローグ〈転生手続き〉（後書き）

前回書いていた奴を文字数増やしつつ矛盾を少しずつ減らしていきながら再出発していこうと思います。

前書きでも言った様にあの様な話でも見てくださっていた皆様にお詫び申します、申し訳ありません。

これから先皆さんにはアンケートや感想でお世話になる事がたびたびあると思いますがどうか宜しくお願いします。

又矛盾点を見つけたら逐一感想で言ってくださいれば修正します。アイデアなど意見をいってくださいあればありがたいです。

第1話「野生の掟」『弱肉強食』(前書き)

すみませんが少しづつ変えていくのでどうかご了承ください。
こんな話でも楽しんでいただけたら幸いです。

第1話「野生の掟」『弱肉強食』

あれから俺はどれ程の時間の間あの真っ白な空間から落下したのだらう？

落下している最中とはいえ景色は嫌でも目に入る、其れは其れはもう緑一色の荘厳なまでの森だ。

しかし其の考えも落下が終わる直前には消えていた。

バキバキバキッ！！

木は轟音を立てて落下していた俺のクッションとなった、其のお陰で怪我も無く俺は此処に着地できたのだが……

「此処は一体何処だ……？」

見渡せば見渡すほどに気が遠くなる茂った森、原作でも見た事の無い植物達があちらこちらに生えていてとてもじゃないが生態系が把握できない。

森の外に出ればどうにか体勢を立て直して此処が何処なのかもわかる、そう思っていた矢先に近くの木がなぎ倒されて大きな雄叫びが聞こえた。

其の方向を見たら一体どの生物がやったのかは光った爪と其の大きさが何よりも雄弁に語っていた。

「此れってまさか…クマ？しかし毛色が違う……」

グオオオオオオ！！

「もしかして……これテログマか？、映画みたいに凶暴化してないけど」

そう映画「STRONG WORLD」に出てきた生物だ、IQ投与による凶暴化があったのだがどうやら天然種なのだろう。

だから場所も自然と特定できる、そうここは『メルヴィユ』と言い『秘境』と言われていた場所だ。

だがそんな事を考えている暇は無い、周りを良く見てみると大勢のテログマに囲まれている。

それもそのはずいきなりよそ者が縄張りに入って来たのだから怒りの対象と見られていても仕方ない、其の証拠に鼻息荒く爪をしきりに舐めている。

多分他の種族も同じ様に行動をしているだろう。

そしてこの目の前の光景が意味するのは明らかに原作よりも繁栄している証拠だ、という事は……

「原作前か、しかも此れじゃあほんとに100年ぐらい前じゃないのか？」

そう言いながら逃げる道であるテログマの股を抜いて全力疾走していた。

しかし原作より遥かに繁栄してるだけの事は有り他の種族である森

ダコが10匹ほど前方からやってきた。

「くそ……こうなったら来てるテログマを真正面から倒してそっち方面に逃げるか？」

そう言つて疾走して逃げていくが森ダコのスピードは速い、其れもそのはず今の今までただの高校生だった奴と猛獣、その差は埋めがたい。

……が青年はただ速く「逃げる」「つまり」「生きる」、その一点にのみ力を注いだ。その結果は……

「こうなったら……此れしかねえ！『剃』！！」

何も鍛錬もせず（来て早々だから当然なのだが）ただ青年の生きたいという執念はCP9の1式である「剃」を成功させ、テログマの方へ向つていく。

テログマもいきなりの速度の上昇と生きたいという気迫が生んだ本人も気づかぬ覇気に驚き無意識に道を開けてしまっていた。

それからどれ程の時間が経つただろうか。すっかり日も落ちこれから食料を探さないといけない。

青年は憂鬱な気持ちで再び森の方へと歩いて行つたらなんと昼間のテログマが森ダコに襲われていたのだ。

大方自分が逃げた為に腹を空かせて怒つた森ダコが俺を逃がしたと思えるテログマに襲い掛かったのだらう。

俺は生前の死因さえ忘れてテログマの方へ向っていき、やっていた空手の事を思い出す。

「腰のひねりや拳に力を入れるタイミング、そして相手を倒すという気持ち」を込めて渾身の一撃を森ダコに入れる。

森ダコもいきなりの襲撃に驚いたのか、モロにくらい後ろにのけぞる。

「オラア、まだまだ行くぞお!!」

それに乗じて渾身の一撃を一つ二つと入れていく、が体勢を整える為に後ろに下がられて好機を逃す。

「危機察知能力が高いな…、勝てるか？」

それからどれ程の時間が経っただろうか……

一撃当てれば離脱し好機を逃さず追撃すると言つように攻撃を続けるが俺は重要な事を忘れていた。

しまった…こっちの方が体力が少ないんじゃないだろうか？

そう、やるだけやったは良いが普通に反撃してこようとしている森ダコ、対してこっちは負傷したテログマがいて拳句の果てには体力が尽き掛けている俺という状態だ。

で今の状況はというと…

「グウオオオオオ!!」

やばいです、絶賛マジ切れ中です。

こうなったら逃げるしかない、しかしテログマを置いてはいけない。

ドドドドドドドド！！

こっちが考えまとまってない間にも森ダコがやってくる、もう此れしか方法は無い。

ガバツ！

一気にテログマの方へ駆け寄り持ち上げる、目指すのは群れがいたであろう森の奥地。

森ダコの速度はこっちも知っている、しかしあの巨体のデメリットを考えればきつといけるだろうそう思って一目散に駆け出した。

ダダダダッ！！

速度を落とさなくても、俺がたとえテログマを抱えていようが、木の隙間に対して横向きになったらすり抜ける事は出来る。

バキッ、ビュン！！ビュン！

木を折って投げてきても森ダコの視界は折る前の木で一瞬ふさがっているので当てるのが難しい
まして不意打ちで苛立っているからなおさら当たらない。

それから何分間追いかけてっこが行われたらう。

テログマを抱えたまま必死に逃げた青年はどうにか群れに出会う事が出来た。

当然ヒトヒトの実が無いから伝わらないだろうと思っていたのだが
どうやら彼らは知能が高く言葉を分かってくれたようだ。

しかし昼はあんなに凶暴に見えたのに夜になったとたん、凶暴じゃ
ないのだろう。

やはり奥地のほつに落下した俺に敵意を持ったのだろうか？

しかし今回このような事をしたのは良いがコリゴリだ。

強烈に眠いが今から寢床を探すのも無理だろう、あの森ダコに見つ
かっては元も子もない。

…と思っていたらテログマが大きな葉っぱを二枚渡してくれた。

「此れを布団にしたら良いつて言ってるのか？」

コクコク！！

力強く2回頷いた。

どうやらそういつ意味らしい、俺は言葉に甘えて被って寝る事にし
た。

しかし、寢ようにも明日からは食事や又奴らに誤解されたらどうし
ようと思つと寝れない青年なのだつた。

第1話「野生の掟」『弱肉強食』(後書き)

前の奴でも言われてますがご都合主義の『天然種』と言つので済ませました。

テログマ達は可愛いので出しておきたいと思いました。

現実でも犬とかみたいに縄張りを大事にしてる奴は敵意を持つのでテログマたちの行動は当然の対応ではないかと……

第2話「森の仲間と旅立ちと」(前書き)

今回で主人公がメルヴィユから旅立ちます。
鎌の話は前作より早く加工させます。

第2話「森の仲間と旅立ちと」

あのテログマの救出から2週間が経った。

それから俺はテログマに稽古をつけてもらったり森の奥地の探索に精を出していた。

なんせ一撃が重いくせに機敏に動くから普通の避け方では無理だと分かったので、六式の1つ『紙絵』を習得しようと思った。

しかし奴らの縄張りに敬意を払う事無く入ると当然だが怒られる、ドン・カマキリなんてその最たる例だ。

稽古の時は鎌のせいで真正面から受ける事ができないので、剃とかで翻弄しつつ戦うのを主流とする。

……といっても絶対に大丈夫という保険がないから掠るぐらいはするけどね。

あれから森ダコとも和解したが、どうも此処にいる奴らは全員が全員個性的だ。

ファットライオンだって肉食かとおもったら主に草食ったりしてるし肉だって死んじまった奴の肉だ。

ここ『メルヴィユ』の動物が草食なのはきつと動物同士の尊厳を無駄にしない為であって、初日のあれは俺に道を空けたテログマに対しての制裁だったのだろう。

正直テログマなら今挙げた奴らに大概勝てるほどの実力だとわかるからだ。

原作通りに村が有るかとおもっていったらやはり開始前だからか8割近くが森である、しかも人の気配が余りにも少ない所から10〜50人居るかどうか際どい所である。

そして森の奥地に行ったら大きな石や丈夫な草も見つけたから多分明日からもっときつい修行が出来るだろう、それに「月歩」と「鉄塊」など空中戦のレパトリーや防御の強化が必要だ。

いつか此処にいる動物たちと分かり合って動物との意思の疎通を可能とする奴になりたいものだ!!

…でもね、良い事づくめじゃなく悪い面も有るのが世の常で……やっぱり予想通りだったわ。

「いくらなんでも本当に原作の130年前ってどうなのかね？」

村に行つて新聞もらいました、相手ビツクリしてたけど。

第一そんな昔じゃブルツクも生まれてない、巨人族の寿命にして良かったわ〜

でもそうだったら……こんな事も思いつく。

「テログマ、俺がグランドライン制覇したらどうなるんだらう？」

「ゲウ〜」

首を傾げるテログマ、まあ冗談だけだな!!

それから俺は只ひたすらに長い間……本当に長い間鍛錬を重ねた。

時間と言えば60年近くだろうか、あれから時折新聞で日付を見ていたが多分其れ位のものだ。

テログマやドン・カマキリといった森の奴らとも和解し、理解しあいながらも稽古をつけて貰ったりしていた。

まずは『剃』を相手より速く動く為に習得し、『鉄塊』を相手の攻撃に耐える為に習得してその二つを洗練させる事幾星霜。

他の四式も欠かさず鍛錬させる事で洗練された無駄の無い動きが出来る様になった。もちろん基礎トレーニングも欠かさず加圧トレーニングで筋力を付け、走り続ける事でスタミナを付けるなどとする事で体は丈夫になり今は一対一なら負けない、いやきつとメルヴィユで一番強くなったと思う程の力を身につけた。でも原作キャラと違うのは悪魔の実が無い事と俺専用の武器が無い事、此ればかりは準備が無い為どうしようもない。

そして何年も経ってきた森は木々があの日より少なくなり、それに伴い人々が増えてきていた。

初めて来た時に比べ今やその十倍以上の人で一杯である、子供もちらほら見るようになった。

そして俺は一つの決心をしていた。そのため俺は森の皆に対して言う事にした。

「皆、俺はこの秘境から旅に出る。」

全ての生き物がざわめいた。

無理も無い、本当に長い間分かり合えた人間が居なくなるのだから。俺としてもこの秘境が嫌になった訳ではない。

ただ自分がどれほど強くなったのか、其れだけが知りたいのだ。

そんな事を考えているとドン・カマキリリが何年もの間稽古を付けてくれていた時に折ってしまった自分の鎌を渡してきた。

「ウギイ」

多分これを加工して武器にでも使ってくれと言ってるのだろう、目が熱くなった。

「グウ」

次はテログマの番だった、というか全ての動物が各々の臨戦態勢を取って俺を見ている。

つまりこいつらは最後の組み手が本当の饞別だと言いたいのだ。

「本当に良いのか？」

そう聞くと全ての動物が雄たけびを上げた、つまりは了承だ。

「ならやるうぜ、誰から来る？」

そう聞くとファットライオンが向ってきた、雄たけび上げて、しかも全速力で。

「ガオオオオ!!!」

「破ッ!」

渾身の突進を、渾身の突きで返す。

しかしその一撃でファットライオンは昏倒した、どうやらうまく急所に当たったらしい。

それから三時間後…

「最後はやはりお前か、テログマ」

「ゲウウーハアッー!」

そうこの三時間でテログマ以外の動物は全て昏倒した、殺す事も多分出来ただろうがそれは稽古である為ご法度である。

そして最後に相対するのは思えば初めての日から一緒だったテログマだった。

ドカ!!!

鉄塊をしても衝撃が通り抜けるような一撃をさらに一段階上の『鉄塊・剛』で受けて指銃で返す。

しかし機敏な動きで其れを避けてさらにその避けざまに放たれたバツクブローを紙絵で避ける。

そして……こんな白熱している戦いにも終わりは来るのは分かる、こっちは大勢の動物と戦い疲労が来ているがテログマの方は元気百

倍ア パンマンと言った所だ。

拳に全ての力を込めてあの日森ダコに放った一撃の心構えで放つ事を決める。

対するテログマは助走をつけ重い体重を活かしたボディブレスの様だ。

「腰を捻り、当たる瞬間に力を込め、倒すという気持ちを宿して…」

ダダダダッ！

「突く！！」

「ガアオ！！！！」

ドゴン！！

まるで爆発が起こったような音だった、それほど大きな音を立てて勝敗は決した。

結果はテログマの腹に拳が入り俺の勝利だった。

そして全ての動物が目を覚ました頃には夕方だった

「そついえは名前何だったっけ？、反復する時間も忘れて鍛錬したから完全に頭から抜け落ちてる……」

そして動物達が落ち着いていた頃、名前を忘れてしまった青年は動物達に深いお辞儀をしてメルヴィユから旅立った。

「まずベガパンクに有ってこの鎌を加工してもらおう事が第一だな、

又若いブルックにあつのも良いかもな、確かまだこの時期だったら
10代だし」

ちなみに彼は今の所は月歩で夢を抱えたまま空を移動しているのだ
った。

第2話「森の仲間と旅立ちと」(後書き)

前作は短編連打といった感じだったので二話をくっ付ける為に多少変えたのと名前を変えた事についての疑問等があったので理由をちゃんと言いました。

第3話「巨人・戦い・饑餓」（前書き）

今回はプロギーとドリリーの登場です。

前作のモリア戦が削除される予定なので、できるだけ時間軸の矛盾点を消す為バスターコール後のアバロ加入の間にベガバンクに武器を作ってもらおう話を入れてみようと思います。

一応クローバーが原作開始時40、オルビアが36でロビン20なのはご都合主義です。
すみません。

第3話「巨人・戦い・饑餓」

まず、最初の目的だったベガパンクは時期的にまだだろうと思いい、先にブルックを探す事にした。

といっても原作だったらどこかの国の護衛船団の団長になるんだっただけ？、とりあえず修行の為に月歩をやりながら進んでいるから足の筋肉が太くなる、締まった体にしておかないとな。

しかしよくよく考えれば国の情報が無ければ見つかること自身無理なので、早々と諦めて別の原作キャラに会うことにした。

そういえばふと思ったんだが巨人族の寿命だけど「命」だけだもんな、容姿は成長したが流石に身長が劇的に伸びる事はなかったしな。そして俺は偉大な巨人族の戦士にあうためにリトルガーデンへ向うことにした、ここからどれ程の時間がかかるかは知らないが行く価値は十分有るだろう、うまい事いったら戦えるかもしれないしね。

そう思つて二ヶ月ほど月歩をして俺は無事リトルガーデンについた、そしたらいきなり森の中での余所者に対する洗礼を受ける。

「あれ、此れなんてデジャヴ？」

まあ……結論はフルボッコですよ、だって故郷の奴らに比べりゃ弱かったんで。

言葉なんて「腹減った、食わせる」の一辺倒、食いたけりゃ群れで来いと思つていたら……

バキバキと轟音を立てて現れたのは恐竜だった、成る程此処って太古の島だったのね。

「って感心している場合じゃないか……、かかって来いやあ!!」

「ギャオオオオ!!」

ガッ、バキ、ゴッ!!

こちらは硬い皮膚を思い切りぶん殴ると言う極めて単純な積み重ねだが相手の攻撃を避けながらでは此れが一番最適な手である。

重い一撃を喰らえば鉄塊をやつていても結構痛いのは想像に難くない、ましてやこの質量。

打ち所が悪ければ死んでしまう、正直言つて死にたくはない。

そんな事を考えていながら必死に避けて殴り続けていたら遂に痛みが伝わったのか、足元から崩れ落ちるように倒れこんだ。

安堵感を感じていたら突然俺は宙に浮いた、いや正確に言えば誰かに拾われたのだ。

しかし普通の人間ではせいぜい抱えるが限度であり、拾うという言葉はおかしい。

つまり此処で俺の近くにいるのは巨人である、しかも此処にいる巨人は二人しかいないので必然的に探していた人達と言う結果となる。

「ガバババ！！、チビ人間にも此れほど気概の有る奴がいたとはな！！！」

「貴方は……赤鬼のプロギー！？」

「ゲギャギャギャ！！、どうやら俺達の事を知っているみたいだなチビ人間！！！」

「どうやらその様なドリー！！！」

「一応悪い人じゃないみたいだな……あの、悪いけど降ろして貰えませんか？」

「ガバババ！！、すまなかつたな！！、ほら降りてくれ」

そして降ろして貰った後俺は二人と話をした、思ったように悪い人ではなく豪快な二人だった。

「ほう、巨人族の寿命を持っているのか！！！」

「はい、其の間やる事が無くて鍛えてばかりだったんですけど……」

「そして別の場所を知る為に海賊であり「鬼」と恐れられた俺達に会いに来たと？」

「教えてもらおうと……そしてもし良かったら戦いたいなと思って来たんです。」

「ならばドリー、いつそ正直さに免じてやってやるか？」

「そうだな、ブロギーよ。戦士の願いなのだから。」

そして歩いて少しした所にあつたリトルガーデンの森の奥地で戦う事になった。

現在二人とも武器を振ってます、えっ！？なんか真空波出てますけど大丈夫ですよ？

「さてまずは俺からだ、死ぬなよ同胞！！」

「まずはドリーさんか…多分鉄塊は剛まで上げなきゃ無理だな。」

ブンッ！

予備動作無く無駄の無い振り下ろしを紙絵で避けつつ嵐脚で応戦、しかし剣の腹で受けつつ横薙ぎに斬ってくる。

其れを手を剣の上に乗せて其処から月歩で近づき指銃を放つ。

そついうようにともに被弾ゼロのまま緊迫した戦いが続いていた。

「そろそろ終わらせようか、若造…」

「ええ…この一撃は最高の一撃だと思って下さい」

グググッ ドリーの筋肉が隆起し只事ではない闘気を纏っていた。

ミキミキッ 青年の拳も壊れそうな程力を込めていた。

「エルバフの槍を受けてみよ…」

「捻り、伝え、倒す…」

「覇国はこく！！」

「年輪倒突ねんりんとうとつ！！」

ドリーが振った武器の衝撃が槍の様に向っていく、青年の放った拳の衝撃もまた槍の様に向っていく。

ドガアアアン！！！！

まるでその中心以外を消し飛ばしてしまいそうな一撃だった、土煙が舞い上がっていたが少しずつ晴れてきた。

「ドリー、大丈夫か！！」

ブロギーが心配するがそれはすぐさま杞憂に終わった

「ゲギャギャギャ、まさか引き分けとはな！！」

「ええ、全力の一撃だったのですが……」

しかし休む暇は無いとばかりにブロギーが言った

「ガババババ！次は俺だぞ、一応聞くが……戦えるか？」

「上等、行きますよ！！」

ブロギーさんとの勝負は結論だけ述べれば引き分けになった、なぜなら一番の技がドリーと一緒にだったし戦闘スタイルがドリーと非常に似通っていたからだ。

「まさか二人揃って引き分けとはな……」

「大変いい経験をさせてもらいました、有難うございます」

「まあ、こちらも久しぶりに喋る相手が居て良かった」

「其れではさようならです、又会いましょう」

しかしそう言ったらドリーさんは奇妙な見た目の果物を差し出してきた。

「待て、若造よ……この変な木の実を持っていけ」

「えっ、此れって……」

「俺達からの餞別だ、腹が減った時にでも食え」

「はい！大事に頂きます、有難うございました！！」

そして俺はリトルガーデンを来た時と同じ様に月歩で帰っていった。

第3話「巨人・戦い・餓別」（後書き）

やっと出ました、悪魔の実と原作キャラ。

そして原作から技の名前が変わりました。

年輪は捻ねんと捻ねんる事で生じる体の円が転じて輪になるともじった事から来てます。

倒突は単純に『倒すために突く』から来ていて其れを引っ付けました原作開始七十年前なのでこの時ブルックは十八歳で、ドリーとブルギーの決闘は開始して三十年です。

次回は悪魔の実を食べると、再び原作キャラとの出会いと言った流れになると思います。

それでは、さようなら。

第4話「出会い・実食・落胆」(前書き)

ブルックとの出会い。

正直短い間過ぎてブルックファンの皆さんにお詫び申し上げます。

どうもすみませんOTL

第4話「出会い・実食・落胆」

リトルガーデンからドリーさんとプロギーさんからもらった不思議な木の実……十中八九悪魔の実だと思われる其れを抱えながら現在は泳いでいます。

「一応抱えるだけなら沈まないんだな。」

そう、どうやら食べずに抱えているだけなら沈まないから気楽に泳げるのだ。

唯一の問題はグランドライン特有の気候と海王類である、うっかり食われるかもしれないし気候で手から抜けてしまうのも考えれる。

「月歩ばかりじゃ偏るもんなあ……」

なぜ泳いでいるのかと言えば今行ったことが原因だというのもある。一応襲ってくる海王類は鉄塊と紙絵で凌いで、危ない時は水中に潜って嵐脚で仕留めると言った形でやっているのではほとんど問題は無い。

「あれ？大きな船が見える……」

そんな感じで今日も海王類と気候相手に奮闘していたら目の前に大きな船が見えた。

「ん？なんか人が泳いでいますよ、ブルック船長」

「ヨホホホ！、引き上げてみましょう」

ガチャツ、グイーン

フックを引つ掛けられて気づいたら船にいました、引き上げる前にブルック船長といわれていたことから、とある王国の護衛船団だろう。

「大丈夫ですか？、ここで泳ぐなんて自殺行為ですよ」

「いや心配させてすまない、そちらさえ良ければここから近い町か王国を教えて欲しいんだがいいかな？」

「ここからならドラム王国が有りますよ、行きますか？」

「いや、悪いが全力で断る。」

自分で聞いたという言うのはお門違いだが冗談じゃない、あんな寒い所に居たら濡れたこの体はあっという間に凍ってしまう。

「後はアラバスタぐらいですね」

「なら其処します。」

「ヨホホホホ！では参りましょう、いざアラバスタへー！！」

「えっ、教えてくれって言っただけで送ってけなんて言ってませんよっ。」

「いえいえ、こちらも用があるから良いんですよ。」

「すみませんね、わざわざ」

「それはそうと貴方の名前聞き忘れてました、なんと云うんですか？」

「実の所忘れてしまつて……今新しい名前を考えている途中です」「私の名前はブルックです、それにしてもお気の毒ですねえ」

「どうも……有り難い慰めの言葉だ」

「ここから一ヶ月ほどでアラバスタに着きますがどういつたご用件で？」

「えっと、名前を考えているというのも有るが、悪魔の実辞典やある場所に対する情報が欲しいんだ」

「ほお、悪魔の実ですか！！本当に有つたんですねえ」

「ああ、しかし何だか分からないというのが不安だからさ」

「まあ、変な能力だつたら悲しいですね」

「それにしても泳ぎは腹が減るな……」

ガブツ！！

「ちよつ、なにそんな事言つて食べてるんですか！？」

「えつ？」

そういつた青年の手には豪快に齧り付いた悪魔の実が有つた。

「しまつたー！！、故郷の木の実を食べるときのノリで食つちまつたー！！」

「しかし……気になる味の方はどうだつたんですか？」

「そんなの、うわ！？思い出したらなんか苦酸っぱい感じの味が口の中に充満してきたー！！」

「で、感想の程は？」

「不味い、本気で不味い！！能力の引き換えだろうけど結構きつい、これ！！」

「まあ、どんな能力だと思いますか？」

「出来れば強力なのを望むよ、本当に……」

「あー船長、そろそろ出港しますよ？」

「ええ、それでは時間を取りましたがアラバスタ方向に進路をとって……出発進行！！」

「オォー！！」

船員達が雄たけびを上げる中、同行者である俺はこれからどうなるのかという暗澹した気持ちと共に居るのだった。

第4話「出会い・実食・落胆」（後書き）

短いですがブルックとの出会いと悪魔の実の食事だけで今回は終わりです。

次回は能力の判明と居住する場所への移動を書きます。

第5話「回転・戦闘・到着」(前書き)

ブルックとの別れ……っても再会はあるので一時的なものです。
原作キャラを出して絡みを多くさせるのは前作のゴア王国編が終わ
ったあたりからになります。

前書きでアンケートって完全丸投げのように聞こえますね……これ
は。

第5話「回転・戦闘・到着」

……あれからブルック率いる王国の護衛船団の船に乗せてもらい俺はアラバスタへ向った。

どうやらブルックが言うにはアラバスタに着くのは一月ほどとちょっと時間がかかるらしいのでその間に能力を判明させる事が俺のもっぱらの行動となった。

「ハア!!!」

ギイン!!!

「フツ!!!」

ドゴツ!!!

俺たちは今面と向かい鍛錬の組み手してるが、やはり団長だけあって普通にやったらブルックは強い。

俺は今回能力の解明も有るのであまり積極的に仕掛けない、それでもこうも受けれるのは百年の年季だろうか。

ドリーさんとブロギーさんの時は六式を使わないと負けてたし、海での海王類の戦いではやむを得ず六式を使ったが、条件として最適な陸の上なら相手が相手なら使わなくてもいける。

正直グランドラインの一億ベリーの賞金首相手に出し惜しみ出来るほど甘い考えは持っていない。

まず原作の数居る登場人物の中でも超が付くほど小柄な自分にとって(3mにも満たない)巨人族が相手では体格のハンデで不利、そして其処から来る攻撃力不足などと言った不安要素が多い。

海王類も海でならば自分の力を如何なく発揮できる、対することは条件上不利なので力の出し惜しみが出来ないのだ。ならばブルックはどうだろうか？

まだルンバー海賊団副船長でも無く本当に若い頃なので、まだ実力が劇的につく時期では無いのだから圧倒的にこちらが有利になるのが当たり前である。

もしこの状態のブルックに負けるようなら俺は自分の実力を疑うだろう、そして大声で人目をはばからずに心の底から泣きたい。

「ハアハア……流石ですねえ」

「そつちもその年でその実力は中々だとおもつぞ」

結局この二ヶ月の航海の間、俺は悪魔の実の能力は判明できないままアラバスタへ着いた。

「其れでは私達はここで……」

「ああ、有難う。縁が有つたら又会おうな!!」

「ええ、今度こそは大きな傷を負わせて見せますよ!!」

そう言つて俺達は何時かの再会を誓つてアラバスタからお互い別れた。

「しかし本当に砂だらけだな、この国……」

やはり原作を見ていて知ってるが実際に見たら凄かった、右を見ても砂漠、左を見ても砂漠、さらには元来た道を振り向いても砂漠だ。

流石に上から砂が降るといふのはなかった、360度一面銀世界ならぬ茶世界など幾らなんでも御免こうむりたいが……

「目的はナノハナからアルバーナに行つて情報収集だな……つて、おっと!？」

ガクツ!、ベタン!!

どうやら気づかない間に汗をかいて脱水症状に近い状態になっていたようだ。が、其れが思いがけない収穫をくれた。

サラサラサラツ…ゴォ!!

なんとという事に小さかったが、今確かに触れた砂漠から砂嵐が起ったのだ。

俺は此処から自分が食べた悪魔の実の力を考えてみる。

「まさかスナスナか?、いや待てよ…それならクロコダイルが…」

そう、スナスナの実は原作の敵キャラであるクロコダイルが食べている(今はまだ食べていない)悪魔の実なのだ、つまり原作通りなら俺がスナスナの実を食べている可能性は非常に低い。

もしスナスナだったとしたら同じ悪魔の実は同じ時代には無いので俺が死ぬか、クロコダイルが別の悪魔の実を未来で食べると言う事になる。

詰まり原作の崩壊が無い限りは他のオリジナルの悪魔の実になる、しかしこの断片的な物しか推理できていない状況では確信は持てない。

「他の固体や液体に触れれば詳しく分かるんじゃないのか？、……
そうなるよこの頃はまだオアシスが健在だと思われるユバに行けば
いいな。」

原作ではトトおじさんが掘っていたが今はまだダンスパウダーを使
う前なのでオアシスは生きているし水もあるだろう。

そう思った俺はこの力を確かめたり喉を潤す為にユバ方面に向う、
もしかしたら能力が判明するかもしれないと思うと自然に足早にな
る。

「ここがユバ、凄いや……水の豊富さが原作の頃とは段違いじゃな
いか。」

ここで脱水症状を収める為に、俺は食堂へ駆け込み桶に入った塩水
を貰う。

「はあ……生き返るわあ」

塩分と水で体の隅々が潤っていくのを感じる、そして俺は行儀悪い
が少し水が残った桶に手をつけ……

「破ッ！」

水に触れ砂漠に手を触れた時の感覚を伝える、すると……

ギョルギョルギョル！！

なんと水が小さな渦巻きを中心に描いていたのだ、という事はここ
から出る結論は一つ。

「回転の力、其れが俺の悪魔の実に宿っていたのか。」

『回転』これは漠然としているがとても強力な力である、青年が生前見ていた漫画にはその力を応用した敵がいた。

回転の力を攻撃に宿らせるだけではなく、自身を回復させる事が出来る様に攻防一体でありながら応用が利く。

それどころか敵の頭に手が触ればジ・エンドという状況を作り出す事が出来る。

そのようなとてつもない強力な悪魔の实を青年は引き当ててしまったのだ。

「この能力は確かに強い、しかしあの2人は其れに頼らなかった。其れは多分『戦士』だからなんだろうな。」

この能力はまず一つに自己の体を極限に捻って攻撃力の上昇、そして寿命を犠牲にするが（とは言っても極端なものではなく能力のON・OFFが可能なので即時的に死ぬという事は無い）腕や脚の切断をも治す超回復能力（これは巨人族の寿命とさっき言ったON・OFFのお陰で殆どデメリットが無い）。

「そもそも俺が知ってるキャラも切断した腕を直しても死にはしなかったしな。」

つまり能力多様をして即座に死ぬと言う事はないのだ、しかしこの悪魔の实は自然系の能力者との相性は圧倒的に悪いと言うのが伺える。

原作の3大将である青キジは多分この実において最悪だろう。

凍らされた腕は再生しないと全体に広がってしまうので強引に押し折らないといけない、つまり強制的に再生させる事ができるのだ。

赤犬も同様だがまだ全体に広がる前、又は喰らった瞬間に後ろに下がったりなど対策は取れる。

それ以外にもマゼランの『毒』やエネルギーのような『雷』に対しても耐性が無い為一撃で決まる可能性がある。

「しかし決まればという前提ならかなりえげつないのが有ったよな、あのキャラ……」

それは視覚の回転、これは目を見た相手に対して一定の時間同じ映像を見させる力。

即ち此れを食らったら数秒間無防備、そして其処から相手の頭に触れる、首を回転させるといった文字通りの必殺コンボが完成する。

つまりこちらとしても『切り札』と言うのは存在する、何も耐性が無いからといって敗北が決まったわけでないのだ。

もともと、正直上に上げた奴らの方が凡用性は高いのだが……

なぜならデメリットがあり、それはは周到な布石が無ければ無理という事と相手が目を逸らせば不発するという事。

「まあ……悩んでもしょうがない。まず、あの目的地に行ったらまたこの力の制御の為の修行や航海術の会得が第一だな」

そう、悪魔の実を食べた為もう泳ぐ事が出来ないから移動は現在の所自動的に月歩頼りになる。

……がもし足が痛くなつて墜落などといった洒落にならない事も予想できるからそ、ういった事に備えて船は必要なのだ。

「やっぱりどこかで行く方向に海賊がいたら奪うか屈服させて連れてつてもらおうかな？」

資金が無いからヒツチハイクが得策だというのが青年の出した結論である。

「さてと、おもわぬきっかけで能力が判明したから次は今度に行く目的地兼本拠地だな。」

そう言いながら青年が次に行くのは目的地に行く為の情報収集に適した場所、つまりアラバスタで一番活気に溢れた場所「アルバーナ」だ。

それから歩いて2時間程でアルバーナへ着いた青年は早速酒場や人が多い所、知識が豊富な爺さんや婆さんに話を聞く。

「あの、オハラっていう場所を知りませんか？」

「知らないねえ……」

ととぼけた様子ではなく本当に知りませんといった素振りで言われた、嘘じゃなさそうなので早々と次の人を探して聞いて回った。

しかし歩き回って二時間聞いて回ったが、知らないとの返答しかなかった。

「まさかこの時期から秘匿されているのか……」

そう思つて何処かの旅商人から地図を見させてもらつた結果オハラ自体は有る事は有るのだがやはり秘匿の為に知名度が低かつたようだ。

「ここから航海しておよそ半年か、月歩で距離を稼いでも半分位だな…」

そう言いながらもすぐに行動に移す為に剃を使ってアラバスタを出る事を優先した。

日が落ちて真つ暗になった頃、足は痛いがどうかアラバスタを出る事は出来た。

「さて、明日からはここから月歩を使って距離を稼がせてもらおうかな…」

日が昇る頃一つの影が空を疾走して目的地であるオハラに向つていた、一ヶ月経つまで海賊船が見つから無ければこのまま月歩で行くと青年は思っていた。

オハラはグランドラインを逆走した先にある『ウエストブルー』の島である。

さて……結論だけ言えば海賊船は見つかった、しかもグランドライン逆送完了の手前で。

しかし最初に決めた一ヶ月よりも後だった為に結局倒すだけ倒したがどうやら結構な賞金首が頭だったらしくどうやら原作の大海賊時代より海賊の数は少ないものの「本物」が多い為か、六式を使って

もそう簡単には倒せなかった。

前回全力で戦った巨人であったドリーさんやブロギーさんと違い手応えは有るのだが、元より相手もタフだから気絶せずに反撃してくる可能性が非常に高く其れが原因で長引いた、だがそんな戦いほど決着は呆気無いもので最後はこちらの何の変哲も無い一撃で相手は昏倒してしまった。

「多分限界を超えながら戦っていたな」

それもその筈だ、負ければ海軍に引き渡され処刑か監獄行きなのだからその事を考えれば血眼になつての抵抗は無理も無く寧ろ当然の行動とも言える。

そして戦いが終わってから月歩を繰り返し進んだら真ん中に大きな木が立った島を見つける事が出来た、月歩の為上空から島を見る結果になった所白衣を着ていたり見た目が学者だという人が沢山居た。

「ここがオハラか、本拠地としては最高の環境だな。」

島の砂浜のほうへ下りていきながら青年は一言呟いたのだった……

第5話「回転・戦闘・到着」（後書き）

名前を前作では勝手に決めましたが読者の方々の力を借りたく思い、コメントで募集をかせさせて頂きたいのですがかまいませんか？

もし嫌だと言うならコメントの方で言っ頂ければ良いのでお願いします。其の場合は前作同様『ノワール・パス・シトラス』でやっていきますので。

第6話「名前と新居」（前書き）

名前の意見が無かったので独断で決めました。

前話のあとがきでは前作と同じ名前で行く気だったのですがある言葉で統一させる為に変更いたしました、すみません。

第6話「名前と新居」

船を使わず月歩でオハラに着いた時、俺は正直目を疑った。

何故なら全員が一目で分かるほど学者といった格好をしていたからだ。

こんな場所が秘匿されるなど普通ではない、中心に大きな木があつて奇妙と言えるほど統一された服装。

多分何かしらの措置を取ったか方法を使ったのだろう、そうでないとまずこの異常は説明できない。

しかしここで何時までも呆けていては今気づかれてはいないが、注目されるだろう。

いきなり船も使わずに空から来たとあれば尚更だ。

「とりあえずは『名前をつける事』と『住居を見つける事』……、両方やらなくちゃいけないのが『放浪者』の辛い所だな」

……まあこの言葉は聞き流してもらつてかまわないが、確かに住居がなければ雨風も凌げないし、何よりこういったきちんとした所ではそうしないと面倒くさいのである。

「トラブルは極力避けるようにしないと……」

そう言っているがトラブルというのは本人のあずかり知らぬ所で起こるものである、ましてやそれが移住民や知らない人ならなおの事。

「すまないが、その君」

当然この様に呼び止められるわけで。

「はい？」

「どうやってこの『オハラ』を知ったのかね？」

「単純に言えば地図を見たらこの場所が載っていた、だから来たんだ」

「うむ、知った訳は分かったが此処に来た理由は？」

「ここで勉学を学んだり、ある事をする為だ。」

ここで言うある事とは「能力の制御」の事であって、其れをおおっぴらに言うのは少々危険な為伏せておく。

「そうか……、名前は？」

さて……今までは答えるのが容易だったのだがこの質問はどうしたものか。

しかしそれも杞憂に終わる、『名前』を聞かれて答えないとあれば其れは『名前』が無いという事。

ましてや知識を求めるがゆえに危険が付きまとう『オハラ』の住人ならば、そういった人の動向は鋭く感知する。

「名前を忘れたのかの？」

「そつだと言ったら？」

此処で凶星だからといって動揺するのもよくない、此処は毅然な態度で対応する。

「何で忘れたのじゃ？」

「記憶が曖昧なもので……」

本当は女神からの忠告を実行できなかったただけだが、女神などという与太話は信じてもらえない可能性が低いので此処は部分的な記憶喪失と言う事にしておいた。

「そつか……、記憶が曖昧か……」

「そつだ、だから名前は名乗れない」

「困ったのう、このままではなんて呼べば良いかもわからんし」

「悪いが俺は新居が欲しいから、速くそのような場所を探さねばならんので行きたい、それに呼び方などは自由にしてもらってかまわない」

「其れはいかんことなんじゃー!!」

名前の下りで怒ったのか老人は凄惨な剣幕でにらみつけてきた。

「こつちへ来い、わしがお前さんに名前をつけてやるー!!」

そう言って引つ張る老人の力はすさまじく引き離そうとしてもしっ

かりと掴んで話さない。

「着いたのう、さあ入れ!!」

其の勢いそのまま連れて来られたのはこの島のシンボルでもあった大きな樹の中。

どうやら此処は図書館で見た瞬間感じたものがあつた。

其れは……きつとこの場所には「全ての情報が網羅されている」と言つたものであつた。

「さて……、この本からお前さんの名前をつけるとするかの」

老人が取り出してきたのは重厚な雰囲気を漂わせる書物だつた、獣の皮の表紙だつたのは分かつたが此処ではあまり関係ない。

「これはラテンとやらの言葉を羅列しとる辞典なんじゃ」

「で……此れで気に入つた言葉に対して指をさしていけとでも?」

「其の通りじゃ、さあ始めるぞ……まずは『赤い』」

其の言葉に対して指を指さず首を振る俺。

「次は……『足』」

其の言葉も興味なさげに首を振り拒絶する俺、このやり取りが何回か繰り返されていくうち俺は眠気を感じていた。

其の後も俺は首を振っていた、なんだかしくり来る言葉がなくこのままワ行まで首を振り続けようかと思っただが、唐突に其の時は訪れて名前探しは終了した。

しかし其の後俺は驚く事となった。

もし此処に『あの本』を読んでいる人がいたらこれを分かってくれるだろうか

『いつ、今ありのまま起こった事を話すぜ！』、「俺は言葉に何一つ指を指していないと思っただらいつの間にか3つの言葉を指差していた」な…何を言ってるのかわかんねーと思うが俺も何をされたか分からなかった…、頭がどうにかなりそうだった…超スピードだとか催眠術なんてもんじゃねー、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……』

「フム、此れと…此れと…此れじゃな」

「えっ？」

何故か候補の名前が3つ、知らない間に紙に書き記されていた。

「あれ？、俺選んだつもり無かったのに……」

「まあ、本能や勘がそうだった決断を下す事もある、いきなりこの言葉を指したんじゃないよ」

「いつのまに……何故この3つの単語に反応してたんでしょう？」

「わしも分からんが……後悔せんのならその単語で良いじゃろ？」

「はい……他のは指さずに、それらの言葉を指したならそれを受け入れます」

「ならば、えーと……『黒い』は『grum』、『渡る』は『transferanseo』、『譲る』は『lictum』じゃな」
「それらをひつつけてしまえば……」
「『グラム・トランセオ・リクトウム』と読むのう」
「此れが新しい俺の名前ですか？」

「ああ……、『グラム』。其れが君の名じゃ」

「新しい名前……けど何故か馴染む」

「違和感も無いから良いのじゃが、さて……出ようか」

「はい？」

「家がないのなら、新居に案内せんとな」

「都合よくあるものなんですね……」

「付いて来てもらうぞい」

そう言われて図書館を出て俺……『グラム』は、自分が新しく住む場所へと案内された。

其の道中にいきなり老人が話しかけてきた

「君に言わねばならん事がある」

「えっ？」

「名前というのには尊い……、忘れた事は仕方ないが次こそは忘れてはいかんぞ」

「はい……忘れません」

「其れに君がどうしても考古学を学ぶのならいつでも来るが良い、歓迎しよう」

「有難う……御座います」

俺は新しい名前とこの場所にいる人達の優しさに目頭が熱くなりながらも我が家へと案内されていった。

第6話「名前と新居」（後書き）

名前はラテン語で『黒い』と『渡る』、そして『譲る』を組み合わせてみました。

船と海賊団の名前もラテン語なので統一しようかなと思いました。

次からは『俺』や『青年』ではなく名前が載ります。

一応ながら前作にあったブルック（骨バージョン）の再会イベントは削除しました。

一応、主は「JOJO」が好きです

第7話「勉強・鍛錬・心がけ」（前書き）

少し用事の立て込みで更新が滞りました。すみません。

第7話「勉学・鍛錬・心がけ」

あの新居を手に入れた日から半年も経ちました、どうも皆さんグラムです。

あれから勉学の方は航海術や医術を中心に取り入れていき、生活の方では町の人や学者の人達ともそれなりに親しくなった。

能力の方は今のところは風の回転で作り出すカマイタチの制御をしている、調整を間違えたら竜巻になるか辻風になるので危険だが。

その為もっぱら海岸でやっておく、一応六式とか基礎的な肉体の鍛錬も欠かしてない。

今日は世界地図で色々な所の地名を見るが、一応『偉大なる航路』を逆走してこの『オハラ』に来たと言うのは知っている。

今は考古学の博士号やポーネグリフの解読なども将来的な視野に入れている。

理由は航海術を学んだ後に航海の途中に石版を見て解読して、書きとめておけばそれだけで随分と真実へ到達するのははかどると思うからだ。

其の為に今のところは少しずつだがいろいろな事に挑戦している、海軍の目が光るようなマネは極力『あの日』までしたくはないので航海とかは遠い日になるだろうが……

其の思いはどのように実を結ぶかは分からないが、猛勉強や修行を欠かす事なくやった結果が出てきていたのは目で見て分かるものに

なっていた。

航海を禁じてさらに半年がたち此処にきて1年になったある日、俺にとつての吉報がこのオハラに来た。

「えっ、博士号を取る試験が!？」

「そうだよグラム、今年の試験が今発表された」

「受ける事は？」

「1万ベリーがあれば受ける事はできる」

「……なら受けます、金があります」

そう言つて俺は学者の人達に1万ベリーを渡してすぐさま家に籠り勉強に励んだ、其の傍らで能力の制御は少し頻度は減つてるもの、引き続き欠かさずやっていた。

其れはきつと此処を拠点にした以上は意識的にも『一蓮托生』を思つている俺自身の考えだろう、いくら真実を調べる事が命をかける事であつたとしても、俺だつて一緒に命をかけてみたいのだ。

其の為に認めてもらつには博士号という資格が、必要不可欠なのだと思つているからこうやつて今努力している。

其の思いが通じたのだろうか……、試験を受けて2カ月後に結果を発表されたときオハラの『全知の樹』で祝福された。

言うならば原作のロビンと同じと言つわけだ、ロビンは最年少だが俺は満点と言つ理由からこのように宴が行われている。

勉強の結果に引つ張られるように能力の方にも精が出てきた。

制御する段階にあつたカマイタチがやつと大小問わずに可能となつ

ただ。

現在における最低条件は満たされた事は嬉しい、しかし今は原作4
9年前である。

つまりこれから29年の間に『バスターコール』に対して対策を立
てる為には更なる精進が必要と言つのをしっかり考えるのだった。

第7話「勉強・鍛錬・心がけ」（後書き）

どうも専門学校の製作で遅くなりました、これからは少しは更新速度を上げて行きたいと思います。

第8話「時経・能力開発・処女航海」(前書き)

今回と次回で一気に時間飛ばして行きます。

第8話「時経・能力開発・処女航海」

どうも、グラムです。今はちょっと手が離せません。

現在は時間と言えば前回からおおよそ10年ほど飛ばしていますが、其の経緯をダイジェストで語ろうかと思えます。

カマイタチ開発完了（博士号習得） 『前回まで』

回転による至るところの関節外し開発。掛かった期間 2ヶ月『前回から2ヶ月経過』

弾丸を能力で止める方法を習得。掛かった期間 4ヶ月 『前回から半年経過』

半年の間、罫の開発の為に知識を取り入れる 『前回から1年経過』

回転細胞による回復術を習得 掛かった期間 3年（医術修了）
『前回から4年経過』

六式の技に回転の力を加えた技を習得 掛かった期間 1年 『前回から5年経過』

視覚の回転を習得 掛かった期間 5年 『前回から10年経過』

と言っ感じで一応勉強の方もちゃんと困らないように知識を手に入れた。

……時間を飛ばしたのには理由がある、現在俺は事細かに説明でき

る状態ではないからだ！！

できれば其の事情も含めて話したい。今、俺は船の上で航海している。

そしてミスからカームベルトに入ってしまった、そこを脱出しようと必死なんだ。

注意：カームベルトは大型海王類の巣である、大型の海王類の中には船を飲み込むほど大きな奴もいる。

こうなったのは理由があつて、あれは博士号を取って少しした頃にポーネグリフを解読させて欲しいといつたら……

「駄目」

「えっ、何で!?!」

「だつてお前はよそ者だろ」

「でも此処に住んで1年そこらならよそ者じゃないでしょ!」

「我々は命を！誇りを賭けているんだ!!、1年そこらの奴に我々と同じ心を持ったなど言われたくない!!」

其の後もそんな言葉の応酬で何回申し出ても、無理になつたので10年経つて航海術を身につけた今、ポーネグリフを探しに行く事にしたのだ。

……まあ、処女航海だからカームベルトにはまつてたけど。

多分期間としてはロジャーが制覇して2年だから、ログなど気にせず探索だけなら新世界以外に存在するポーネグリフだけなら1年で良い。

そうと決まれば行くべき場所は……

「やはり懐かしのリトルガーデンから探索するかな……」

そう言っただけははまらないように慎重に舟をこぐグラムなのだっ
た。

第8話「時経・能力開発・処女航海」(後書き)

前書きでも言ったように今回で一応1年間の航海をやった後に次回でオルビア誕生なので11年飛んでいきます。

もともと前作になかった新居や修行過程からの航海をやった分遅いです、すみません。

第9話「航海日記・世界貴族」(前書き)

遅くなつてすみません。

第9話「航海日記・世界貴族」

まず『リトルガーデン』へ行く事を決めた俺は、舵を取り『リヴァース・マウンテン』へと船を進めた。

あの海流に乗る事はさほど難しくは無かった、が……

「ぎもぢ……わ……るい」

すまないが今までハードな修行はしてきたが、いきなり想像以上に腹を圧迫されてしまつてこのざまだ。

初めてだがこれは正直慣れないと吐きそうだが、こんな事は予想するべきだったと今では思つてる。

そんな感想はほどほどにして速くリトルガーデンに行かねば、こんな俺の身の事情など必要ないな。

それにしてもこの場所より向こうに自分は居た時もあったが、こんなにも海が広いとは思わなかつたぜ。

月歩で上から見ていた時は平面で深く、今のように船の上ならば立体的に見えている。

結局1年間の探索の結果で見付かったポーネグリフはごくわずかだった、しかしいずれ世界に対して声を大にして言うべき推測の言葉が、最後の空白のページに事細かに書かれている事を航海日誌に記しておく。

当然行った場所についても何かしらの言葉を述べている。

リトルガーデンについてはこう述べてる。

『この島はいずれ大海へ飛び出していく人にとっては小さな庭だ、そして彼らにとっては別の意味ではあるが小さな庭である。』

『巨人島』 リトルガーデン

アラバスタについても同様として僅かにしか記していない

『人は苦勞をして大成する、此処を歩む事は海を渡り、大きな夢を持つ人は苦勞ではあるが苦痛ではないと思うべきだ。その様に心の骨組みが国や夢を作るのだから。』

『砂の王国』 アラバスタ

……この2つについては前回言った事があるので述べる事ができたが、後1つに関しては少しばかり頭を捻ったぜ。

『この島は樂園を隔離する場所、いわば三途の川への入り口である。初めて抱いた夢は此処であたかも、この場所に浮かぶ存在のようにはかなく消え行く。ここで退く事はまだできる、平穩と言う夢の世界はまだ此処に泡沫とならず残っている』

『シャボンティ諸島』

この場所についてはこう書いてはいるが、正直に言えば『新世界』に入る手前での最後の『樂園』だろう。

ならず者や冒険者にとって此処は分け隔ての無い世界だ、しかし例外で虫唾の走る存在がいるんだな、これが。

其れが『世界貴族』こと『天竜人』だ、この存在はかつて世界政府を作った20の王の末裔であって、自分達以外を『下々民』と呼び絶大な権力を誇っている。

正直権力自体にとやかく言う気は無いがこういった思い上がった奴をぶん殴りたくなるのもまた人情である。

人を撃つても咎められず、人の番いを奪つても泣き寝入りさせる…
…聞いていて腹ただしい。

其の気持ちを持って入ったのは『人買い』ができるオークション会場、さてと……むかつく面を、君がッ、泣くまで、殴るのをやめな
いッ！と言わんばかりにしばかせて貰うぜ、天竜人よ。

……すまないが結論から言おう、場面が変わり続けて申し訳ないが怒りの余り天竜人を3人ぐらい殴った。

その結果、海軍大将に追いかけて逃げ切ったがめでたく指名手配を喰らったのだ。

其の証拠に今、俺は空を月歩で駆けながら何処かで奪った、手配書を見て頭を抱えている。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 【初頭】 2億
3千万ベリ

シャボンティ諸島で殴った理由は、結婚していた家族のうちの女性を持っていこうとしたことが一つ。

オークション会場で人魚を落札しようといっていたのが一つ。

そしてもう一つは……俺が木の下で心地よく寝ていたら難癖をつけて蹴ってきたからだ。

最初の2つは人の尊厳や種族に対して偏見がないからというのと、人助けだが最後の一つは自分の寝起きが邪魔されてしまったのが理由だ。

聞くがせっかく良い気持ちで寝ているのに、揺さぶられるでもなく蹴って起こされたら気分は悪いだろう？

容疑が掛かるようにいちいち証拠を残して、シャボンティ諸島の人には迷惑をかけなかったから良いが、今度は感情を抑えないとな。

「まあ、人助けしたり1年も旅ができたからよかったかな」

そのような言葉を残してグラムはオハラに船を進めるのだった。

第9話「航海日記・世界貴族」（後書き）

時間的には遅いかもかもしれませんが今回の東北大地震についてはお見舞い申し上げます。

このサイトにも東北地方の方がいるとおもつと心配でなりません、1日でも早い復興を願っております。

第10話「赤ん坊との同居」(前書き)

オルビア初登場です。

第10話「赤ん坊との同居」

どうも皆さん、毎度グラムだが……

あの後ちゃんとオハラについて、家に帰って掃除もしたが埃が凄かったぜ。

そして見つけたことが一つ。

この世界はどうもデリケートだったようで、俺が介入した事で時系列というかこの時期には産まれているであろう人が居ないのだ。

其れはニコ・オルビアと言ってご存知原作ではあのニコ・ロビンの母親である。

……まあ母親が妊娠しているのももう少しではあると予測できるが。

クローバー博士（まだ博士ではないし7歳の子供だが）で此れなのだから、ロビンはバスターコールの後に産まれると言つのが確定している。

正直犠牲が少ないのだから其れは其れで良い事なのだが、此れではどうしても他の奴らも年が前後するんじゃないかと思う。

其の事を考えながら今までに集めたポーネグリフの資料と推測を研究して1年が経ったある日の事……

コンコン

「居ますよ〜」

「良かった、グラム。居たのか」

「……で博士、其の布にくるまれたのは？」

「ああ……ちよつとな」

なんとという事に60手前の博士が赤ん坊を抱いている、想像したら年がいった後の子供か孫だが……其の口から飛び出したのはどちらでもなかった。

「これはあの……その」

「どうしたんですか、博士。口ごもってたら話が分かりませんよ」

「お前も覚えているじゃろ？、あのニコの所の赤ん坊じゃよ」

「ああ……オルビアですか」

そうこの博士が抱っこしているのは、ニコ・オルビアであった。

俺が帰ってきて2〜3週間後に産まれてこのオハラ中で祝福されたのだ。

「で……其の子が何で博士の所に？」

「実は産まれてすぐに経過が順調と言うのもあって、このオハラのポーネグリフ探索隊に夫婦揃って志願してしもうての」

「まさか夫婦揃って……」

博士が苦虫を噛み潰したような顔を浮かべて呟いた。

「人数の被害は少なかったが、海軍に見付かり監獄入りじゃった。

秘密を漏らすまいとして毒を飲んだと、今朝隊長から連絡が入ったよ」

「其の中にオルビアの両親も？」

其の言葉に博士は重々しく頷いた。

「其れでお前にこの子の世話を頼むのが今日の用じゃったんじゃよ」
「何で……俺じゃなくてもまだ育て上手な人が居るでしょう」
「何故かと聞かれればお前が、一番ここの学者の中では暇を持て余しているからじゃ」

「ちなみに拒否は？」
「嫌と言っても無理やりさせるわい!!」

つまり俺は一つの道だけが残されたわけか、やるしかないな……

「分かりました、引き受けますよ」
「頼むぞ、ちなみに両親が死んだ事は……」
「この子が知れたがらない限り教えません」
「良かった、じゃあ失礼するぞ」
「さようなら、気をつけて」

そしてドアが閉まったが……

「さて、子供は離乳食が1歳を超えたら大丈夫と言うのは聞いた事がある。」

そういつてすぐ俺は炊いていた米を少しおかゆみたいにしてオルビアに食べさせる、首が座っているので横抱きにして吐き出さない程度に傾ける。

「キヤツキヤツ」

食べながら喜ぶオルビア、しかし……

「俺みたいなのがこの子の親代わりって大丈夫なのか？」

少しばかり不安を覚えるグラムだったが……

「キヤツキヤツ」

そんな事は露知らず微笑むオルビアなのだった。

第10話「赤ん坊との同居」(後書き)

省略させずちゃんとした理由をつけて矛盾点をなくす為頑張ってみ
たいと思います。

第11話「オルビア、博士への日々」(前書き)

オルビアに重点置いてます。

第11話「オルビア、博士への日々」

どうも皆さん、毎度グラムだが……

まずこの状況を助けてくれないか？

あの博士は一回も手伝いしに来ない、いや誰も俺の家に来て手伝おうか？など言っていてこない。

オルビアはどうか俺の言う事を聞いてくれたり心を開いているが、子供だから善悪の判断が無くこっちの手を煩わせる事をしてしまう。

そのため奮闘しているが、あっちこっちでやっているので息つく暇もないという有様だ。

航海日誌自体の完成も少しペースが落ち気味だから、思ったような時間を取るのが前に比べ格段に難しい。

そんな愚痴を言っても状況は改善されないからどうしようもないが……ってインク瓶を弄くるな、こぼれたら大変じゃないか。

「全く……何で俺は引き受けたんだろう？」

半ば無理やりだったが頑なに断るべきだったんじゃないのかと今では思ったりする。

二ペア

そんな俺の苦悩も露知らず、オルビアは無邪気な笑顔を俺に向けて

くる。

「お前は良い子だね、其の笑みだけでこの憂鬱な気分を晴らしてくれる」

そういつてオルビアの頭をなでる、すると「もっとして」とねだる様に頭を下げてくる。

この微笑ましい日々から1年後……

俺達は町の方の本屋に来ていた。と言ってもオルビアが見るのは俺に影響されてか、考古学や歴史関係の本が多い。

ちなみにオハラは学者だけの町ではなく、このように町の方で普通の生活を営んでいる人もいる。

「で……其の本が良いのか？」

コクコク

そうだよと言わんばかりに頷くオルビア

「じゃあ買つか、幾らだい？」

「3500ベリーだよ」

「はい、此れでいいかな？」

「有難う、又来てくれよ。」

この様にまだ2歳だというのに本を読むオルビア。

ロビンが10に満たない年齢で博士号を取ったのもこの光景を見ると納得できる、この子あつてのロビンなのだ。

「博士号を取つててよかつたな、正直こんな小さい子に追い抜かれたらショックだぜ」

其のつぶやきは誰に聞かれるわけでもなかつたが、後に彼女が最年少の博士号を取ったときグラムは驚くこととなる。

其の「後に」とはこの時間からさらに3年経ち、グラムがようやく『航海日誌』を完成させて子育てが一段落した、オルビアが5歳のころであつた。

其の1年前、つまり4歳のときにオルビアが博士号を取りたいと言つたことから始まつた。

俺はとりあえず自分が知っているだけの知識をオルビアに教えていった、オルビアは想像以上に飲み込みが早くあつたという間に俺の知っている事を吸収した。

その結果オルビアは、オハラの上最年少での博士号取得を実現させた。

此れによってオルビアは晴れて博士となつた、俺は其れをわが事のように喜び、とんでもない事を忘れていた。

……バスターコールへのタイムリミットが残り15年を切つたと言つ事を。

第11話「オルビア、博士への日々」(後書き)

時間は飛びましたが次回はオルビア出航までやりたいと思います。
分割しすぎと時間かかり過ぎは悪いと思っております、すいません。

第12話「オルビア出航の時、準備10年前」(前書き)

オルビア出航です、バスターコールの準備を今回から書いていきます。

第12話「オルビア出航の時、準備10年前」

前回オルビアが博士号を取った事で浮かれてました。

すいません、グラムです。

いくら嬉しくてもバスターコールの事は、忘れてしまったら洒落になりません。

しかし物事を進めるにしてもオルビアは勘がよく、もしかしたら見破られるかもしれない。

其の状況と気持ちが今の俺の行動を止めてしまっていた。

多少後手に回るのはこんな時だから無理も無いが、此れがとてつもなく長引くようであるならば置手紙でも何でもして家を空けよう。

そう思っていた矢先にとんでもない連絡が入った、毎回このようなタイミングで来るから始末が悪い。

なんと1年後のポーネグリフの探索に必要な隊員を募集すると言うのだ、この場面で其れを聞いたオルビアは当然のように志願をした。しかし俺には不安な事があった、オルビアは此れまでの間ずっと本の虫だったのだ。

其の為体力や護身と言うのは大丈夫なのだろうか、そう思った俺は最低限の鍛錬をオルビアに施す事にした。

六式の中でも速く行動するために『剃』と、避ける事の為に『紙絵』の2個を教える事にした。

そして1年後……結果としては、まだ俺から見て荒削りではあるが形にはなってきた。

そんな状況であったが……そうやって探索隊への加入の合否の知らせを、間近に迎えたある日……オルビアは俺が本当の親でないと言うのを何処かで聞いたのだろうか。

いきなり単刀直入に其の事を聞いてきたが、一応真実を知りたいかどうかの確認はさせてもらった。

結果は……そりゃあソフトにオブラートに包んで告げても、オルビアの勘の良さが逆に想像してしまったのだろう。

涙を流すオルビアに謝り俺は背中を叩いて落ち着かせて其の日は眠らせた。

それからは今までどおりに鍛錬とか読書で出発の日を待ち続けた、しかし俺は其の傍らで電伝虫である所に連絡を取る。

「はい、こちらはDr・ベガパンクですが……」

「ああ、こちらは其の……賞金首のグラムと言えば分かるかな？」

「何故こちらの連絡先を知っているのかは、置いておきどんな御用ですか？」

「こちらが持っているある物を武器へ加工して欲しい」

「どういった物を具体的に言ってもらえますかね？」

「新世界の生物の1部分だが」

「気になりますね、良いです。引き受けましょう」

「有難うございます、それでは失礼」

そう言い俺は電伝虫を切った後再び別の所へ連絡を繋ぐ。

「はい、こちらシャボンティ諸島の第3GR造船所です」

「こちらはグラム・トランセオ、上への通信は可能かな？」

「はい、直ちにお待ちください」

一度天竜人に対して拳を振るった事や、奴隷市場で暴れて売られている人達を救出した事で、シャボンティ諸島の人達は俺の事を良い人だと思つて懇意にしてくれている。

其の為今回は其の人脈を使ってバスターコールの際に、逃げるのに都合のいい船を用意してもらふのだ。

それから暫くして上の人間が通話へ出た

「はい、どうもグラムさん変わりましたがどの様なようでしょうか？」

「悪いが此れから船を都合で3艘ほどお願いしたい」

「えっと、完成にはどれほどの期間を？」

「8〜9年を目安にしているが大丈夫かな」

「いえ、それだけあれば可能ですよ」

「大小の関係はどうなる？」

「関係なく仕上げる事が可能です」

「なら1艘の素材はこちらで都合するが、あとの二つはそちらに任せてもよろしいかい？」

「はい、どんと任せてください」

其のやり取りを終え暫くしたところ、遂にポーネグリフ探索の部隊が

出航する事となった。

「今日から何時まで探索に行くんだ、オルビア？」

「分からない、でもちゃんと頑張ってくるよ」

「そうか、元気で頑張れよ」

そういつて俺はオルビアの頭を撫でる。

オルビアは赤い顔をしているが一体何故赤いのかは分からない。

其の後乗り込む際に俺はオルビアに贈り物をした、其れは『無病息災』と書かれたお守りだ。

この言葉は新世界である『ワノ国』にある言葉だが、オルビアは其の事を気にせず受け取ってくれた。

そして乗り込む時にオルビアは大きく息を吸い込んでいた、何を言う気なんだ？

そう思った時大きな声で、きつと何年経とうともこの告白の時を忘れることは無いだろう、そう思えるほどに印象的だった。

「私どんな事があっても元気に帰ってくるよ、貴方を私の方へ振り向かせる為に！！」

そう……俺はオルビアがある時に言った言葉に、返答していたのだがオルビアは忘れてはいなかった。

……確かあれは4歳のまだ修行もしていない頃だった。

「私、グラムのお嫁さんになる!!」

俺はその時から他人行儀な呼び方から名前と呼ばれていた、オルビアが俺に対し心を開いたからだろう。

其れに対して返した言葉がこの言葉だったが今思うととても恥ずかしく聞き苦しい返答でしかない。

「オルビア……とても嬉しい言葉ではあるんだが、オルビアは小さいから未だ少し無理だなあ」

「なら私もっと大きくなる!、私が何歳になったら無理な事にならないの」

「大きくなるって……うーん、そうは言われても困るなあ」

「なら16だったらどうか、ちょうど10年経ったぐらいだよ、良いんじゃないの?」

「まあ……其れくらいなら小さくは無いだろうな」

結局執意に押し切られて、返答をしてしまうが正直な所を言えば、個人的には親の気持ちや目線ではなくそういうような目で見てくれたことが嬉しかった。

だから今のこの告白に対して真剣に俺はこう答えた。

「絶対に無事に帰って来るんだぞ、10年でも何年待っててやるからな!」

そう大声で返したら言うオルビアは顔を真っ赤にしていた、俺はその言葉に続けてこう言った。

「本当に待っているからな、約束だぞ!!」

其の言葉を最後にポーネグリフ探索隊の船に乗って、オルビアは海へと進んでいった。

第12話「オルピア出航の時、準備10年前」（後書き）

本当に細かいなと思います、前作の事を考えたらまだこれから準備期間でベガバンクなど登場します。（前作ではちなみにこの時期にサウロが登場していました）

そして前作でのヨーヨーを止めて何かサボに持たせる武器の募集をしたいと思います。

（悪魔の実を食わせた武器でもいいのですがその場合は何系か（動物系ならモデル：　　と言う風に）をお願いします）

もうすこし遅くても良いけれど海軍側についてからの依頼では矛盾が発生しますので……

第13話「準備期間」(前書き)

今回は10年の経過を細かくやります。

第13話「準備期間」

グラム Side In

俺はオルビアがポーネグリフの探索の為に、出航してすぐに行動を始めた。

船の素材は新世界や裏ルートなどの方面から用意した。

後の『海賊王』であるゴールド・D・ロジャーの船と同じ素材である『宝樹アダム』を素材にして船を作るから人脈や今使えるものをフルに活用して探すのだ。

それ以外の2つは機動性に優れた船にして、海賊に狙われても逃げて再びオハラに戻る町人と学者の為の船なのでそんなに素材を厳選しなくても良い。

寧ろシャボンティ諸島にある造船所に用意されている素材自体は悪くない、只俺が使う船の素材が破格なだけである。

其の探索は結構な時間が掛かった、何せ裏ルートなどを介してもそう簡単に市場に出回ることは無い。

探索を始めて半年ほど経ったある日、シャボンティ諸島の第3GR造船所から連絡が来て入手したとの事。

しかし俺はシャボンティ諸島に行ってやった事は先払いにしてもらって、ベリーを払っただけでやりたい事があるから先に2つの方を優先して欲しいといったのだ。

其のやりたい事とは…… Dr・ベガバンクに頼んで船に悪魔の実の力を有効活用した機能を搭載してもらおうというものであった。

其の為俺はベリーを払った後即座にバルジモアへと向かうことにした、海軍への技術提供がなされる前に訪問しないと後で困る。

Dr・ベガバンクを見た時に俺は驚いた、なんとも若い青年だったのだが俺を見た瞬間に顔つきは変わった、どうやら俺の持っている鎌が気になるらしい。

Dr・ベガバンクは訪れてすぐにドン・カマキリリの鎌を見せて欲しいといった。

其れを見た時にDr・ベガバンクは険しい顔をした、どうやら彼自身でも見た事の無い代物らしい。

しかも触れただけで斬れてしまうと言うのはどうも加工には向いていない、それもあつてか性質を丹念に調べ上げてから作業へと取り掛かる。

流石のDr・ベガバンクも性質が手を焼くものだった為、船への搭載と並行して作業を進めた。

船へと施した能力の搭載はこの様になっている。

スクリューに廻天乃力で加速性能の上昇や、風の力を利用した竜巻の砲弾で船の搭載量および重さを減らす事による旋回性能の上昇などで、力の利用から船の機能を上昇させるような仕掛けを作ったのだ。

其の搭載の終了と同時期に鎌の方の加工も終わった、刀になったが

見るも鮮やかな緑の刀身を携え、持つところは紅色、柄は藍色と言
う美しいの一言に尽きる一振りができた。

そして船が予定していた3艘ができたのは行動を起こしてから3年
程経った時だった。

予想よりはるかに速いと思っていたが、どうやらこのごろ船の製造
が少なく修繕とかが多かった為に、人員の半数が船の製造に乗り出
してくれたとの事。

その事については感謝の気持ちを示させてもらったが多分上の人が
恩人だと言ったんじゃないのかなどと少し勘ぐってしまう。

そして出来上がった船はオハラから見えない所に定着させて、バス
ターコールが来る数日前に少しずつ移動させる事にした。

その際オハラ近くまで船を近づける作業は、造船所の人たちが手
伝ってくれたから思ったより速く着いた。

Dr・ベガバンクからはバルジモアから帰る時に大きな袋を買った
が、どうやら「今は開けるな」というからには大事なものが入って
いるんだろう。

そして俺は更なる準備の為にオハラへと帰った。

グラム Side Out

ベガバンク Side In

彼に渡したものは私が研究した成果を詰めた袋だ、其れをどう使う

かは彼次第だが何故渡したかといえ、彼の依頼の終わる前に海軍から協力要請の手紙が来たのだ。

海軍のお抱えともなれば研究費などが負担されて、今まで以上に有意義に発明できるのだ。

つまり損得勘定を考えた結果なのだが、受ける前に受けた依頼を丸投げは研究者として汚点であり其れを終わらせるのははじめなのだ。だからこそ返事を遅らせて時間を稼いだ、そして彼には最後のモニターとして今までの発明の中の武器を餞別にあげたのだ。

其れを生かすも殺すも彼次第だが、無碍に扱わないでくれよ。

「乗ってもらうけどおゝ準備はいいかなあゝ？」

「ええ……良いですよ、ボルサリーノさん」

グラムさん、すまないが次に見たときは裏方ではあるが敵同士だな。結局賞金首と海軍は相容れないものだ、そして其のどちらかに味方するというのは敵でしかないだろう。

そう思い最後にバルジモアの光景を目に焼き付け故郷を後にした……

ベガバンク Side Out

グラム Side In

俺はオハラに帰ってきた後に能力による地雷を埋め込み、バスター
コールで上陸してきた中将たちへの奇襲を考え行動に移していた。

とは言っても海岸部分の砂浜が主となるため人が来ない夜に作業を
進める。

しかし準備期間中だというのに其れを中断する出来事を博士から言
われる……

「クローバーに博士号のための勉強を教えてやれ」

「嫌です」

「断つてもクローバーにはお前が先生だといってある」

「ずるいぞ！、後から言うなよ」

「こつしとかなないと断るしな」

そう言つて去つていった……お前らが教えるよ。

オルビアの時と同様に基礎的なものから深いものまで教えて深夜に
作業。

まあ……正直オルビアの方が理解が早かったと言つのもあって、教
える事に時間が掛かった。

作業と並行して行っていたが先にクローバーの博士号取得が早く、
オルビアの時のように祝い事が行われた。

オハラでの地雷の埋め込みを始めて6年、其の4年目にクローバーは博士号を取得しているので俺が今まで集めた結論を伝えていく。

此れで遂にバスターコールまで1年と迫る。

そして今俺は夜の海岸を歩いている、地雷とはいえど能力を組み込んでいるから危険は無く、歩く事ができるのだ。

後はハグワール・D・サウロを待つて何時ごろの迫ってくるか、其の頃合でどう行動するかである。

「さあ……伸るか反るかの大一番、成功させてもらうぜ」

夜の海岸で上を見上げ呟く、そんな俺の顔は戦いの興味からか微笑んでいた。

第13話「準備期間」(後書き)

次回でサウロとの出会いをメインに頑張ります。

主人公の笑い声は何か良いでしょうか、サウロ、ドリー、ブロギーに影響されて個性的なのか、普通の笑い声かどちらが皆さんは良いですか？

第14話「ハグワール・D・サウロと準備完了」(前書き)

サウロとの出会い、準備完了を書いていきます。

第14話「ハグワール・D・サウロと準備完了」

グラム Side in

準備があらかた終わって後は学者や町の人達に危険を呼びかけて避難させるだけとなってから2週間ほど経ったある日の事……

「海賊がオハラに来ている？」

「グランドラインから引き返してきた奴らで……」

「懸賞金は幾らほどだ？」

「1億1200万ベリーだったが、いけるかい？」

「当然だ、行って来る」

そう言つて俺はベガバンクが作つてくれた剣を腰に差して空を駆けていった。

グラム Side out

海賊 Side in

「お頭、今回も大漁っすね!!」

「おつよ!、次の目的地はオハラとか言う所だ」

「凄い宝はあるんですかい？」

「いや、宝は無い。しかし、貴重な文献を盗んで売るのはさ」

「ほお、この俺のいる島から取れると思つていたのか？」

「お前、何者だ!!」

「お頭、こいつはあの『空駆け人です』!!」

「なっ、こいつがか!？」

「その下っ端、よく俺のことを知っているな」

「知ってるも何も、天竜人を殺した罪で初頭で2億ベリ―越えを果たした奴は、嫌でも有名になるぜ！」

「とりあえずお前を殺してうちの懐を暖めさせて貰うぜ！！」

「できるならやってみろ、俺の刀『レフェリア』の刃に掛かりたいならな……」

「全員やつちまえ！！」

「おおおお！！」

其の言葉で一斉に剣を振り下ろしてくる船員達、それに対して俺は縫うように動いて剣を振るっていく。

「えっ？」

そんな気の抜けた声が出た後に振り向いた俺の目に飛び込んでいたのは……

「なっ、うちの船員が一人も残らず剣ごと切られているだっ！？」

真っ二つとはいわないが全員が重症の状態で転がっていた、船長は其の惨状を見て隠し持っていた銃を俺に向けて引鉄を引いた。

「ほう、そんな物を隠していたなんてな」

あえて俺は受けた、能力を使う事で不死身に見せて、相手を怯えさせる事ができるのと無駄を省く為だ。

「ひっ、ひいいいい！！、なんで頭を撃つたのに死なないんだあ！！」

「さて、もう十分だろう？」

「よっ、寄るなあ！！、化け物お！！」

「化け物で結構だ……じゃあな」

其の言葉を最後に俺は剣を振り下ろした。

海賊 Side Out

グラム Side In

船長を一応オハラではない別の島で引き渡す為に町人を代理に立て懸賞金を受け取った。

「それにしてもこの刀は凄まじいな……」

正直此処までとは思っていなかったので驚いた、どう考えても相手の刀ごと斬るのはあげつない。

そんな事を考えながら帰っていく、当然懸賞金は町人が受け取ったので俺のものではない。

それから海賊が接近した際の用心棒として海に出て行くことが多くなった、其の為懸賞金がほんの少しばかり上がる事となった。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 2億5千万ベリ

この状況としては別に懸賞金の上昇は問題ではない、どうせオハラのバスターコールに生き残ったら跳ね上がるのだから。

そんな事を考えていた帰り道、カレンダーに印をつける事や情報誌を見ないのが仇となり、この男がこの海域まで接近していたのを知らなかった。

まあ……そいつは海岸で横たわっていたんだけどな。

「ハグワール・D・サウロ……」

「ハアツ……何で、おめえワシの名前を知ってるでよ？」

「（原作見ましたとは言えん）いや……有名じゃないか。其の前に其の足、怪我してるんじゃないのか」

「ああ、…ハアツ……こちら辺に…ハアツ…腰を掛ける岩と…ハアツ…かはねえでよ？」

「あるけど直してやるうか、その方が良いだろ？」

「出来る訳…ハアツ…ねえでよ…、医者でも…ハアツ…ねえ限り」

「悪いが……もうこっちは大事な事があるんだ、治させて貰うぞ」
「大事な事……」

そう言つて足に手を置いて細胞を回転させる。

グルグルグルグル……その様な音は聞こえないが感覚的なものとして感じ取った、サウロの足は元の健康な状態へと戻った。

「なっ……おめえ『能力者』だったのか？」

「まあな……とりあえず恩の押し売りだがやってもらうことがある」
「治してもらったんだからそれなりの事はやるでよ」

「なら町の方まで下りて行くから荷物を運ぶのを手伝ってくれないか？」

「まるで町に泥棒しに行くみたいない方でよ」

「一応嫌な予感がするんでな、速め速めの行動ってわけだ」

「嫌な予感？」

「お前がもし海軍将校だったら困る訳さ、この場所はな」

「えっ……、まさか此処は『オハラ』って言う場所でねえか!？」

「其の通りさ」

「何てことだ、ワシはもう『オハラ』に流れて来てたのか!！」

「慌てるな、今からやるべき事をやるんだからよ」

「何をやる気ですよ!？、もうあと4、5日で『海軍』の『軍艦』が来るんだで!！」

「此処に軍艦なんてとてもじゃないが平和な話し合いではないな、まさかあの最悪の掃討行為『バスターコール』じゃ無いだろうな？」

「何処まで知っているでよ……、其の通り『バスターコール』だで!！」

「良かったな、避難させる為の準備は完了していたって訳だ」

「なっ、もしかして町に下りたのは避難勧告するつもりだったでよ!？」

「そつだよ、さて急ぐぞ」

「一応聞く事があったがおめエ、名前は？」

「グラム、グラム・トランセオ・リクトウムだ」

「ワシの名前は知つとつたからええか？」

「ああ、覚えているからな」

「じゃあ、避難勧告始めるでよ!！」

「おう!」

其のあと勧告から1日経った後重要なものを除いて全ての町人の避難に成功した。

「さて……次は学者達だ、話して一発で良い返事が来るとは思っていないけどな」

「まあ、ギリギリになっても良いから全員無事なら良いですよ」

そう言つて俺たちは『全知の樹』へと向かい、後2〜3日の間に海軍が危険な方法でこの『オハラ』への襲撃をしてくるというのを伝えた……が

「ワシらはここから立ち去らん！」

「こら、こつちの言う事聞けよ……！」

「死ぬのと知識を手放すのを選ぶなら死を選ぶわ、馬鹿もん……！」

「船に積んだら良いだろうが、半分は大丈夫だろ……！」

「後の半分はどうするんじゃ、其れが問題じゃろ……！」

「其れは俺がどうにかして運ぶつての……！」

「お前が何を言おうとわしらは此処から離れんわ！、帰れ……！」

「帰らねえ……！、俺の言う事を承諾するまでな……！」

其の後のやり取りは「速く此処から脱出しろ」と言つのと「嫌だ」という禅問答の繰り返しで、結局お互いの譲歩として、『海軍』が『バスターコール』の権限を誰かに渡しているかの確証が得られた時逃げる」というものであった。

かくして形だけとはいえ『バスターコール』への準備は完了した。

第14話「ハグワール・D・サウロと準備完了」(後書き)

今回でバスターコールへの準備終了です。

刀の名前は前作の時に募集かけた時の意見で採用された名前です。

多摩さんありがとうございました。

後何話ほどで追いつくだろう、前作の時白ひげ戦をやってましたがやはりやめた方が良かったですかね？

第15話「バスターコール非常戦線」(前書き)

今回でオハラ編の見せ場『バスターコール』が始まります。
それにしても物語の前提条件としては『不幸を出来る限り失くす』
なのでベルメールさんを殺さない為にも、アーロンはルフィじゃな
くてグラムが倒すので代わりにオリキャラが必要になります。
なので後書きで募集をかけるのでどうかご協力お願いします。

第15話「バスターコール非常戦線」

グラム Side In

さて……今日は合ってるならば、運命の4日目な訳だが俺は平静を装って昨日と同じ様に『全知の樹』へと行った。

「今日が期限内だ、あの巨人に観察してもらってるがな、十中八九海軍は来るぞ、どうする気だ？」

「確かに危険と思って未だに全ての解析を終えていないであろう本は積んだ!!、しかしこの『全知の樹』は放っておけん！」

「だから言ってるだろ、俺が守り抜いてやるってさ」

「其れに昨日にも言ったじゃろうが、確信になるまでこの場所からは動かん!!」

この様に避難に関しては昨日から引き続き、禅問答でどうしようもなかったが確かに俺たちは確信になるまでは、保留の約束なのでこれ以上は強くは言えない。

俺は海岸へ行きサウロに海軍の軍艦が来ていないかどうか聞く。

「まあ、今の所はぼんやり見えてる、しかし誰が乗っ取るかは分からんだよ」

「サウロ、一応参考までに聞くがな、大将が出張る事は？」

「ここが本当に暴力的な凶悪犯だらけとか、そう言う危険な所なら来るだで、でも滅多な事がなければそう言う事は無いだよ」

「もしだぞ、仮に来るとして『こいつはヤバイ』ってような奴は居るのか？」

「海軍の中将はそういう奴が多いですよ、自然系の能力者である『ク

ザン』や『サカズキ』、『ボルサリーノ』そして能力者ではないが、海軍の中では『英雄』の名で通ってる『ガープ』が要注意人物だで」「かなり詳しいな……やっぱり海軍に関係しているのか、サウロ？」「デ……デレシシシ！！そんな訳無えでよ、ただ情報通なだけだで！！」

「デレシシシ！！そうか、疑って悪かったな」

俺自身は前から笑顔は作れたが、声を出して笑うのはどうしても下手という事でサウロの「デレシ」を真似してる。

こんな事言ったら悪いが、もしかしたら巨人族は笑うのが結構下手なのだろうか？、だってドリーさんとブロギーさんは「ゲギャギャギャ」や「ガババババ」だったし。

そう思っていたらサウロが、何と顔を青くして軍艦を見据えていた。

「何で……何で……奴が来るんだで！？、こいつは本当にヤバイですよ！！」

「一体どいつが来たんだ、サウロ？」

「今言ったばかりの『クザン』中将ですよ、速く『全知の樹』に行つて来るだで！！」

「……おい、お前が代わりに行つてこいよ、サウロ」

「……それにはちゃんと理由が有るだで？」

俺は其の質問に対しての答えを示す様に力強く頷く。

サウロから聞いた話だが、オルビアは1度海軍に捕まってからサウロが助け出した後、このオハラに向かっていたという。

そう、この場所に居ては恐らくオルビアには会えない、だがしかし俺が行つてここにクザン以外の中将が来ては、学者を助けるという目的も絶望的だ。

そうして居たらクザンは海へ飛び降り、手を海に向けてこう言った。

「氷河時代！！」
アイスエイジ

そう言つて触れた海は見る見るうちに凍結して一つの通り道となつた。

「こいつを見てからずっと血が滾っているな……、ドリーさんやブロギーさん以来の「強敵」って訳か」

そう言つてる間にもこちらへ向つてくるクザン、遂に目の前にまで来た。

「おい、お前さん、何でこの島に居んの？」

「此処は俺の故郷だ、そしてお前達中将連中を止める為に此処にいる、大方バスターコールの為に海軍くんたりしてここまで来たんだろう、ご苦労さんな事だ」

「いやいや、天竜人殺しの重罪人が此処に居るだけで驚きだつてのにさ、この後まだ有ると思うと……ねえ？」

「ハッ！！この俺が言うに事かいて重罪人だと！？、ふざけた事ぬかすんじゃないよ、糞餓鬼如きが！！、俺はただ知りたいものを知ろうとしたりしてる奴等の為に此処を守るだけだ、其れに其の天竜人殺しも天竜人のクソが、人の妻を横取りしようとしたから制裁を加えただけさ、天竜人や五老星とか言う奴らの、権力に振り回されている御犬に言われたくは無いな！！」

そう大声で啖呵を切つてやったら何時の間に来たのか、おっさん2人が居た。

其の内1人は飄々としているが、もう1人はこめかみに青筋を浮かせて怒りのあまり震えている。

「そこまで言うがお前は平然と人を殺して、此処におる無害な民間人の不安を煽って苦しませとるんじゃあ、お前さんには一般人の為だとかそう言う正義は無いんかあ!!!」

怒号を飛ばしてくる奴、多分こいつが『サカズキ』だろう。

「言うな、だが俺は自分のやりたい事をしてるし人も救ってる!、そいつが信じてるものに正直に向き合ってたら、それはそいつの「正義」なんじゃないのかい!!!」

「確かにこいつの言う事は一理あるねえ」

なんか飄々した喋り方だがこいつが多分『ボルサリーノ』か、……なんて事だよ、後の三大将が一気に集合か。

悪いな、許してくれ。オルビア、再会は出来そうにない。

グラムは戦う前に約束を交わした女性、ニコ・オルビアとの再会が出来ぬ事を悔やんだ。

グラム Side Out

サウロ Side In

ハアハア……ワシは今、学者の人達がおる「全知の樹」へ向かった。つた。

グラムの奴の方を何気無しに振り向いてみたら有ろう事が、ワシがさんざ危険じゃと言った『クザン』『サカズキ』『ボルサリーノ』がグラムの前におった。

ワシは本当に大丈夫なのかと思った、普段からのんびりした奴じゃからどうしても勝てるイメージっちゅうのんが浮かばなかった。

そしたら森の方から誰か分からんが、4人程出てくるのが分かった。

「其の女を逃がすなあ！！、この俺に楯突く意味を教えてやれえ！！」

「しつこい男ね……」

2人はどうやら今叫んだ男の部下のようじゃが、何か内心は嫌そうな顔をしておった。

1人は変な奴で気に障る話し方をした男じゃったが、もう1人の女の方をワシは知つとった、其れこそグラムの奴が心の底から会いたいと願つておった人じゃったから。

「ええい、お前らしつかりと捕まえる！！」

そんな事を言つとる間にも、ワシは進みながらオルビアを見とったが流石と言える、船の脱走での戦闘の時にも見せてもらったが見事な体術じゃった。

「くそっ！この役立たず共め！！、女1人捕まえねえのか！！」

其の男は部下がやられたというのに、自分本位で動いておった。ワシは怒つて其の男を思いつきり放り投げてやった。

するとオルビアが心底驚いた様にワシを見て……

「サウロ！、何故貴方が此処に居るの！？」

「今はそんな場合じゃねえでよ、速く『全知の樹』に行かねえと駄目なんだで!!」

「何で!?!、何があつたの!!」

「このままだと、バスターコールが執行されるんでよ!」

「なつ、そんな嘘でしょう!?!」

「本当だで、今行つたらどうにか軍艦の砲撃前に、避難船に着いて逃げるまでには間に合うでよ!!」

「ならグラムも其処に?」

「いや……グラムはオハラに一步も入れない為に、海岸で中将達を止めるって行つて聞かなかつたでよ」

「そんな……中将5人相手は流石に無理でしょう!?!」

「でも今ワシらに出来るのは、グラムを信じて『全知の樹』に行く事だよ」

「でも!!」

「いい加減にするでよ、オルビア!!」

「えっ……」

「確かにワシは鬼のような事を言つとる、じゃがお前さんに会いたいのにおおつとせず、自分の気持ちを押し殺してまで、この島を守ろうとするグラムの奴の気持ちを汲まにゃ、ワシらはいかんでよ!!」

「……………」

「其れに聞くが、お前が信じる男は約束も守れん男じゃと思うだで?、オルビア」

「思わない……負けるなんて信じない!!」

「なら行くでよ、『全知の樹』へ!!」

サウロ & amp; オルビア Side Out

グラム Side In

「で、誰が一番に来るんだよ？」

「ワシじゃあ、『空駆け人』お！！！」

剣と同じ位の速さで俺に近づくサカズキ、そして軍艦に居た海兵達が一気に降りてオハラへと侵入しようとしていた。

だから俺は……

「お前らのような三下が気安く入るんじゃないやねえ！！！」

野生で育った時以上の気迫を持って大声を出した、すると海兵達は……

バタバタッ！！

なんと倒れてしまった、泡を吹いているような奴も居る。

「おいおい、まさか霸王色の覇気を……」

「持っているとはねえ〜」

クザンとボルサリーノが傍で見て言うが、俺からすればお前達も、俺が時間を掛けた準備の餌食だ！！

そう思って手を打ち鳴らした。

ゴォ！！

大きな竜巻がクザンと、ボルサリーノの2人を閉じ込める。

「こいつは……!!！」

「これは驚いたねえ、すっかり入った時から標的って訳かあ」

「さてと……これで横槍無くお前とやれるぜ、来いよ!!、飼い犬さん!!！」

「大口叩くんじゃ無いわあ!!！」

怒ったサカズキの体からポコポコと音を立てて真っ赤な固体を交えた液体が流れてくる。

「これがお前の『能力』かな、サカズキ？」

「火を喰らい尽くす、マグマ人間の攻撃を受けてみんか!!！」

ポコポコと煮えたぎったマグマの一撃は紙絵で避けたが、今さっきまでグラムが立っていた位置から、地面は崩壊して海の波に流された。

「ちっ、もう1つの罫使うか……」

そう言っ腕を左右に開くと風の壁がグラムの後ろ、民家が無い所ギリギリまで広がった。

「ふんっ、言うだけ言っってそんなズルイ手を使うんかい」

「黙れ、自然系能力者の方がズルイだろ」

「じゃが逃げてばっかじゃあのお、何の意味も無い事を教えてやるわあ!!！」

再びマグマの一撃が来るが瞬間的に剃を使って回避し懐まで入り込み、其処から一気に首筋目掛け指銃を放つ。

「ふんっ、浅は……かつ……」

ダッ！！

サカズキは距離を取りながらも少し動揺をしていた、大方自分が自然系の能力者で大丈夫だと思っただろうが、こっちはメルヴィユでの生活の時に身体の構造が変な奴らと戦った経験から、どのように攻撃を加えればいいかを試行錯誤してきた。

……がしかしクザンとボルサリーノが戦えないからか、解説しながら出るのに努力している、どちらかに集中して欲しいものだ。

「あらら、武装色の覇気まで……」

「今は結構サカズキの方が劣勢だねえ」

「まあ、カツカしてるってのが理由でしょ」

「落ち着いたら普通にいけるのにねえ」

しかし距離を取っても無駄だというように、俺は剃でサカズキを追い込みに掛かる、時間を稼ぐとは言ったのだが、倒せるなら倒しておくのに越した事は無い。

ガッ！、ドンッ！！、バキ！！！！

いいタイミングで3連撃を入れて其の後を追いかけるが、サカズキはマグマの力を使い反撃をする。

一撃を当てたら致命傷を与えられると信じているからか、俺の攻撃を受けながらタイミングを計っている。

しかしいい加減この劣勢な状態に痺れを切らしたのか、大技をするであろう大きな構えをして距離を取る。

「グウツ……勝てんならば此れでオドレも道連れじゃい!!」大噴火」あ!!!」

大きなマグマが降り注ぐが此れはあまりにもきつい、俺の目は降ってくるマグマで塞がっている。

そしてどこかこの行動に対しては嫌な感覚がある。

それは野生の奴らと同じ決死の姿勢で、こちらが逃げようとしても身体が縫い付けられている感覚。

そんな中、俺はどうにか其の感覚を振り払って、何処に着弾するかを察知して避けていくしかなかった、しかしそれ以外にも何故か嫌な感覚があった、俺の知らない場所で一体何が起こっているんだ!?

「いやあ、まさか見聞色まで有るとはなあ」

「驚いちやっただけどお……」

「覚悟はええか!!」空駆け人」お!!」

そう言いながら3人の内ボルサリーノとサカズキが前に、俺の後ろに居たのはクザンで手を掴み地面に付けている、つまりサカズキは目晦ましをしながら、他の2人を解放して優位に立ったのだ。

「まあ、流石に其の手が厄介なんでね……アイズエイジ氷河時代!!」

「ぐああああ!!」

其の言葉を発した瞬間俺の手は凍らされ海岸に張り付いていた。

「さて……此処からはわしらがあ」

「やらせて貰うけえのお!!」

「けっ、この手が自由になるまで好きに翳っていれば良い。それがお前らにはお似合いさ」

そう言いながら俺は腕をへし折る為に力を入れている、なぜならこの腕はもう使い物にならない。

だから今すぐ新しい腕が必要なのだ。

「おいおい、何をしようつての？」

「気でも触れたんじゃないのかのお」

「まあ、今の内にやるよお」やまがにのまがたま「八尺瓊勾玉」□「！！」

「さあ、折れる！！折れてみせろよお！！」

危なさを感じてきて俺は力をさらに込める、少しずつバキバキと軋んで来た、良いぞそのまま……

「本当にそっちは気が触れてしまったねえ」

そう言ってボルサリーノがレーザーの発射をする。

ドンッ！ドガッ！！チュドン！！！！ダダダダ……！！！！！！

「さて、お終いじやろう」

「でもこの空気の壁が通れないって事は……」

「あれだけやってるのに生きてるって事だねえ……グッ！！」

俺は腕が千切れながらもギリギリどうやら避けれたようだ、紙絵万歳！！と言いたい所なのだが、本当の所を言うと死を感じる程にヤバイ。

其れだというのに血が滾りすぎて、劣勢な状況なのにまともに考え

られない、今俺の頭に有るのは、目の前に居るこいつ等を倒したいと言っ感覚。

そうだ、今すぐこいつ等を……其の思い一つで俺はボルサリーノの奴を蹴り飛ばした。

「おいおい、これ位で吹っ飛んでんじゃねえよ……まだこれからだろお!!」

「ありや、酷いな……」

「箍が外れてしまったんかのお、腕が無いのに笑つとる、痛覚が切れたんじゃろつう」

「もう殺してでも止めねえとな、ボルサリーノの奴がやべえ」

「喋る前に手を出したらどうなんだい、お二人さん？」

俺は振り返りざまにそう言っで一気にクザンとサカズキの2人を回転蹴りで吹き飛ばした。

グラム Side Out

サウロ & オルビア Side In

「やっと着いたで、でも……」

「どうやらあつちじゃ先に始まつてるみたいね」

「グラムの奴がやられたらあいつ等が来る、でもまだ来ないって事は食い止めてるんでよ!!」

「ええ、速く……って貴方!？」

そう言ってオルビアが驚いた目の先に居たのは、サウロによって投げられた筈のスパンダイナだったのだ。

「よくもさつきはお前らやってくれたな、こつなったらもう世界政府とかどうでもいいぜ……」

そういつてスパンダインは金色の電伝虫に手を掛ける。

「なっ、お前其れを本当に押す気だで!？」

サウロは柄に無くあせる、グラムには言っていないからグラムは知らないが、あの金色の電伝虫……『ゴールデン電伝虫』こそが『バスターコール』のスイッチなのだ。

「当然だろ、お前らが悪いんだぜ……俺をコケにするからよお!!」「狂ってるわ……、其の行動がどれだけ酷い事が分かってるのに、自分1人の激情に任せるのね」

「けっ、偉そうに言うがな、これは五老星からの御達しなんだぜ」

「そんな事は理由にはならんでよ!!、其れを押す前に理由を聞かん様な、弱卒には飽き飽きだで!!」

「そんなご大層にぬかすんならよ、其れに見合うだけの理由って奴を聞かせてくれるんだろうなあ、デカブツのうすのろ!!」

「なら来るといいわ、長官さん『全知の樹』へね……」

そう言われスパンダインは、サウロとオルビアに連れられて『全知の樹』へと向かうのだった……

第15話「バスターコール非常戦線」(後書き)

やはり戦闘描写は相変わらず難しい……。

前書きであったようにオリキャラの募集をしたいと思います。

番号でやっていきます、期間自体は原作でミホークVSゾロが終わるまでです。

ちなみに戦うのはルフィです(グラムではありません)

?・名前(原則としてHな言葉、下品な言葉はお控えください)

?・悪魔の実の有無(自然系・動物系) の実「モデル・」(超人系)

?・悪魔の実の有無に限らず持たせたい武器(素手の場合は拳とか空欄で良いです、ちなみに希望なので悪魔の実を食わせた武器とか、自分の好みの武器も当然書いて下さって構いません)

?・書かなくても言いですが性別や年齢など、細かい設定を希望する人は書いて下さって構いません。

押し付けがましいお願いですが協力してくださると幸いです、では又次回で会いましょうノシ

第16話「1ON4終了、逃亡の時」(前書き)

今回で一応ガープと『3中将』の戦いは終わりです。

前回の募集では貰った2人のアイデアは両方とも採用の形でポジションはかなりストーリーに關係する所を出す予定です。

まだ受け付けているので協力お願いします。

第16話「1ON4終了、逃亡の時」

サウロ&オルビア Side In

あれから私たちは『全知の樹』へと到着した。

あの嫌な男は散々嫌味を言いながらもついて来たが、正直こんな上司は私だったら願ひ下げだ。

そしてどういった理由でどの様な事を私達がしてきたのかを、詳しく知っている人が代表で世界政府『五老星』に電伝虫の連絡を代わるように要求する。

この計画に抜擢されたのは、私が旅に出てからグラムが付きっ切りで考古学を教えたクローバー。

グラムの航海日誌によるポネグリフや、『全知の樹』で手に入れた知識から立てた仮説は、非常に信憑性が高かったので彼が代表となった。

「じゃあ、うまく交渉すんだな学者さん」

最後まで嫌味を言っつてこの男はクローバーに電伝虫を渡した。

さて……此処からが私達の運命が決まったり、他の人達も真実を知る事が出来る大事な交渉だ。

しっかり頼んだわよ……クローバー。

サウロ&オルビア Side Out

グラム Side In

「おいしょつと……」

クルクルと先の無い腕が回り始める、少しずつへし折る前の原型が出来上がっていく。

「何じゃい……こいつは」

「止めた方が良いな、こりゃあよお」

「そうだねえ、行くよお」

「うおおおおおー!!」

回っていた腕は完全に復元しきっていく、雄たけびを上げるのは生命を謳っているようなものだ。

「コイツがあいつの『能力』か……」

「まさか回転による超再生とはね、ビックリしたよお」

「覇氣に加えてこの力、確実に今後海軍に危害を加えるのよお」

そんな事をクザン達が言っていたら軍艦がもう一隻海岸へ停泊する、そこから降りてきたのは白髪の間違った巨軀の爺さんだった。

「お前等、何一人相手に梃子摺ってるんじゃない!!」

「ガープさん!!」

「わっしらも其れなりにはしたんですがあ」

「こやつが思った以上の力を持っておりましてのお……」

おいおい只でさえ血が滾っているのに強敵の臭いを持った男が1人追加かよ、此処までサービスされちゃ其れに応えなくなるじゃねえか!!

「があああああ！！」

ギャンツ！！ 剣の速度でも全力、腕を再生した今こそ本気だ。
おっと、腕が無い方が早くなるんじゃないの？、つてのは野暮だぜ。

「くっ、さつきよりも此れは」

「断然速いねえ、そして標的はあ」

「ワシかい……来んかあ！！！」

ドゴツ！！ 近づきついでに一発を腹に、しかしマグマの体になつて防がれるが寧ろ此れは餌だ。

其の瞬間屈みこみ膝に触れる、そして相手の足に対して能力を発動する。

「『廻天乃力あ』！！！」

そう言つてサカズキの膝関節を回転させて外す、そうして顔が低くなつた所に普段より回転を加えた嵐脚を叩き込む。

「くっ、腕で防いだるが、こいつ戦い方が変わりよつた！？」

「ありやあ、もう……」

「時間稼ぎじゃなく、確実に全員を倒す動きだよねえ」

「こりや、確かに梃子摺るわい」

マグマとは言えど、足を満足に動かす事が出来ずよけたり受けたり『逃げ』の状態のサカズキ、其れを追いかけるグラム。

さつきまでサカズキが言ってきた事、そして立場の逆転によりグラ

ムは、不敵に笑みを浮かべながら其の言葉を吐き出した。

「おいおい、逃げてばかりじゃ無理とか言ってたじゃないか!!」
「くっ、揚げ足取りよって……」

「悪いけどこうなったらなあ」

「わっしら3人でやらせてえ〜貰うよあ〜」

そう言いながら疾走してくるクザンとボルサリーノ

「おらあ!!、うらあ!!」

そんな二人を尻目に、グラムはサカズキに何度も蹴りを叩き込む。
マグマで拳が火傷しようが、返り血で目が塞がりつつあるうがお構
いなしだ。

「グッ……抵抗しとつても足の踏ん張りが効かんし、蹴りをマグマ
で無効にするよりも、速く蹴られては無理じゃのお」

「マジか……あの野郎、サカズキのマグマをもろともしてないぞ」
「多分回転の力で、拳を瞬時に治してるんだろうねえ〜」

そう言いながらボルサリーノが光となつて、グラムの方に突っ込む
……が次の瞬間、グラムは光の速さである筈のボルサリーノの肩を
掴んでいたのだった。

「馬鹿かい……お前さんよ、光は通常直進するものなんだ。急な方
向転換にはタイムラグが有るし、拳句の果て見聞色の覇気だったか
……?それによる先読みが有れば、テレフォンパンチもいい所だぜ」

「おいおい、お前さんボルサリーノの能力見抜いてたのかよ!?!」

そう言つてクザンが驚くが、俺は其の際にボルサリーノの肩を外して、サカズキと同じように体を低くさせて、武装色の覇気を纏い、体の箇所関係なく嵐脚を入れ続ける。

「当たり前だろ！！兵器の武装もなしにレーザーを放つたらばれるぜ、流石にな！！」

そういう勘を交えているが能力を看破したグラムは、さらにサカズキの左手とボルサリーノの右足の関節を外す、もちろん触れながらも攻撃は放つて追い討ちをかけておく。

「くっ……互い違いの腕と足をやられたわい」

「こりゃあやつばいねえ」

「二人とも何言つてんだ、アイスエイジ氷河時代！！」

そう叫んだクザンが再び俺の腕を凍らせようとするが、俺は即座にそこに倒れこんでいる1人の奴を盾にして防いだ。

「くそが、てめえよくもサカズキの奴を……」

「だつて何かヤバイ攻撃だつて事は、さっきの経験で知ってるんだし、それなのに又喰らつたら馬鹿みたいだろ？」

そう、俺はサカズキを盾にしてクザンの『アイスエイジ氷河時代』を防いだのだ、この行動によるダメージで、サカズキは益々このバスターコールの間は戦線復帰するのが困難となった。

「凄い男だねえ、あんたあ」

「どういう意味だ……？」

「だつて用意があつたとはいえ中将を手玉に取っているじゃないのお、何でそんな奴が『天竜人』を殺したり海賊をしたりしている

のなあ〜」

「確かに此れだけの力があれば『海軍』に所属さえしていれば、将来は安定だし良い階級まではいけるだろう。だが俺は『権力』に屈したくは無い、そしてこれだけの力があれば他の『海賊』の『力』に屈しなくても良い。」

「つまりは『自由』の為にこの居場所を守ろうって訳かいい〜？」

「そういう訳だ、『権力』だろうが『腕力』だろうがな、『力』に屈したら『男』に生まれてきた意味がねえだろう……、この世界で！、この海で！、一番自由な奴が『勝者』なのさ！！」

「この男は危ないねえ〜、『金獅子』と『海賊王』の海戦の時の話を黒電伝虫で、聞いていたがそれと酷似した事を言っている！！」

「で……話している暇があったのか、あんたもいい加減倒れてくれよ」

「くっ……、これはさすがに危ないねえ〜、どうしようかあ〜？」

「お前らが不用意に突っ込んだから、そうなっているんだろうが！！」

「全くじゃ、腕を千切った程度でいい気になりおって……」

「いえ、あれは自分で千切ったんですよ。」

「なら奴は……」

「情けない事ですが殆どダメージが無いんです……」

其れを聞いたガープは怒りたい気持ちで一杯だったが内心は暗澹な気持ちで一杯だった。

グラム Side Out

サウロ & amp ; オルビア Side In

クローバーが此れまでのポーングリフの解読で立てることが出来た仮説を、次々に五老星に話していくがどうも的を得たような喋り方

だ、多分私たちよりも多くの事をクローバーに気づかせたのは、もしかしたらグラムかもしれないと私は思った。

なぜならとても長い間放浪と、修行を繰り返していたと言っていたのだから、グランドラインに点在するポーネグリフを知っていても可笑しくはないと思うし、多分其れの本文を知る為にオハラに来たのか、考古学の博士号を取った後に調べる為に書き記したかもしれない、其れを保存しておけば博士としてまだ若いクローバーでも解読できる。

それから仮説を流暢に話し始めるクローバー、しかし他の学者は確信を手に入れた事から、少しずつだが避難船に乗る準備をしていた。

『全知の樹』以外の重要なものは、もう詰め込んだらしく無関係の町人も、逃げているのだから早々と引き上げるのが、得策なのだと言っていたが私は残った。

サウロは一応避難船の経路を確保する為に学者を先導しながら出て行った、多分サウロなら大佐程度の海兵ぐらいならば簡単に突破できる。

クローバーの仮説が終わったら、サウロが戻ってくるだろうから、其の時にどう行動すればいいかは聞けばいい、どうか其の時間まで中将達が此処へ攻め入ってきませんように。

そして私はこんな時間になっても未だ来ないことで最悪をイメージしてしまつ、グラムを蹴り殺しにしてるんじゃないだろうかと言つ一抹の不安が……。

サウロ & オルビア Side Out

グラム Side In

「『アイスタイムカプセル!!!』」
「ていつ!!!」

クザンが一気に俺を凍らせる大技を使ってくる、しかし足から派生するのならば飛んで避ければいい。

「『拳・骨・隕石!!!』」
ガン・コック・メテオ

そして何時の間に軍艦から渡されていたのか、ガープが砲弾を投げ
てくる。

「『鉄塊!!!』」
あまのむらくも
「『天叢雲剣』」

だが、追撃は止まず2人が僅かに稼いだ時間でボルサリーノが復帰
していた。

「『月歩』」
アイスエイジ
「『氷河時代!!!』」

パキパキパキッ!!!

クザンが掴んだ足が凍るが俺は再び回転の力でへし折る、これ以上
広がらない為だ。

「『特大鉄球!!!』」
「『紙絵!!!』」

メシヤメシヤ!!

俺が避けた鉄球は事前に作っておいた壁に阻まれ破壊される、そのまま剃で距離を取った俺は足の再生をして反撃を開始する。

パチンと最初の時のように手を打ち鳴らしてガープ以外の2人を閉じ込める、なぜガープと言えば鉄球はさっき見た通り破壊されるのだ。

拳でこの風の壁を破る事は自殺行為もいい所だろう、其れにタイムンなら負けない自信がある。

「わざわざワシを指名か……ぶわっはっはっは!!」

「あんたを倒さないと多勢に無勢なこの状況で鉄球は攻撃範囲の關係で厄介だしな」

「ふん、お前の奴はワシの『愛有る拳』で真っ向な人間に更正してやるわ!!」

互いに構えて始まった戦いだが、速く終わらせる為にここからは『視覚の回転』も使用させてもらうつもりだ。

「ふんっ!!」

「『嵐脚』!!」

拳骨に対して嵐脚で応戦、しかしこの程度で終わる攻撃ではない。

「廻れ……!!」

地面に触れていた腕から回転させていく、体の内部である筋肉も同様だ。

それによって威力と数は段違いに上がり、ガープの拳骨を押し返して多くの嵐脚がガープに入った。

「ぐおっ……」

「よるめいているねえ、大丈夫かい？」

「何時の間に後ろに!？」

そう言いながら俺はガープの肩に触れる、そしてこう呟いた。

「『廻天乃力』」

ガコツ そんな鈍い音を響かせてガープの腕は外れる、しかし未だ此れで終わりじゃない。

「はいっ、目を逸らした隙に左足だ」

ガコツ

流石の英雄も自慢の拳骨を放つ腕と、踏ん張る足の関節が外れては戦力が大幅ダウンだ。

「如何したんだ、未だ蹴りが有るだろ？」

「ウオア!！」

隠してるが痛みによって速さが無くなっていたら足を掴むなど容易な事だ、そして再び悪魔の囁きをする。

「案山子よりも酷くなりな……『廻天乃力』!！」

そう言つて俺はガープの足の関節を外して、戦闘不能になっているのを確認するともう一人を竜巻から開放する、狙うはクザンだ。

「おいおい、ガープさんが此処までやられるのは予想外だが覚悟できているんだな……ええ！！」

クザンからは怒りか今までのだらけた態度がなくなりすっかりと俺を睨み付ける、其れが最高なご馳走だとも気づかずに……

「さてと怒っているのかな、かな」

「『アイスBALL』！！」

「ヨット、ヨット、落ち着きなよ、落ち着きなよ」

そう言つて攻撃を避ける俺、『視覚の回転』に不自然さを出さない為、同じ言葉をいくらか繰り返す。

「『アイズエイジ氷河時代』！！」

「此処だよ、此処だよ、ここここココ」

「何処かわからねえが、勘でそこだろ！！」

しかし其の手は虚空を掴んでいる、クザン自身は知らないが『視覚の回転』で、クザンは5秒前の映像を視認してしまっているのだ。

「俺をちゃんと見る、ミロミロミロ見るお！！、見ないから呆れるほど外れるんだぜ、お前もう10回以上はミスしたよなあ！！」

「ああそうだな、でも氷を砕いて鏡にした……そのおかげで良く分かるぜ」

ガシッ

そう言っただけで今度こそクザンは俺の足を掴みこの技をつぶやく。

「密着技だが……『アイスタイム』」

其の言葉をつぶやいた瞬間俺の体は凍りつく……はずだった

「クククツ、こつも見事に決まると嬉しいねえ……そう思わないか、クザン」

「おまつ……どうやって……」

満面の笑みで俺は囁く、当然クザンは自分が仕留めたと思った相手が目の前に、しかも肩に手を乗せているのに驚愕を隠せなかった。

「ちゃんと見る、俺を。って言ったのに見なかった。だからこれは自業自得の罰だよ、クザン君」

そう言っただけで俺はクザンの両足と左肩を外す。

戦闘不能にはなっているが油断できない、サカズキは凍結して無理でも、ガープとクザンは片腕と片足が残っている。

「さあ、最後はわっしかねえ……」

「ああボルサリーノ、お前さんが最後だ。」

グラム Side Out

サウロ&オルビア Side In

クローバーはあれからずっと仮説を言い続けていたが、徐々に核心

に触れ始めた。

ポーネグリフの存在については、なぜ紙や本に残さず鉱石に残したのか、それは何とかして未来に其れを伝える為だと、壊れるものなら壊して、歴史を消そうとする敵が居たからだと言えた。

空白の1000年が明けた800年前に誕生したのは世界政府、もし敵が世界政府だとすると其の歴史は政府にとって都合な歴史と言える。

クローバーと博士達は、歴史上に今は無きとある王国に気づいたらしい。

でもその国の歴史はほとんど残ってない……。
執拗に歴史がかき消されている……。

その国の人々がポーネグリフを作り、後世に残した理由。

それは敵から、歴史（思想）を守るため。

その敵は、世界政府だと。

此れがクローバーが皆と一緒に考えた仮説、そして国名を言おうとした瞬間……

パンツ！！

「悪いが、それだけは言わせないぜ！！」

スパンダインが必死の形相でクローバーを撃っていた。

「クローバー！！」

オルビアが駆け寄ると同時にサウロが此処に入ってきて叫ぶ。

「一応此れで全員の学者が乗ったので、ワシらも早く行くですよ！！」

「行かせるかあ!!」

「……………そうだ、オハラは知りすぎた……………」

其の言葉と同時にゴルデン電伝虫をスパンダインが押した。遂にバスターコールが始まる……………。

サウロ & オルビア Side Out

グラム Side In

軍艦が動き出した……………と言う事はバスターコールは発動したようだあれから竜巻はどうか脱出したようだが見抜かれている以上クザンやガーブより相当不利な立場にボルサリーノはある。

「天叢雲剣!!」
あまのむらぐも

「エア・スラグ!!」

光の剣に対し空気の弾丸だが弾幕を張る事と、紙絵を使う事で剣の軌道は見える、なぜかと言えば表面を通る際、光はスポットを作り影が出来る。

そのままやり過ぎたら十分オルビアとサウロは逃げられるだろう。

俺は安堵の顔を浮かべて、ボルサリーノの放つ光の突撃に対して紙絵を使う、それによってスポットができカウンターを入れる事が出来るのだ。

「まさか……………ただの力任せ能力任せじゃ無く頭脳も一級品とはねえ

」

「お前の5倍は生きているからなあ、無理も無い」

「こつなったらしょうがないなあ」

「それはさっきの……」

「そうだよお、『八尺瓊勾玉』!!」

「くっ、さっきよりもやばそうだな」

「そりゃあ、さっきより強く撃つ気だからねえ」

そう言っただけでボルサリーノは手をこっちに向けるが、俺は其れより速く回転の力を伴った『最高の一撃』を放つ。

理由は相手が放つてからは間に合わない、幾ら回転を伴った所で超えられるのは、音速というのが人の限度だ。

だから例え光速といえども、ボルサリーノが攻撃を放つより先に出せば、到達はしないだろうが相殺は出来るはずだった。

そしてお互いのMAXの攻撃が直進して、直撃し土煙が上がる。

俺はそれと同時に、もう片方の手に力を込めて筋肉を極限まで回転させる。

足も同様に極限まで回し、筋肉が断裂して犠牲になる代わりに、もう一度音速を実現させる為に全力の剃で懐に飛び込む。

「これで終わりだ！、ボルサリーノ!!」

そのまま腕を突き出し、さっきと同じ『最高の一撃』をボルサリーノに叩き込む。

普段なら八咫鏡やたのかがみで回避が出来る一撃なのだが、土煙が舞い上がった為にグラムが何処にいるか分からず、そして技後硬直によるわずかなタイムラグがボルサリーノの明暗を分けた。

グラムの『最高の一撃』をモロに喰らってしまいボルサリーノは昏倒した。

「これで一応だが……後1人は誰だ？」

俺は座り込んで回復させていく中、其れを思った。

グラム Side Out

サウロ&オルビア Side In

あれから軍艦の攻撃を私は単独で避け続ける、クローバーはサウロが担いでいるので問題は無い。

「それはそうと何処に行くの？サウロ」

「グラムが用意しとるってゆう船に乗って逃げるんでよ!!」

「でもクローバーは非戦闘員よ!？」

「もうここまでできたら単独では逃げれんから、一緒に乗せるしか無いだで」

「其れに乗ってグラムを迎えに行くの？」

「余裕が有ったらそうするだで」

そう言っていると軍艦の一撃が私達を狙って来た……しかし其の砲弾は目の前で破壊されていった。

「どうやらグラムの奴がまだ準備しとったんだで、行けるでよ!!」

「ええ……このまま行きましよう!!」

しかし軍艦の一撃を避けれる事は出来ても、ここから船は案外遠く此処まで来るのに結構な時間が掛かった。

「ん……あの船は何だ？」

海岸の港に着いた直後に海兵は不穏な事を言い出した、多分あれがグラムが用意していた船だろう。

「まあ、壊してしまってもいいんじゃないの」
砲撃の為船に向け始めた海兵に対し……

「其れに触るんじゃないでよ!!」

サウロが叫び、砲撃を実行しようとした軍艦をなんと掴んで投げ飛ばした、その際もう一隻の軍艦も一緒に衝突で動かなくなった。

「なつ、サウロ元中将!？」

「そんな、勝てるわけねえ!!」

「頼むよ、クザン中将達速く来てくれえ!!」

海兵は口々に絶望的なことを言い始める、まあ事実もはや中将5人のうち4人はグラムにやられているので事実上絶望的な状況なのが。

「速く乗るでよ、オルビア!!」

「あなたは如何するの、サウロ!？」

「今此処にある軍艦を沈めて逃げ道を確保するでよ」

「じゃあ反対の海岸で待つてるわね!!」

「おう、此処が終わったらすぐ行くでよ!!」

サウロ & オルビア Side Out

???? SIDE

「本当、大の男が4人も寝そべって何してんだい」

「しかし中将殿あれは寝てません、やられています」

「まあ、あの中でヤバイのはサカズキとボルサリーノだね」

「はい、サカズキ中将はどうやら凍っています」

「ボルサリーノの方は？」

「昏倒……気絶しております」

「仕方無いねえ、そこまでやったあの童にお灸据えてやるつか」

そう言つて最後の中将が軍艦から降りてきた……

第16話「1ON4終了、逃亡の時」(後書き)

ドラゲーン氏からアイデアを頂いたキャラ「グランド・G・アース」は初期アローンのポジともうひとつ重要なポジを予定しています。

高尾神氏からアイデアを頂いたキャラ「ブライト・ツエペシュ」は重要なポジを予定しています。

正直2人ともアローンポジに使えると知って悩みました。

お一方、協力有難うございました。

第17話「バスターコール終了、吹き飛んだ先は他人の船」(前書き)

今回で『バスターコール』は終了となります。

現在前作で仲間是谁を入れるというので、アバロ、サウロ、オルビア、クローバーが仲間となつて、アンケートの際にロビンがルフィと冒険する為に抜けて、サボが入る予定なのですが原作で麦わらの一味は9人います。

あと3人が4人入りたいのですが皆さんは誰が良いでしょうか？

作者自身も2人までしか思いついてませんのでどうか宜しくお願いします。

第17話「バスターコール終了、吹き飛んだ先は他人の船」

グラム Side In

前方を見たら誰が乗ってるかは、近づいてこないと分からない軍艦が1隻こちらに向っていた。

此処に倒れているのが4人、遠くに見える5隻の軍艦、4人で4隻なので合計9隻の軍艦がある。

『バスターコール』は5人の中将与軍艦10隻を出撃させるので、逆算したらあれが最後の軍艦である。

もしかしたらあれに乗っているのが最後の中将なのかもしれない。

俺はそう思いながら、深呼吸して心を落ち着けた後、其の軍艦を見据えた。

グラム Side Out

サウロ Side In

ワシはどうにか、此処にある全ての軍艦を沈めることに成功したが、今から海岸に向かう。

もしグラムの奴が倒れていて動けないと言う事態に、陥っていたら此処までやった意味が無い。

しかし其の思いはあつという間に砕かれた、何故ならオルビアが自

分の行く方向である海岸に、軍艦が迫っていると行って引き返してきました。

確かに此処には中将の軍艦が無い為に、全てグラムの方向に中将達が行つとると言う事になる。

そう考えたら無茶はやめて、ワシらは迂回しながらグラムの奴を乗せれば良い。

そう思つてワシも引き返してきた船に乗り込んだ。

サウロ Side Out

??? Side In

どうやらあの小童は私相手に交戦する気だねえ。

「であいつは一体何者なんだい？」

「あの男は天竜人殺害による重要犯罪人です」

「そうかい、中々の危険思想を持つてるね」

「其れに実力の方も……」

「ありやあねえ、あいつらの欠点を突いたり、事前に罠を作つたりしていたからだよ」

「では本当の実力は其れほど無いと？」

「まあ、策に頼らなくて、事前の準備が無くても2人位はやられるね」

「そうですね……つまり中将クラスの實力を持つているんですね」

「そうだけれど……そんな事言つてる間にもう着くね、着いたらポルサリーノとサカズキを直ぐに拾いな!!」

「はい、つる中将殿!!」

つる Side Out

グラム Side In

バスターコールが起こっているというのにここには砲撃が無かった。

何故なら俺が霸王色の覇気で砲撃担当の海兵達も気絶させたのと、
ガープの所はガープの「拳骨流星群」などで尽きていた。

しかし今は砲撃が可能な海兵と砲弾を乗せた軍艦が近づいている、
正直他人から見れば余裕の勝利に見えるが、足と腕が折れたのを治
したり紙絵で避けていても、少しずつ攻撃が掠っていたので、そう
いった今までのダメージが体の中には蓄積されている。

そんな事を考えている間にも其の軍艦からはゆったりとした動きで
女性が降りてきた。

「なっ、遅かったのお……おつるちゃん」

「ガープ、情けないねえ……何おねんね決め込んでるのさ？」

「いや、足とかが外れて上手く動けんじゃよ」

「まあ、いいさ……あんた達速くそこで凍り付いてる奴と、気絶し
て倒れてる奴を運んでおやり」

「はっ！！」

海兵が多く降りてボルサリーノとサカズキを軍艦に連れて行く、正
直この女性の中将を倒せば、『バスターコール』に出撃した主な戦
力は全て敗北となり、逃げる事が絶対的に可能となる。

「さて……あんたみたいな奴は洗濯の時間だよ」

そう言っておつると呼ばれていた奴は海軍の服の袖を捲った。

「悪いが俺は洗い物じゃないんでね!!」

俺は一気に剃で近づきに掛かるが、反応が良くあつという間に避けられた。

「さてとまずは腕を揉み洗いだね」

腕を揉んで来るつる、すると俺の体はだんだんと洗濯物の様になる。

「チツ!!」

俺は其の腕を直ぐに回転させるが、無理と判断して捨てる。そしてすぐさま回転細胞を使い再生させる。

しかし其の直後にふらついてしまう、どうやら限界が迫っているようだ。

まあ、冷静に考えれば一時期サカズキを倒す為とはいえ、マグマの状態のまま殴ったから、かなりの回数皮膚の方を再生させていたし、今まで掠った攻撃の数と腕や足をへし折った分を、考えたら当然の結果だ。

「残念だねえ、こんなに速く警戒されるなんて」

そう言いながら近づいてくる、つる中将だが多分あの人の能力は『何でも洗って干す力』。

それは一見原作のカリファに似ているが、あちらは水で洗い流せば戦場復帰できた。『アワアワの実』は水がほとんど唯一の弱点なのだ。

それに対してこちらの悪魔の実の能力の解除方法はきつと乾燥だろう。

つまりカリファは、『能力者』に対して毒となる水が必要とする。其の為能力者に限ってはめっぽう強い解除方法なのに対して、つる中将の方は時間経過という、一番曖昧な解除方法が主な方法になるのだ。

だから俺は速く腕を干切った、回転による乾燥は出来てもそこから瞬間的に広がられるタイプであつては戦闘不能になる可能性が高い。

「さて……まさか最後にここまで厄介な奴が居たとはな、『剃』！」

俺はこれ以上触れられては洒落にならないのと、長引くのは危ないと思い、ボルサリーノとの戦闘で使った音速超えの剃を使い接近する。

さらにそこから腰から肩や腕にかけて、最大限の回転を込めてつるを殴る。

結果は……当然能力者といえども、とつさに音を超える速度に反応できる訳も無く、さらに自然系でない為、威力を軽減・無効化する事もできずにつるは吹っ飛ばされていった。

「ぐう……アバラが折れたね」

「つる中将、大丈夫ですか!？」

「大丈夫な訳ないよ……まあ今からバスターコールの砲撃をする為、遠ざかっているんだよ。砲弾を威嚇に撃つけども、準備はいいかい？」

「はい……しかしガープ中将達は？」

「ちゃんと助けるよ……ほんの少し待つとくんだよ」

そんな言葉を尻目に、俺はつるへの追撃をする為に剃で接近を試みる……が俺は止めを刺さなかった、自分の詰めの甘さを恨むこととなった。

ガープがいつの間にか息も絶え絶えに、匍匐前進で接近して俺を、自分の足を伸ばして進む俺の足を引っ掛けた。

其の勢いそのまま俺は海岸へとダイブをかます、そしてそこへ極寒の囁きが聞こえた。

「じゃあな……アイスエイジ氷河時代！！」

そう言いながらも同様に、息が絶え絶えだったクザンが触れていたのは足、つまり俺の足がみるみると凍っていく。

「良くやったよ、ガープにクザン！！」

「俺達の肩や腕に掴まって下さい、ガープ中将！」

「貴方も……大丈夫ですか、クザン中将！！」

そう言って海兵が早々とガープとクザンを運び軍艦へと乗り込む。

「さて……さよならだね童」

そう言っつる中將の高々と上げていた手が振り下ろされた。

この海岸から撃つても被害など俺が死んでからしかない、つまり少しの利益しかないのだ。

其れを知っているからこそ俺は微笑んでいた、バスターコールの砲撃が来るのを知っていたとしても……

グラム Side Out

つる Side In

今回の奴は異常だった、まさか私達5人の中將がボロボロにされるなどとは、思っていなかったからだ。

最初の予想だった策頼りな奴かと思ったら、見事に裏切られて多数のアバラ骨が折られるという有様、大参謀ともあるう女が……情け無い。

しかし其の男の命運も此処で尽きただろう、なんせ島1つを破壊してしまう砲撃を1人にぶつけているのだから。

「ああ……それにしても痛いねえ、海軍に返つたら私は休暇もらって療養させてもらおうか……」

つる Side Out

サウロ&オルビア&クローバー SIDE

遂にバスターコールの砲撃が始まってしまった。

しかしグラムの妨害のせい、町へ入る前に砲弾が破壊されていく。

だが懸念もある、詰まりグラム自身は無防備のまま砲撃を受ける算段となるのだ。

そんな事を考えていると、私と同じ事を考えたのかサウロが叫ぶ

「速く行くでよ、手遅れになったら話にならんだで!!」

「分かってるけど砲弾が海の方にも来て思った以上に……」

「くっ!!、だんだん砲撃が激しくなつて来たでよ」

そうサウロが言つとおりもはや進むのも困難なほど砲弾が飛び交つてきた。

「くっ、島全体が揺れているでよ!!」

遂にさつきまで無事だったオハラ周辺の周辺が砲撃で壊れ始めている、多分グラムが能力を維持できない位のダメージを負っているのだ。

間に合いますように……そう思って私は意を決したように船を進めた。

サウロ & amp; オルビア & amp; クローバー Side Out

グラム Side In

どうやら砲撃は放てるだけの、最大弾数を撃ちはなっているのだから。

間髪入れずに俺の運命を揺るがし続ける、このまま砲弾で吹き飛ばされてしまつても文句は言えない。

少しずつ砲弾が近くで爆発を起こしていたので、このまま連鎖して

大きな爆発がしかも10や100単位で起こったなら、もれなくぶつ飛ぶ事確定だ。

遂に其のときはやってこようとしていた、軍艦の主砲が一斉にこちらを向いた。

(主砲が向いたのは5隻中4隻であった、ガープの軍艦は砲弾を使い切っていたので除く)

ああ……軍艦自身を壊すべきだったのにな、此処でも詰めを誤ったか。

そう思つて苦笑いをするグラムなのだった。

グラム Side Out

サウロ&オルビア&クローバー Side In

着いたらそこは余りにも原形を留めていなかった。

砲撃によりむき出しとなった地面がちらほらと見える、そこに佇む思い人の足は凍つて動けそうに無い。

救いたくとも救えない、サウロにもこの中突つ込むのは無謀だと言われ、サウロ本人でも不可能らしい。

私は恨んだ、弱い自分を……救いたい時に、救えない自分に怒りを覚えていた。

そんな時、声が……長い間聞く事の出来なかった声が、あの懐かしい声が聞こえた。

サウロ&オルビア&クローバー Side Out

グラム Side In

オルビアはサウロ達と一緒に俺の調達していた船に乗っていた、俺は其れを見た瞬間にあらんばかりの声を張り上げた。

「速く……逃げろ!!、俺は……大丈夫だ……から!!」

しかし噴煙のせいで上手く言えない、できることならば速く行って欲しい。

このままではオルビアとサウロも餌食だ。

そして俺は次にサウロへ叫ぶ。

「頼む……サウロ!!、速くこの……海域……から出る……んだ!!」

当然噴煙のせいでこの時も上手く言えない。

そんな時オルビアの涙声が聞こえた。

グラム Side Out

サウロ&オルビア&クローバー Side In

「嫌……だよお、せつかく生きて戻ってきたのにお別れなの？」

「私の思いも聴かずに自分勝手だよ！、そんなのズルイ……よお……」

私はもう涙が止まらなかった、せつかく帰ってきたのに、せつかく
思いを告げられると思ったのに……それも出来ないままサヨナラ？

そんなのは嫌だった、どんな事があっても一緒に居たいのに、この
状況を認めたくなかった。

でもそんな時、船の上に何か不思議な紙切れが落ちてきた。

其れを見てサウロが言う。

「此れはビブルカードだよ……このタイミングで渡すって事は、ま
さか！？」

「どういう事なの……サウロ」

私は未だ涙を流したままサウロに聞く

「グラムが此れが終わっても、絶対に生きるってのを宣言してるん
だで！！、これは死んだら燃え尽きてしまふんでよ！！」

「じゃあ、砲撃や惨事が終わっても、この紙が燃え尽きなれば……
……」

「生きてるって事だで！、其れにこれはその人が居る方向を指し示
すから、これを持っていたら出会うことも出来るでよ！！」

「それって本当なの、サウロ？」

「本当だで！、これだけのお膳立てがあつたなら逃げる事が得策、
一気に行くでよー！」

そうサウロが言ったと同時に、一気に船は加速して私達はこの砲弾
が飛び交う海域を、抜ける方向へと向かつていった。

サウロ & オルビア & クローバー Side Out

グラム Side In

さて、どうやらオルビア達は納得して逃げてくれたようだ。

あれはシャボンティ諸島で天竜人を殴った時に、民間人がお礼にく
れた物だが調べて見た所、其の凄さを改めて知った。

出来たらあの出航の日に渡したかったが、急いでいた為に渡す事が
出来なかった。

さあて……何か一気に砲弾を込めているが大方此れが最後の砲撃な
のだろう、主砲以外も俺の方向を向き一斉に発射した……

其の瞬間俺は今まで見た事も無いほどの、眩い光と爆音を受け意識
を失った……

グラム Side Out

???? Side In

何か俺を勧誘した男は、俺が用意した小型船で暴れながら寝ている。

この男と出会ったのは一ヶ月ほど前で、ある日空から落ちてきたのを俺が保護して治したのだ。

俺は海賊をしていたが、俺の所の船員は俺に不満を持つわ、文句言っただけ動かないわといった体たらくで、其れが嫌になつた俺は、この男が目覚めてから俺に向かつて、いきなり言つた「俺の仲間にならないか？」という言葉に、興味をもち俺は其の話に乗つてみた。

何故ならこの男は俺より大きな賞金首であり、俺を勧誘する時に見た眼の奥にある力強さは、俺の気持ちを決めさせるには十分なものであつたからだ。

そんな事を考えているとその男は起きてきた……

「でオハラにはあとどれ位で着くんか、アバロ？」

「およそ2〜3日で到着だが、しっかり休んでろ」

そう言つて俺……元「悪政王」アバロ・ピサロは舵を取つた。

第17話「バスターコール終了、吹き飛んだ先は他人の船」(後書き)

今回で『バスターコール』は終わりです、で次回後日談にてオハラ編は終了として其の後は『マリージョア』編までの下準備が暫く続きます。

前作を改稿して矛盾点などを見直していますがどうでしょうか？
現在の状況で皆さんがどう思っているのかを正確に知りたい為、矛盾点などがありましたらコメントでお願いいたします。

第18話「海岸」(前書き)

後日談で今回がオハラ編の最終話です。
次回から原作介入が始まります。

第18話「海岸」

グラム Side In

あの『バスターコールから』一ヶ月が過ぎた……

吹き飛んだ船の先で勧誘した男、アバロと同じ船に乗っているのだが、アバロいわくオハラへは順調に行けば2〜3日で到着すると言っていたので、俺は其の間料理などを作ってアバロをねぎらう。

正直何年も1人暮らしをしていたら、上手な料理ぐらいは作る事が出来るようになる、事実アバロは美味しそうに食っていた。

アバロは原作では、『インペルダウン』の『レベル6・『無間地獄』』に収監される、『超』が付くほどの極悪人である。

しかしそれにはちゃんとした理由があつて、あいつが『悪政王』と呼ばれた理由は、あいつの類まれなるカリスマ性を持ってしても、船員のやる気の無さが目に余るものだったので、アバロは船員達にアメを与えず鞭を絶え間なく与えた結果、恐怖政治が船の中で行われたのだ。

逆らう奴らは皆殺しにして、食事や宝物の分配に異常な程の隔たりを作っても、船員よりアバロの方が格段には強い為、船員達は不満を出せず、その長い間船員を恐怖政治で縛り続けた結果、船員達の状況とアバロの状況の差を見て、海軍から『悪政王』という二つ名が付けられたらしい。

戦力としても申し分なくカリスマ性で人を束ねられる貴重な存在。

間違はなく副船長候補である男を偶然とはいえ仲間として捕まえたのだ、収穫としてはいいものだろう。

さて……食事も終わったから少し寝させてもらうぜ、『バスターコール』での傷がまだ疼いているからな。

一応補足を入れると、回転細胞は負傷や骨を直す事が出来るが、痛覚の麻痺ではないから、1ヶ月経っても痛いものなのだ。

グラム Side Out

アバロ Side In

俺はもううんざりだった、自分の所のクルーの無能さに。

俺が何か言うたびにビクビクして怖気づく前にやる気出させて言うんだ、そうしたら俺も恐怖政治など起こさない。

正直こいつらを放って俺は一人航海に出たい気分一杯だった。

そんな所に現れたのはこのグラムとか言う見知らぬ男だった、こいつが誘ってくれたのが正直嬉しく二つ返事で俺は船を降りた。

その理由は今言った事と自分の力や名を上げる事があの船では無理だというのだった、それにコイツの所のクルーはどうやらやる気の無い奴が居ないと言ってた。

其れならば俺は其の船のほうが良い、何せそんな奴らが居るなら『ラフテル』も遠くは無いものだから。

それにしても寝方が乱雑だな、毎回寝相が暴れている感じな為に、被る布が気を抜いたら海へ落ちるのだ。

「……って考えてるそばからか、よつと」

とりあえず回収、速く小型の船よりちゃんと船室がある船が良いな、布が海に落ちないからよ。

アバロ Side Out

グラム Side In

アバロの航海の技術は高く、今のところ順調に進んでいるらしい。

そして起きた俺は『ニュース・クー』が運んできた賞金首の手配書をめくる、今回のオハラ騒動で俺の懸賞金は上がっていた。

しかし俺が見るのは自分よりも他の場所、今回のオハラ騒動で新たに3人の賞金首が増えたのだ。

まずは『反逆の巨人』 ハグワール・D・サウロ 懸賞金 3億8

千万ベリ

そして『夢現の語り部』 クローバー 懸賞金 2億ベリ

最後に『知識の女王』 ニコ・オルビア 懸賞金 2億6千万ベリ

ちなみに俺とアバロはこうである。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 懸賞金 5億2

千万ベリ

『悪政王』 アバロ・パサロ 懸賞金 4億2千万ベリ

俺はこの手配書を見たらニヤリとしてしまう、これで俺達はもれなく賞金首だらけの探索隊だ。

しかしやる事は海賊と変わらないだろうから、海軍は海賊として自

分達の管轄に納めるだろう。

世界政府の秘密を暴いたのは、今までの俺の推測と学者の研究成果だ、そしてそんな奴らを野放しにしていたら、世界政府や天竜人は沽券に関わる。

海軍は俺達に行つて欲しくない所がある、それは『テキーラウルフ』や聖地と言われる『マリージョア』。

『テキーラウルフ』は海賊の船長や奴隷達を使つて500年もの間、橋の建設をさせている。

そして『マリージョア』は原作にあつたように、『天竜人』が『シヤボンティ諸島』の『人買いオークション』で落札した『魚人・巨人・人魚・海賊船長』といった奴らを、奴隷にして楽しんでいるのだ。

俺にとって『奴隷』というのは『人』としてみていない事であり、『人』としての尊厳や幸せを踏みにじると言う事だ。

それに目のいきゆく範囲に苦しんでいる『人』がいて、手が届くかもしれないのに、其れを蔑ろになどできるわけが無い。

俺の目的は権力を振りかざして、人を人と見れない天竜人や、自分達の汚れた部分を見せない五老星達をこの手で消したいのだ。

そして誰もが笑える世界、真実を知つても良い世界にしたい。

革命軍の目的は知らないが、もし賛同してくれたなら協力して欲しいし、協力できる時は協力したい。

そういつた人を救う面での意気込み自体はともある、しかし今に

おける最重要課題は、オハラにいったん戻ると言う事である。

オルビア達はオハラで待っているのだろうか？、とりあえず俺はアバロに作った飯を渡した。

グラム Side Out

アバロ Side In

グラムの作る飯は美味いが、どうもこいつは掴み所が無い。悪魔の実の能力者で中将相手にも勝てるとか、巨人なみの寿命といった傍から聞けば余りにも有り得そうに無い事だ。

でもあの時感じた『本物』の気迫は何だったんだろうか、俺は一応昔に手に入れた悪魔の実が有ったので、饑別に貰っていったが俺もこいつを食べれば、グラムの様な気迫を出せるようになるのだろうか？

まあ順調に行ったらあと1〜2日で、悪くて4〜5日でオハラだから着いた時に、此れが何の実なのかを誰かに聞けば良いだろう。

アバロ Side out

グラム & amp ; アバロ Side In

それから航海は順調に進み無事に3日目でオハラに着いた。

着いた其の時に見たのは、島の人々が学者・町人問わず、元気に生きている景色だった。

俺が意識を手放した時には、どうやら砲弾の残数が残り少なかったのだろう、もしくは尽きていたのかも知れない、其れにガープやクザンたちを運ぶ手前、つる中将の力では家ごと洗濯は出来ない。

万が一出来たとしてもアバラがあらかた折れていたから、めっちゃくちゃな数は出来なかつただらうけどな。

そう思つて小船から降りた時に学者から感謝を受けた、ポーネグリフや本が無事だったおかげで、此れから多くの学者の人達が、クローバー以外に真実に近づけるのが嬉しいらしい。

しかし俺個人としてはオルビア達の情報が得られないのが悔しく、少し気落ちしたまま俺は海岸へ向つたが、アバラは心にも無くこんな事を言つた。

「もう良いじゃないか、お前は何でそこまで其の女を必死に探してるんだよ？」

「約束は守る女だからな、だから会えると信じてるんだよ」

「そこまで言うとはねえ……惚れてるのか？」

「だとしたらどうなんだよ、アバラ？」

「ビツクリ桃の木、山椒の木」

そんなやり取りをして俺達は、海岸の方へ歩いていった。

グラム & アバラ Side Out

??? Side In

あれから一ヶ月が過ぎた……

あのオハラのパスターコールの後、私達は賞金首になって海軍に追われつつも、このオハラの海岸へと戻ってきた、理由はグラムと再会する為である。

賞金首の手配書を見たら大層な二つ名が付いていたが、グラムの写真を見つけた瞬間私は微笑んだ、手配書に書かれていたのは私より大きな賞金額で、同じように大層な二つ名だった。

そんな事を考えていたら何だか声が聞こえてきた、人数は二人で声の質からして男だろう。

「……女だ……会え……と信……」

「そ……ねえ……惚れ……か？」

「だと……ど……んだ？」

其れまで聞いていたがなぜか懐かしい声だった、気まぐれにあの日預かったビブルカードを取り出すと、なんと声が聞こえる方向を向いていた。

私はサウロとクローバーに船から降りてもらって一気に其の方向に駆け出した。

??? Side Out

グラム& amp・アバロ& amp・サウロ& amp・クローバー& amp・??? Side In

海岸に向って歩いて居たらある方向から女性が駆け出してきた。

「おいおい……活発なお嬢さんだな」

そうアバロが言ってるが俺は構えていた、受け止める為に。

そんな事をやってる内に其の女性は飛びついてきた、それはもう満

面の笑みで。

「お帰り!!」

「ああ……ただいま、オルビア」

そんなやり取りをしていると大きな巨人が歩いてきて笑いながら注意をした。

「デレシシシ!!、久しぶりだで!グラム、そしてオルビア若いのにそんな真似は止めるでよ!!」

其れに乗じて若い男のほうがこう言った。

「そうだ、まだまだ若いんだからな、そついうことは控えた方が良
いぞ」

其の状況を見てアバロが口を挟む。

「こんな個性的なメンバーがクルーかよ……」

「まあ、巨人と若いメンバーの4人だが、実力と総合賞金額は結構
良いぞ」

「で……最終目的は一体何処までなんだい?」

「一応全てのポーネグリフを見つけて、仮説を確信へと変えて天竜
人や世界政府の闇を暴く」

「って事は『ラフテル』も行くのか?」

「グランドライン制覇になっても良いから暴きたいんだ、『ラフテ
ル』にも当然行って調べるさ」

「まあ……こつちの船の方が前よりは良さそうだ」

「じゃあ、乗り込むか……そしてオルビアは何時離れるんだ?」

「もう少しこのままでいるの」

「はぁ……こうなったら艇子でも動かないからな、仕方ないしこのまま乗るか」

俺はオルビアが腕に捕まったまま自分の本当の船へと乗り込んだ。

第18話「海岸」(後書き)

今回でオハラ編終了、次回は船出の進水式を予定しています。

VS白ひげはどうしようかな……割と深刻だな。

一応コラボは駄目とは皆が言っているのでアスラがでてくる頃だった話をかくまえに雷帝様にお詫びのコメントをしておきます。

改稿しなきゃ駄目なんだよな……頑張るけど。

第19話「海原への旅立ち」(前書き)

今回は小休止です。

第19話「海原への旅立ち」

グラム Side In

再会してからはこの一ヶ月について色々と話し合った。

俺が新しい船員であるアバロを連れて来た事。

オルビア達が海軍の追っ手を退けた事。

それによって多分一ヶ月前の時よりも懸賞金が上がってしまうかも知れない事など話し合った。

ちなみにこのメンバーが海賊兼探索隊として旗揚げをすればたちまち警戒の的だろう。

ちなみに前に言っていた懸賞金を総合すると金額はこうなった。

総合懸賞金 >> トータルバウンティ << 17億8千万ベリ

……って何これ？ 総合懸賞金 >> トータルバウンティ << の内訳

を見たら俺とアバロの2人だけで麦わら全員を超えてるんだが。

しかも俺はこれから先『インペルダウン』でレベル6の囚人になるであろう、サンファンとかを倒す計画とか、マリージョアの襲撃を考えてるからもっと上がる事請け合いです。

此処から先は大海賊時代……つまりゴールド・ロジャーの処刑が終わって間もない時代だ。

此処からは原作に関われると言うのが、俺としては大きな喜びだが此処に居る奴らは、一体何が目的なのだろうか？

それについては聞いてみたい。

そして……単刀直入にいきなりだが聞いてみた。

「お前達はいったい何が目的で此処から旅をするんだ？」

「俺は『ラフテル』へ行き海賊王と同じ景色を見たい、たとえば船長で無くともな」

「ワシはただ逆戻りが出来んから、もう行く所まで一緒に行くだけでよ」

「俺は最後のポーネグリフ……全ての真実の歴史を知る為」

「私は行く所は貴方と一緒に……貴方にずっと付いて行く為だよ」

ちなみに上から俺が質問、答えはアバロ、サウロ、クローバー、オ
ルビアの順だ。

「そうか……、俺の目的は『お前らと一緒に旅を続ける』だ」

「で、船長さんよ。最初の目的地は何処だ？」

「特に無いな……今はこの状態で動いたところで海軍に目を付けられてしまう。だから水面下で動きを練るのが主な活動になる。」

「じゃあ、此処に居るのが得策なの？」

「いや、航海自体はする。オハラを巻き込みたくは無いな、あと航海の途中で海軍に出会ったら、撃退するからできるだけの準備はしておいてくれ。目的は海軍にばれない様にしていきながら行動に移す。」

「だが、それ以外に動く事も有る……だろ？」

「当然。天竜人達の事を放っておく事は出来ない」

「だからそういう事が何処かで起こる前に止めるのか？」

「しかし絶対的に可能ではないから少し前後はすると思う」

「でも……天竜人を殺したりすると賞金はどうなるんだ？」

「おめでとう、君は良い所に目を付けた。」

「まさか……お前殺した事ある？」

「ああ、其のお陰で初頭で2億6千万ベリーさ」

「マジかよ……一人でそれって大量にしたら倍近くになるじゃねえか」

「まあ、初頭だから多分滅茶苦茶に上がる事はないと思うがな」

「と言つか、何で世界政府よりも上な奴らの首を取ったんだ？」

「奴らが人間の尊厳と、家族の幸せをぶち壊そうとしたからだ」

「何だ、ちゃんとした理由があるなら良いぜ」

「お前は何だと思ってたんだ？」

「ただの気紛れかと」

「そうかい……まあ此処で話しててもしょうがねえからっ……よ！

「おいこれは何の為に用意したんだ？」

「何の為って……今から進水式するからだよ」

「だからって樽の酒ってのは……」

「まあまあ景気は良くするのが礼儀ですよ！、さてどうすれば良いだでグラム？」

「さっき言った目的をもう一回言っつて樽に足を乗せるのさ、そして其の後にこの瓶を船首に投げつけて割る」

「分かったわ、用意は良い？」

「ああ、じゃあ行くぞ。お前らの目的は？」

「俺は『ラフテル』へ行き海賊王と同じ景色を見たい、たとえば部下でもな」

「ワシはただ逆戻りが出来んからもう行く所まで一緒に行くだけでよ」

「俺は最後のポーングリフ……全ての歴史を知る為」

「私は行く所は貴方と一緒に……貴方にずっと付いて行く為だよ」

『で、船長は？』

俺以外の全員がニヤつきながら聞いてくる。

「お前らと一緒に旅を続ける事だ!!」

俺は其の質問に対し大声で答えた。

其の後俺達は樽を割り、船首に瓶を投げつけ大海原へと旅立った。

ちなみにデザインは後日述べさせてもらっぜ、じゃあな。

第19話「海原への旅立ち」(後書き)

今回はプロフィールを書いていきます。

かぎ括弧は複数の人がハモってると思っただけならば幸いです。

「人物紹介」（前書き）

20話を突破したので現時点でのキャラ設定を書いていきます。

「人物紹介」

グラム・トランセオ・リクトウム

現在 130歳（人間年齢で40前半） 206cm 83kg

嘗ては異世界の日本人だったが子供を事故から庇ってその際「ONE PIECE」の世界へと転生。

超人系悪魔の実「クルクルの実」の能力者。

一応見た目に関しては望みは言わなかったが黒髪で目は少し暗めのオレンジである。

ドリーとブロギーにも言われたように超が付くほどの小型巨人で3mにも満たない身長が特徴である。

現在賞金首で懸賞金はシャボンティ諸島のルフィとローを合わせても其れを超える5億2千万ベリー！。

ニコ・オルビア

現在16歳

グラムが来た事による弊害が原作より遥かに若い年齢で生まれたオルビア。

母親たちはポーングリフの探索で死別、グラムが子育てをやる羽目となった。

しかしそのためか原作より速く博士号を取ったり、修行で（荒削りながら）二式を習得したり意欲的かつ活発な少女に育った。

ポーングリフの探索メンバーとして出航した後オハラへ帰郷、グラムと海賊業を共にする。

クローバー

現在23歳

グラムが来た事による弊害が原作より遥かに若い年齢で生まれたクローバー！。

博士になって研究した結果、世界政府の真実を知る数少ない人。

アバロ

現在27歳

本来なら『インペルダウン』に行く極悪人だったが、其の思想に染まりきる前にグラムが勧誘した凄腕の海賊。

懸賞金・実力ともにメンバーの中でもトップクラス。

サウロ

現在？歳

元海軍中将だったが軍のあり方に疑問を持ち、人を傷つける事を嫌うため捕まっていたオルビアとともに脱走。

『バスターコール』編ではグラムと共に八面六臂の活躍を見せた。

巨人族の中でも穏やかな為めつたな事がない限り攻撃はしないだろう、海賊団をほのぼのさせる担当になりそうである。

ブルック

現在68歳

若い時にグラムにあつてそれきりではあるが、今は白骨化して音楽を鳴らしているだろう。

麦わらの一味の仲間になるまで登場の予定は無いが良い奴。

ドリー

現在？歳

リトルガーデンでグラムが出会った偉大なる巨人。

現在ブロギーとの決闘は80年目に突入。

一応グラムに悪魔の実を渡した（本人達は知らない）人でも有る。

ブロギー

現在？歳

リトルガーデンでグラムが出会った偉大なる巨人。
現在ドリーとの決闘は80年目に突入。
一応グラムに悪魔の実を渡した(本人達は知らない)人でも有る。

テログマ達

グラムの故郷「メルヴィユ」の動物達である。

此処からは意見を貰ったオリキャラです

(原案：ドラゲーン氏)

グランド・G・アース

現在7歳(原作時27歳)

短剣などを主な武器にした、悪魔の実の能力者。

悪魔の実は自然系悪魔の実「ドロドロ」の実の「泥人間」。

人の支配はそこまでの執着は無く、自分の好きなものを求めている。
強欲とも取れるほどに、己の好きなものへの執着は、支配する事への執着の幾倍も大きい。

強さは他の自然系能力者と同様で物理での攻撃はあまり効かない。
短剣を使う際は二刀流で、コレクションがあるが、其の中で気に入って帯刀しているのは短剣には珍しい「大業物」で名前は「牡丹」と「芍薬」。

なお、長刀の中にも同じく「大業物」の「百合」がある。

懸賞金　????ベリー

(原案：高尾神氏)

ブライト・ツエペシユ

現在9歳（原作時29歳）

仲間や己の拳などを主な武器にした、悪魔の实の能力者。

悪魔の实は動物系悪魔の实『ヒトヒト』の实の『幻獣種』で『モデル：吸血鬼』。

性格は紳士的で初対面の相手には優しく振舞う。しかし、自身の思うようにいかなくなってくるとイライラしだす。

血を吸うことで眷属を作る事が可能、獣人型では飛行が出来て、獣型では飛行に加えて超音波で催眠したり、それぞれの型で独自の特殊能力がある。

強さはトップクラスで有り、グラムメンバーが相手でも人海戦術次第ではいいところまで行く。

懸賞金　????ベリー

「人物紹介」（後書き）

主は今のところ別の小説を書きたいなーと思っております。

いまやっているのが前作でやっていたゴア王国の話が終わったらはじめようと思います。

そしてその際皆さんにアンケートで何が良いかを聞こうかなと思いました。

? イナズマイレブン

? 史上最強の弟子ケンイチ

? 弱虫ペダル

? は少しマイナーですがチャンピオンでやっている漫画です。

期限はゴア王国が終わるぐらいです。

協力お願いします。

第20話「新たな命、再会のボルサリーノ、懸賞金UP」(前書き)

20話突破です。

アンケートはまだ受けつけているのでお願いします。

第20話「新たな命、再会のボルサリーノ、懸賞金UP」

進水式をやった後で俺達は一応これからの予定や、計画を練る為にもシャボンティ諸島に向かった。

一応海賊船の名前と海賊団の名前は即日で決めた、名無しではさすがに格好がつかない。

名前の方は「ファクトウム」、ラテン語で真実の意味がある。

海賊団の名前は「ウォルプターズ海賊団」、こちらもラテン語でこれは楽しみという意味がある。

航海はアバロに任せている、俺もいけるがこいつの方が航海暦が長いので、こいつに任せた方が安全なのだ。

ちなみに俺の航海暦は詳しく言えば、航海日誌を書いていただけで1年ぐらいである。

順調に航海が進み、前回月歩で行った時よりも楽にシャボンティ諸島に着く事ができた。

上陸したら何故かそこで待っていたのはある種の歓迎ムードで、俺の顔を見るなりある青年が、喜色満面の笑みを浮かべて近づいてきた。

其の少年は昔のある日、天竜人によって母親を奪われそうになった少年だったらしい。

まあ……感謝される事は良いんだが、やはり此処の人たちも天竜人の事は嫌いなんだなあと思った。

懇意にされるのは良いことだが此処である問題が起こった、16の

時だという約束を守り俺とオルビアはいわゆる番いの関係になった。

其のオルビアがいきなり吐き気を催してしまい、吐いたのだが……あいつらが少しばかりニヤニヤしていたのを、俺は事情を聞くまで不幸を笑っていると勘違いしボコボコにしてみました。

そりゃあさ……あの日に比べて魅力的になってるし、俺自身禁欲的な生活を送ってきたから抑えが聞かなかったのは有るが、どうやら俺とオルビアとの間に子供ができたらしい。

しかし航海にでてわずかな期間で、子供ができていた（推測上は進水式してそれからすぐ）為、お腹の方は目立ってはいない。

シャボンティ諸島で賞金首や動向についての情報を仕入れた後、俺達はオルビアが出産するまで滞在する事となり、実際此处で過ごしたのは1年ほどだった。

まあ、当然だが産まれるであろう時には立ち会ったし、修行や情報の仕入れは欠かさなかった為何一つぬかりはない状態であった。

そして1年後オルビアは無事に玉のような女の子を産む事となった、と言うか医学においても一流とかシャボンティ諸島の人たちは何やらせてもレベル高いな……。

将来はオルビアに似て綺麗な女の子になるであろう、この子の名前はニコ・ロビンとなった。原作どおりではあるが、ミドルネームに実は俺の名前の『トランセオ』が入っている為、本当の呼び名はニコ・トランセオ・ロビンなのである。

出産からしばらく経って、次の日には出航すると言う日に俺は戦う

相手を見つける為に、ある場所へ向かった……それは『シャッキー
・SぼったくりBAR』、つまりあの『海賊王』の右腕である『冥
王』シルバース・レイリーと会って戦おうとしていた。
運が良かったのだろうか、偶然にも居た為勝負を申し込んでみたが
……人生そんなに甘くなかった、盗聴用の『黒電伝虫』を情報収集
の為にもっていた海軍将校が、前を通り過ぎたせいで居場所がばれ
てしまい、海軍が来ると言うのを民間の人から連絡をもらったから、
即座に店から飛び出した。

諸島を出ようとしていたら海軍の1人が別のGRに居ると噂を聞いた、
天竜人の我侫で又どこかの女性や男性が困っているらしく、悪い
いと分かっているも男の方が逆らった為に、海軍の強い奴が出て来
たらしい。

で……そのGRに行って見たら、なんと……「1年振りだねえ」、
ボルサリーノ君が居た。

うん、此処まで見回りで来るとはお疲れさんだな。

いや、海軍将校の伝言で俺がいるというのもあるか？

光の速度が相手で、なおかつこの状況では逃げられないから真つ向
勝負するしかない。

其れに何か目がキラキラしてるけども気にしないという訳で、今構
えながら俺とボルサリーノは向き合ってます。

ギャンツ！！

いきなり光の速さで接近するが1年前と同じように紙絵での回避か
ら腕外しを試みる、しかし……

「それは見破っているよお」

そう言つて一気に方向転換をしてクリス・クロス（カウンター返し）

をするが、こちらも絶妙な角度に体を反らしてスポットを見破り避ける。

「上手いなあ、流石に強いよあ」

「残念だな、前にも言ったが方向転換をしたら遅くなるんだぜ」

「そう言えばそうだったねえ、それにしても君は何で天竜人を目の敵にするんだい」

「人を人らしく見ない醜悪な奴らだぞ、未だ人形のほうがましさ」

「其れが原因かいい、結構他人に対して優しい心は持つてるんだねえ」

「悪いがよ、お前口裏合わせてやるとかしろよ、お前だって後々罵倒されて胸糞悪いだろう？」

「残念だけどこっちにも建前があつて、そいつは無理だねえ」「じやあそこで天竜人死亡の報告でもしてな……えっ？」

そういつて俺はフィンガースナップをした、すると空気がうねり天竜人の体を捻じ切り、血が噴水の様に飛び散って女性の体を赤く染めていった。

女性はそのまま昏倒したが多分ショックで覚えていないだろう、黄猿は其の様子を見て驚いた様に俺を見た。

「まさかあの距離から助けるとは……でもかなり血生臭い方法だねえ」

「だって俺は困った人を、綺麗に助ける王子様じゃねえもん」

「これは今すぐ海軍本部に連絡だねえ」

「じゃあ、其の間にトンスラ……っ」と

俺は急いでこの場から逃げた、あつという間に目的地へ着いた俺は全員と一緒に船に乗り込みシャボンティ諸島を出る。

ボルサリーノは追いかけてしようとしたが軍艦の方向へ行くのを止める為、光の状態で行っても相手と自分の状況を考えたら、このまま追いついても1人で5人の億越えと自分を倒した敵を倒すのは無茶な事と、光になって追いかけてもグラムに弾幕を張られて、落ちては危ない事などを視野に入れた結果、黄猿は苦々しい表情を浮かべながら追跡を断念した。

そして……其の騒動の後日めでたくも、グラムの懸賞金が上がっていたのは言うまでもない。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 懸賞金 5億6千万ベリー

グラム Side In

「あーあ……またやってしまったよお」

「全くこの天竜人キラーが、まあ良いんだけどな！」

「アバロ、貴方が良くても……まだこの子は小さいから、どうにか賞金首にせずに済みそうだから良いけれど、もし私達との関連性がばれたら……」

「なっても辛くないって！、俺達が守ってやればいいんだからな、それに辛くても笑えば良いんだ、デレシシシ！！」

「キャツキャ！」

「ロビンが笑ったでよ、デレシシシ！！」

「全くあんた達は気楽なんだから……」

銃を持ったまま、クローバーが呟いたが聞こえるわけも無く、賞金が上がっても船の上は賑やかだった。

第20話「新たな命、再会のボルサリーノ、懸賞金UP」(後書き)

ボルサリーノ少ししかでてないのにメインタイトルへ。

原作ではフィッシャー・タイガーは死にましたが、皆さんは生還させた方がいいと思いますか？

意見があればお願いします。

第21話「VSLV6s」（前書き）

前回ではタイガーさん生還ルートの意見がありました……。
とりあえず目の前の話の消化が第一ですね、スイマセン。

第21話「VSLV6s」

ロビンが生まれてから数日ほど経った、現在俺はある奴らとの戦いに胸を躍らせている。

後のレベル6の奴らの事なんだが、懸賞金が手配書を見つけた事で明らかになったが何ぞ……これ？

『巨大戦艦』 サンファン・ウルフ 7億6千万ベリ

『若月狩り』 カタリーナ・デボン 8億7千万ベリ

『大酒の』 バスコ・シヨット 6億8千万ベリ

ちなみに今は原作18年前で、そして俺は5億6千万で十分破格な懸賞金なのだがこれは酷いと思った。

こいつらさ、天竜人殺しもやってなくてこの金額だったら相当な事やってるよな。

赤犬も真つ青な非人道行為とかさ……俺って殺し以外やってないけどそれ以上ってどんな事だ？

まあそんな事考えても仕方ないから俺は一応無駄だろうが情報をおらかたかき集めた。

収穫は少ないものの新世界のある島で変な笑い方をする女を見かけたらしい、多分カタリーナ・デボンだろう。

この事を教えてくれた人の言っていた事は正しい、正直俺もあの笑い方には疑問を持つ1人の人間だ。

何だよ……「ムルン、ムツフツフ」って引くつての、あんな笑い方したら春先で出て来る馬鹿みたいになっちゃった人じゃないか。

未だサウロとか俺は巨人族だから人間とは少し違うと言う理屈で済

ませられるが、（将来的にだが）『黒ひげ』の船員になる奴はちよつと笑い声を変だ。

「トプトブ」とか「ゼハハハ」とか、未だ後のはいけるけど前は微妙だろ……

そんな事を考えていると島が見えてきたが赤い綺麗な紅葉が見える。何だ……珍しいが「秋島」かなと最初は思った、しかしその実態はおぞましいほどの真紅色で染まった嘗て子供だったり女性だった「肉」だった……。

これを知った瞬間に俺はクローバーにオルビアとロビンを船の奥に連れて行ってもらった。

そして俺は相棒にアバロを連れて船を降りて、足早にこの島の深い所まで進んでいく、只討伐ならばサウロでも良いが此処は小回りが利くアバロの方が良い。

咽かえる程の血の臭い……大人は無事だが涙を流していた、彼女が居た男も同じ様に吐いていたが泣いていた。

成る程……主に子供や若い女性を狙う事から付いた二つ名か。

今回は血の臭いが凄いが体に流れる巨人の血と、この惨状を作った事に対する怒りが体を滾らせる、嫌悪と闘争本能だろうか？、ちらと横目でアバロを見たがアバロもまたこの余りの惨状に怒りの形相をしている。

こいつは俺達と航海に出て時を過ごした事で極悪人の考えが完全に無くなった様だ、進んでいくと笑い声と叫び声が聞こえる、そして次に聞こえてきたのは哀願の声だった。

「やめて……おね……がい」

「ムルン、ムッフッフ、そうはいかないねえ」

「やめとけ、船長に逆らっても良いことはねえぜ」

「私からすればあんた等の様な若い子が好みなのさ……」

そう言つて無慈悲にも、デボンは女性にナイフを突き立てていった……柔肌を貫き血飛沫が上がる中で、女性の痛々しい絶叫とやめてという懇願の目に、デボンはこれ以上無いほどの恍惚感を感じていた、其の目はもはや焦点が合わずただこの行動に魅せられているかのようにもある。

其の行動は到着と同時に終わったようだが、どうやらまだまだこの程度が前菜だった様にデボンは、笑みを浮かべたまま少女の片手を取った、船員の男達は死んだはずの女性の下半身を掴んでいた……

俺とアバロは激昂するがまま男達の首を切り裂き、ねじ切りこの惨状に更なる血のアクセントを付け足したが、それはデボンからすれば美しい絵画を不浄なもので汚された様な事だ。

そのままこの血に塗れた島での死闘が行われる、悪魔の実が無くとも男の死体を軽々と投げる怪力、そして女性特有の柔らかい動きで俺達の攻撃を避けてカウンター気味に強力な一撃を入れてくる。

怒りで頭はうまく回らないが、どうにか俺とアバロはデボンの攻撃を本能で掠らせる程度に抑える。

すると攻撃に少しばかりの余裕も出てくる、さらに二人ならばそこから作れる突破口を考え付く時間も、少なくともすぐさま実行に移す事もできる。俺が空気の捻れをデボンの周りに作る事で、半ば強制的にデボンの体の方向を変えてアバロが斬り易い様にする。

そのまま動く方向を制限させてデボンの回避を無効化する事で、こちらはじりじりと勝利と言つ運命の糸を手繰り寄せる、だが相手は意地と風に身を任せることで、こちらの攻撃を掠らせるだけにする。そしてこの防戦一方の状況から突破口を作る為にデボンは、遂にグラムとアバロが最も好まぬ方法で揺さぶりを駆けてきた。

「どうしたんだい、こっちは子供を持っているだけだよ？」

「くっ……」

2人にとって今子供を人質に取られるのは非常に不味い、アバロにとっては船の上に居る小さな安らぎであり、グラムにとってはオルビアと自分の間に生まれたかけがえの無い愛娘であるロビンが被る。

「ムッフッフ……攻撃を躊躇うかい、でもこっちは関係ないんでねえ」

ズブツッ！！ ビチャツッ！！ ズルズル……

躊躇いなくデボンは子供を貫きその血を身に浴び、先ほど女性を刺し貫いた時と同じ様に恍惚の笑みを浮かべる、俺達は其の光景にただ立ち尽くす事しかできない、いやもつと言えば嫌悪感に身を震わせているのだ。

此処まで狂った笑みを浮かべるデボンを見ていて思った事は、こいつには改善の余地は無いという確信、そこから俺の下した判断は、原作通りに『インペルダウン』へ収監させるか、死亡するかどうかの一手前位の大怪我を負わせたい。

ギャンツッ！！

思いついた行動は早くこなせば良い、そう思つて一気に剃の接近で肩に触れ回転を試みる。

しかしデボンの体にまみれた血が、こちらの手を滑らせて回転の通達が不十分となる。其の為デボンは開放された、だが此処で逃す気はない。そう思い手の関節を外す事で射程距離を変えてどうにか服だけでも掴み回転させる。

服だけ回転させた場合、もしそれが繊維を千切らない程度の力で、さらに服に水分が含まれていた場合ならばどうなるか……

答えは水分が抜けていく過程で、拘束衣の様に相手の自由を奪う存在となるのだ、しかも服は服で水分が抜けて、硬くなってしまつていて其の状況から逃れるには服を破るしかないが、生憎其の前に俺達の攻撃を防御せずに、受け続ける事で決着が付く可能性が高い為、この服を掴まれた時点でデボンは八方塞がりとなつた。

こちらとしては強い奴が敵で実力が不明、しかしどうしても勝ちたいという時に必要だと考えているのは3つあつて1つは仲間という人員、もう1つは理論を実行する度胸、そして最後の1つは仲間を作る為、理論を作る為の頭脳だ。

俺は確かに中将相手に罠とかで5人退けたり、準備無しでも2人までなら勝てるだろうが、そこに慢心する気は無い、自分より強い相手に1人で勝てないならば仲間に頼るし、汚いやり方になるがドリーさんやブロギーさんの時は、二人の気性を利用して引き分けに持ち込んだだけだ。

そこからデボンの捕縛は一方的な展開となる、相手は棒立ちのまま拘束されているからアバコの斬撃と俺の拳撃が避けられない。

さしもの『若月狩り』も俺とアバロのコンビの前には敗北せざるを得なかった。

そこから村人にこの旨を伝え俺達は船に乗り込んでこの血の臭いと惨状に満ちた島を出た。

一応こちらとしては3人のうち1人分ミッションコンプリート、次は……

俺達は次に『大酒の』バスコ・シヨットを探していたが、コイツの足取りは随分と変だった為見つける方に時間が掛かった。

酒が有る所にバスコ有りと言う様に、酒で有名な都市でよく目撃されていたらしい。……がそこでは精神的に病んでいる人が多かったのだ、大方奴のアルコールでやられたのだろう。

アルコールは一応毒の一種だから、不思議ではないが大きな規模で其れがなされていた為に、何処もかしこもひどい有様だった。

臭いがたとえきつくとともに、此処まで簡単になるはずは無いと踏んだが、アルコールに対して異常な耐性を持っていた場合でスピリタス（度数96%）をバスコ・シヨットが飲んでいれば有り得る話へと変わる。

そういった強烈なアルコールで精神が崩壊する、其れにつれて体も引きずられる様に崩壊する。

それによって被害にあった国が滅亡、又は滅亡近くまで追い込まれていた事があった、しかも其れが大きく記録に残っているだけで、二桁に登るのだからあの懸賞金も納得だ。

こいつの戦いは比較的楽ではあった、悪魔の実かどうかは不明だったが、酒による意識操作が作用する前にクローバーに狙撃してもらった。

クローバーには死ぬ気で頑張ってもらい海賊団の狙撃手になっても良かった、其のおかげで気づかれずに、大きな酒瓶を割る事に成功。そこからクローバーは酒瓶に銃弾や手榴弾などで集中砲火、手榴弾で爆発させた他の酒瓶から、炎が燃え盛りバスコの部下を焼いた。

そして俺はそのまま捕縛する為に行動を始める、まず炎に向かって空気を回転させる事で、炎を火災旋風へと変化させ、そのまま『廻天乃力』で風を操作しバスコへ向かわせる。

其れを防いだバスコを待っているのはあの音速の拳、あれから『年輪倒突』は拳の形を変えている為に技の構造が根本的に変わってしまった、未だにこの音速拳には名前が無い。

ボキボキボキッ！！！　グシャグシャッ！！！！

其の拳は横腹へモロに突き刺さって、肋骨を粗方へし折っていきながら、それでも拳は勢いを止めず、内蔵部分まで突き刺さり、容赦なく内臓箇所も壊す。

そのまま微かに動く事しか出来ない、バスコ・シヨットを村人に頼み海軍に引き渡させた。

『大酒の』バスコ・シヨットは一応デボンよりも懸賞金が低く、こちらも半ば不意打ちだった為に

楽に勝てたが最後にやる相手はいちいち情報を集める必要も、罨と

いった策を弄する事も無い。

いや……単純に規格外すぎてそいつを罠にかけるのが難しいという
ものもあるが。

『巨大戦艦』 サンファン・ウルフ

こいつに限っては放浪の果てに見つける事ができると踏んでいた、
なぜならば巨人であるサウロよりでかいのに、こちらから探し回っ
ていて見付からない訳が無い。

そう思つて探索していたが何、故が見つけるのは思つたより遅かつ
た。

とはいえ見つける事はできたのだが見れば見るほどでかかった。

おおそコイツの罪状の理由はこの巨体であるが故だろう。

歩けば国が崩壊してしまい、泳げば軍艦が破壊されるというのだから、
こんな奴は早急に捕まえなくてはいけない。

しかし今言つた様に其の巨体は捕縛する前に、一撃でこちらに壊滅
的なダメージを与えられるのだ、その為手を付けられず懸賞金だけ
が上がっていく。

向かい合つて戦闘態勢を取り、相手が振り向く前にこっちはサウロ
と共同で殴りに掛かる、上陸しようとしていた島が、あと少しで踏
まれてしまつと言うのに手段は選べない。

そしてアバロとクローバーが足の方に銃弾と斬撃を浴びせる、オル
ビアはロビンの面倒を見る為に奥に居る。

其の戦いは不眠不休のまま2週間に渡って行われた、終わった頃にはサンファンは集中砲火の為に気絶していたが、こちらも眠気と大怪我で焦点の定まらない目をしていた全員が顔を見合わせ苦笑いをしていた。

足の部分がふらついて倒す状況に持ち込む前に、サウロは片腕とアバラ3本持っていかれた。

止めをさす前の状態でクローバーが両足と片腕をやられ、アバロが最後の足掻きで両腕、片足そしてアバラ7本と俺を除く(廻天乃力による回復の為)3人が大怪我となった。

其の後海軍にその場を任せて、俺は3人を治し其の後オルビアを除く全員が、思いのままに眠りを貪って傷を癒していたが次の手配書を見た時、自分達が今回の件で余計に危険視されたのだという事を思い知らされた。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 懸賞金 7億6千万ベリ

『善政王』 アバロ・ピサロ 懸賞金 6億8千万ベリ

『反逆の巨人』 ハグワール・D・サウロ 懸賞金 5億6千万ベリ

『夢現の語り部』 クローバー 懸賞金 3億4千万ベリ

今回の事についてはオルビアは行動せずに居た為、オルビアの懸賞金に変動は無い、しかし今回でトータルバウンティが20億を達成した。

戦利品はなんと悪魔の実が2つと、海軍のセンゴク元帥からの王下七武海への勧誘(手紙だが)だった。

前者は有り難く貰ったが後者の方は丁重にお断りをした、まだまだ

やりたいことが余ってるのに政府の為にお仕事など嫌だった。

……というより邪推が有ったのも理由に含まれるだろう、大方クローバーが知ってる事の秘匿と天竜人への被害減少の為に引き入れようとしたんじゃないかと思った。

それから半年の時間を掛けて3人が完治したが、七武海の勧誘があつて其れを断つた事を話すと全員が満足げな笑みを浮かべていた。

そして重要な事が一つ、それは……何とだなロビンが……「パーパ」と呼んでくれるようになったのだ!!

(オルビアの方が「マーマ」と先に呼ばれた時は羨ましそうな顔を浮かべてしまった、失態である)

……つとすまん。親馬鹿乙とか言わないでくれ、正直なところ嬉しいんだから仕方ない。

傷が治った後アバロの奴は病み上がりで、悪魔の実を食おうとしていたので一応止めておいた。

だって今の状況であんな不味いのを食って体に障ったらえらい事だろ、もう2つの行方は何処かって言うとオルビアが管理している。

一応ロビンに食わせるのはこの年では駄目だといって、釘を刺しておいたがオルビアは食う気満々だった。

俺は止める為とはいえ、この言葉を言ってから後悔していた、オルビアの心の広さそのものとその返してきた言葉に。

「悪魔の実は食べたなら化け物になるんだぞ！、動物か自然現象、もしかしたら沼人間とかになるかもしれないんだぞ！！」

「良いよ、だって貴方の様な存在になるって事でしょ？」

「なっ……」

「だったら私悪いとは思わないよ、だってどんな姿になっても貴方は私を受け入れてくれるって信じてるから」

「私は貴方と一緒に良いんだから……ね？」

「ああ……悪かった」

そうは言い合ったものの、本当に変なやつだったら洒落にならないから心配だな、オルビア自身の決意は止められないから、せめて一緒に食うのを見届けてやろう。

ロビンの誕生日に、其の悪魔の實の食事をする事を告げたが、アバロは何か種類については確信が有るような感じだった。

半年間の戦いは壮絶だったが、悪魔の實やそれなりの見返りは有ったので良かった。さて次に行動するべきは、時間的に近いマリージヨア…… 奴隷には確か女性が多いから、オルビアと2人で行くか。

およそ5年後（原作開始13年前）に有るであろう奴隷の大脱走に手を貸そうと決意するグラムなのだった

第21話「VSLV6s」（後書き）

もう少しで追いつきそうになるので暇を見つけたら積極的に更新して行こうと思います。

イナイレをアンケートに出しましたが主はイナイレで好きなキャラは染岡さんです。

第22話「悪魔の実を使いこなせ」(前書き)

ちよつど一ヶ月も開いてしまってスイマセン。

第22話「悪魔の実を使いこなせ」

サンファン・ウルフやバスコ・シヨットと言った、後に『インペルダウン』で『Lv6・無限地獄』に収監される極悪人との戦いから、キズの癒す為の半年が過ぎてグラム達は退屈を持って余っていた。

計画を練っていなかった訳ではないのだが、其の計画まではおおよそ今から5年ほど期間が開いている。

其の計画とは『マリージョア』での『奴隷の大脱走』である、原作では魚人である『フィツシャー・タイガー』が魚人と人間を区別することなく、救った事で英雄と呼ばれるようになった事件だ。

其の間までは再びシャボンティで情報を集めながら、修行や船へのコーティングをする事にした。

コーティングは当然のように『冥王』シルバーズ・レイリーへ頼む、前回の勝負の申し込みが有耶無耶になったのは悔しかったが、今回訪れたのはそんな事を言うわけではなく普通にコーティングをして貰う為に来たのだ。

魚人島は深海1万メートルにあるといわれている、普通の船では気圧で壊れてしまうのでコーティングによって魚人島へ行けるようにする。

其の間は悪魔の実について調べておく、自然系か超人系はたまた動物系かどうかの判断は重要で、この5年間の間で其の悪魔の実の特徴を掴んで使いこなせるようにさせる。

とは言っても図鑑が無いから食べてからでないと分からない、レイリーやシャッキーにも聞いたが、レイリーも見たことが無いのが2つと言っていた所から察して、3つの内1つは原作どおり『ハナハナ』で合っていて、あとの二つは完全に分からない悪魔の実である。まずは快気祝いに食うという約束だったのだが、ロビンはまだ1歳ぐらいなのでまだ食べさせる訳にはいかない。

物心ついた時から『花人間』というのはあまりにも悲しい、其の為成長するまでロビンの分は保留しておいて、今回はオルビアとアバロが悪魔の実を食べるというわけである。

出来れば奇妙な能力ではありませんように……、そう思っ一口サイズに切っていく。

悪魔の実は一口食べれば良いので細かくする、正直この事は今のこの時まで知らなかった。

つまりあの不味い物はかぶりついたりしなくても良いのだ、あれを全部食うとか俺ぐらいしかしなくて良い。

そしてオルビアとアバロの目の前に切った悪魔の実を差し出す。

「何でこんな細かいんだ？」

「一口だけ食べれば其れでいいからだ」

「成る程、じゃあ食いますか」

「頂きます」

「とりあえず、何か分からないがな……」

「鬼が出るか、蛇が出るかだぞ、こんなの」

「食べないとね」

そう言っ二人は一斉に悪魔の実を口に入れる。

其の後は俺の想像通りの言葉を二人とも大声で言っていた。

「不味い!!、とても不味いぞ!!」

「本当に不味いし気持ち悪い……何此れ？」

「悪魔の実はそういうものだ、まあかぶりつくよりかは良いだろう」

「本当に何かしらの能力がついたのか？」

「其れは特訓をしてからのお楽しみと言うわけだ」

そういつて次の日から能力についての説明および特訓が始まった。

特訓でアバロの方は『動物系』の悪魔の實を食べた事が判明した。

『ネコネコの實：モデル：カラカル』で獣型に変身すると小ぶりの豹ほどになり、速度重視の戦闘スタイル。

人獣型はバランスが取れているがどちらかと言えば力重視のスタイルになる。

悪魔の實自身は自分の鍛錬しだいで慣れていくものだから、時間が多くあればそれだけでアドバンテージになる。

しかしオルビアの方が思ったよりレアな悪魔の實だったために、其の考えを少し改めなければならなかった。

オルビアの悪魔の實は『超人系』の悪魔の實で『トメトメ』の實、この悪魔の實の能力は名前どおり『止める・留める』事が出来る悪魔の實なのだが……何故か元来存在しないはずの能力行使に対してのデメリットがある。

手で触れた存在の何かを「とめる」と言う事が可能なのだが、使えば使っただけ疲労感が襲ってくるといったものだ。

連続使用をすればする分、又は1つとめたまま2つ目をとめたら其れに見合った分の疲労が蓄積される。

つまりデメリットさえ除けば、『自然系』の悪魔の実以上の最強に近いものである。

『能力の使用』をとめてしまふ、これは海楼石でなくては出来ない事で、其れを能力として使う事で相手の能力を使用不能にして、次に相手の行動を封じ込める事で一方的な展開で勝負を進めることができる。

原作における『マリソフオード頂上決戦』で、『白ひげ海賊団』の1番隊隊長であるマルコは、『トリトリの実』の能力者であつて『モデル：不死鳥』だった為に、戦線への復帰率が著しく高かつたのだが一瞬の油断を突かれて、能力を封じられた結果は一気に戦況が海軍側へと傾く要因へとなつた。

其の為強力な能力者でも使えなくなれば、それだけで戦力はダウンするのだ。

ただ例外として『六式』を使える海軍将校もいる、しかし六式に限つては攻撃を掻い潜る為にオルビアへ、『剃』と『紙絵』を覚えさせているからそこはさほどの問題でない。

此れによつてオルビアとアバロの悪魔の実による能力伝授は終わった。

今からは5年間みっちり鍛えて『マリージョア』の『奴隷解放』まで準備を進めていく事になる。

さて……楽しい楽しい修行の始まりだ。

久々の鍛錬に胸を躍らせるグラムなのだ。

第22話「悪魔の実を使いこなせ」(後書き)

今回で一応悪魔の実の食事が終わりました。

原作まではフィッシャーさんの話で遅くなりそうです。

第23話「魚人との出会い」(前書き)

今回でフィッシュャーさん登場です。

第23話「魚人との出会い」

悪魔の実をアバロとオルビアが食べたあの日から、幾らかの日々が経った。

二人とも能力についてのノウハウを吸収していき、瞬く間に能力の使い方をマスターした。

アバロの『カラカル』に至ってはコンビ技が開発されたし、オルビアの能力で俺の竜巻の動きを止めて、相手が距離に入る時に解除で竜巻の力を爆砕させるといふ工夫的な方法も見つけた。

俺個人も技の開発をしたり鍛錬をして、自己の戦闘力を挙げていた。

ロビンはちょうどこの修行の時期に原作と同じ『ハナハナ』の実を食べたが、理由はサウロとアバロのうっかりで食べたのが原因だった。

大泣きするロビンを宥めるのに俺達は必死になった、其の甲斐あつてか今はたくましく能力の鍛錬に励んでいる。

今もこの様に……

「『二本咲き』」

シユルシユル……ガシッ！！

「『クラッチー！！』」

ボキッ！

「ロビンも中々やるな、ほら父さん左腕やられたよ」

そんなこと言いながら左腕を回転させたり振って治す、手加減していると言つのはあるがこの1年間『剃』と関節技の実を教えているから、油断していたら10歳のころぐらいには足元を掬われて、組み手の時に腕一本ほどいかれてしまうのではないだろうか。

ちなみにオルビアは『嵐脚』を覚えて3式使いになった、アバロは『指銃』以外の5式を覚えている。

どちらも俺から見れば荒削りなのだが、あとアバロが5式で止めた理由は『銃とか言う名前があるくせに、飛び道具じゃないから』らしい。

そして俺はこの5年間修行だけではなく、もう一つの目的である『マリージョア』の『奴隷大脱走』の決行のために船の準備をする。

ちなみに5年間の間にコーティング作業は終了しているので、『魚人島』へ行く事も可能になっている。

でも其の前にやってみたいことがあった、其れは……。

「此処で良いのかい？」

「こついったただっ広い場所で無いと本気が出せないだろう、お互いに」

「それもそうか……いくぞー！」

「来い！、レイリーー！！！」

『冥王』シルバーズ・レイリーとの戦いをするということ、伝説と
はいったいどれ程の力を誇るといふのかを見てみたい。

「はあ！」

横薙ぎに剣を一閃。

「嵐脚！！」

それに対してこちらは縦に振り下ろす嵐脚、剣との一撃は相殺され
てしまう。

「ほお……ならこれならばどうだ？」

そう言って居合いのように剣を鞘に収めたまま猛烈な速度で接近す
るレイリー、そして俺の前まで寄ると其の速度を維持したまま抜刀
する。

「くそっ！！」

鉄塊をする前に後ろに飛んで威力を殺す、さらに武装色の覇気を纏
う、そして鉄塊をする。この3段の方法で可能な限り威力を消すが

……

「ふむ、浅いか？」

少し不思議な顔をして言うレイリー、こちらの飛ぶのが若干遅かつ
たのもあるが少しでもタイミングがずれていたら今ので勝負は決ま
っていた。

「よく言っぜ、並みの奴なら今のでアウトだろうが」

そう言いながらも構えて接近する、しかしレイリーは見聞色の覇気で予測していたのか、下がって様子を見る。

俺は余計に様子を見させないようにこちらは先ほどのレイリーの様に猛烈な速度で走る、そしてレイリーの目の前で飛び上がる。

「錐揉み落葉!!」

そのまま廻天乃力と逆方向の剃で回転しながら急降下する、レイリーは避けようとするがあまりの速度に間に合わないので剣で受け止める。

しかし威力が強かった為に受け止められず剣ははじかれて遠くへ転がる。

「くっ!?!」

「『嵐脚・回転木馬』!!」

嵐脚に廻天乃力を加えて『斬る』事が出来る蹴りから、一撃の重みに重点を置いた原点回帰させた目にも見えない連続蹴りがこの技である。

「ぐう……」

掴む事が難しく防御しているが、時間が掛かれば掛かるほど回転の運動が激しくなり防御している腕ごと折られることも有りえる、そのような技だと分かっているのかレイリーは苦い表情を浮かべなが

ら後退していく。

「蠍尾廻り！」

手を突いたまま飛び上がり着弾店まで回転して落下する技だ、単純なものだが威力自身は着地する直前に鉄塊を発動したら補える。

「やめだ！！」

其の言葉を聞いて技の着弾点から随分外れた所に着地する。

「このままやつても決着がつくのはお互い難しいからな、終わりだ」「何だと……」

「剣をはじいていたが今拾う事ができる、しかし又はじく、この繰り返しで面倒な事になるだろう。」

釈然とはしないがレイリーが言うように、このまま繰り返した所でお互い体力切れでの引き分けになるか、同じ展開になって決着が付かなくなるのが目に見えて分かる。

「どちらかの力に差が少しでもあつたら言いたいが……」

「その次は分かるよ、こうだろう」

「勝負にたればは持ち込んだじゃいけない」

「じゃあ……もう行くかな、停泊させて待たせているからよ」

「もう少し此処に滞在すればいいもの」

「出る前のわがまま聞いて貰っておいてそうはいかないだろ、じゃあな」

そう言ってシャボンティ諸島をでてマリージョアへと向かうことに

する。

シャッキーに聞くとコーティングのサービスという事で、レイリーが造船技師に頼んで、船底に海棲石を仕込んでくれていた。

其のおかげで『リヴァース・マウンテン』を越えずに、逆送することが可能となっているので今までの航海に比べて、圧倒的に早く『赤い大陸』^{レッドライン}へ着くことができた。

「此処を越えればマリージョアだが……少し高いな」

「グラム、右側前方に人を確認した」

「分かった、アバロ。その人に接近するので居る方向に向かってくれ」

「了解」

「でも鱗が遠目で見えるですよ」

「なら多分魚人じゃないかしら、サウロ」

「魚人って何だ？」

「グラムさん、結構放浪してたくせに知らないんですか」

「仕方ないだろ、クローバー。見た事無いんだから」

「人魚と人のハーフじゃないのか、多分だが？」

「知らないだで？、二人とも」

「見た事無いからな」

「詳しい種族の説明が出来ないだけだぞ、俺は」

「アバロ、とりあえずは接近してくれ、魚人についての話は其れからだ」

「分かっているからあと少しだけ待っていてくれないか」

其の言葉からわずかの間に船は其の魚人の前で停泊した。

「お前さんは何者だ、魚人らしいが？」

「俺は確かに魚人だが……そういうお前は何者だ」

「俺の名はグラム、俺はこの向こうに居る奴隷を開放する為に来た。」

「そうか、お前もか……俺の名はフィッシャー・タイガー、冒険家だ」

「お前も……って事はあんたも奴隷の解放をする為に？」

「そうだが、どうも高いんでな。素手で登る事になりそうだ。」

「俺と俺の嫁で行くんだが、一緒に行けば素手の必要は無いぞ」

「そうか、だがどうやって行く気なんだ？」

「まず俺があんたと嫁を抱える。其の後に嫁の悪魔の実の能力で、壁に足を引っ付ける」

「そうか……だが確実にいけるのか、そこが心配だ」

「問題ない、こういうのは信じてみたら案外いけるものだ」

「其の自身が何処から来るのかは分からんが、まあそれで行くか。」

「じゃあ抱えるが良いな？」

「思っているより重いがいけるか？」

「大丈夫だ、行くぞ！」

ガッ！

足を岩に引っ掛けてそのまま駆け上る、そしてオルビアに能力の使用を頼む。

「滑り落ちるのを『止めて』くれ!!」

「OK、分かったわ!!」

そして滑り落ちないようにして悠々と登っていく。

「マリージョアは見えるか?、フィッシャー?」

「あと少して上陸できるが……いきなり飛び込むなよ」

「ならば、てっぺんの壁のふちほどでとどめておけばいいか？」

「そうだな、其れぐらいがちょうどだ」

そう言いながら上陸まで秒読み段階へと至り、遂に始まるマリージョアの奴隷大脱走に三者三様の反応と意思を持って登って行くのだった。

第23話「魚人との出会い」（後書き）

一応グラムは転生者ですが、全部知っている段階で話しては気味悪がられるというので分かってない風に振舞っています。

（例としてはフィッシャー・タイガーだと分かってて言わない事や目的を看破しない事など）

第24話「上陸のマリージョア」(前書き)

今回からマリージョア編です。

第24話「上陸のマリージョア」

グラム Side In

岩の壁のふちにフィッシャーとオルビアを下ろして、マリージョアへの上陸を図る俺。

しかし大きな屋敷があるがこれらは全て天竜人のものなのだろうか？豪奢なものだけでなくレトロモダンといった、お洒落なものも相当な数を保有しているのが目に見えて分かる。

だが腑に落ちないのはそれだけ多いのに護衛の数があまりにもまばらだと言う事、すなわち侵入しやすい屋敷とそうでない屋敷がある。

其の前に人選について何故オルビアだけなのかというところ……

グラム Side Out

回想 Side In

「で、次の目的地は一体何処に行く気なんだ？」

「『レッドライン』」

「何で其処に行くんです？」

「マリージョアの奴隷を逃がす為にだよ、クローバー」

「天竜人に喧嘩売る気だで！？」

「確かに恐れ多い事だ、サウロ。だが奴らは人を人とも思わずに個人が持っているはずの、人生を歩む権利を踏み躪っているんだ。其れが俺は許せない」

「無駄だぞ、サウロ。こいつは一度言ったらこういうものは聞かないからな、それで誰を連れて行く気だ？」

「俺とオルビアだけで良い」

「俺とかサウロ、遠距離でクローバーもいるのになんでなんだ。」
「多くを逃がすが女性の奴隷も確実にいるから、女性が必要と言っ
のがひとつ。今言った女性を助ける際に、男を多く連れて行ったら
遭遇して怖がられる可能性があるから、最少人数で行こうというの
が一つ。」
「なるほど、わかった」
「とりあえずこれが今回の最重要行動だからな、失敗はしたくない
ぜ」

回想 Side Out

グラム Side In

さて……、もうそろそろ行くべきだな。

まばらになっているならば一箇所に集めて一気に殲滅すれば楽にな
る。

其れならばいっそのことこうしてしまえば良いのではないだろうか
？、そう思い実行に移す。

「侵入者が入ったぞー！！」

そう大声で叫ぶ、オルビアとフィッシャーは少しばかり驚いている
が、元々の目的を思い出したのか顔つきを変えて戦闘態勢にはいる。

ドタドタドタ……！！

そして叫んで数秒ほどで護衛の人たちが来る。

「侵入者はお前達か!!」
「そうだが何か問題でもあるのか？」
「其の声……さっき叫んでいたのは侵入者よ、お前か？」
「そうだ、まんまと騙されてくれてありがたい」
「馬鹿にしおってここでぼろぼろにし……グッ!!」

バタ……

「悪いが集まってくれば良かったんだ、それ以外に用はない」

そういつて霸王色の覇気で護衛の一人を気絶させる、其の騒動に続いて護衛達がこちらへと向かっている。

「悪いがフィッシャー、オルビアを連れて屋敷の方に向かってくれ」
「分かったが護衛はどうする？」
「俺が全部引き受ける、そうしたら手薄になってやりやすいだろ」
「そうだな、じゃあ奴隷は任せる。その代わり護衛は任せたぞ!!」
「ああ、そつちも無事だな。速く合流しろよ」
「わかってているさ、俺だつて天竜人どもの顔を殴りたいんだからよ」
「そうか、待っているぞ」

そういつてフィッシャーはオルビアと一緒に屋敷へと入っていった。

さて……護衛相手にウォーミングアップでもするか、海軍が来ないとは思えないからよ。

グラム Side Out

???? Side In

……プルプルプル

電伝虫がある部屋で鳴り響く。

「はい、こちら海軍本部」

「おい、今から至急こちらに戦力を送れ!!」

「何があったのですか?、『五老星』の方々」

「何があったも何も、マリージョアが襲撃されておるんだ!!」

「なっ!!、それで相手は誰のですか!?!」

「護衛に聞いたところ、魚人1人に人間2人のようじゃ!!」

「えっと……それらの特徴は?」

「人間の方は一人しか分からなかったらしく、黒髪でバンダナを着けるオレンジの目がとくちようだったらしい」

「まさか……『空駆け人』では!!」

「あのオハラの時の奴か!?!」

「すみません、至急元帥命令で戦力を送らせて頂きます!!」

それからすぐに海軍の上層部が召集された。

「まさかマリージョアで暴れるとは……」

「名だたる極悪人たちを捕まえてもこれじゃあねえ」

「其れらの功績を帳消しする事をやってたら意味が無いのお」

「全く、あの小童のやる事なす事は本当にこっちからしたら恐ろしいねえ」

「相も変わらず大きな事をする奴じゃのう!!、ぶわっはっはっは!!」

「今回は天竜人や世界政府の人間の救出を最優先事項として行動する事、『空駆け人』と『知識の女王』はその次における危険因子として警戒を怠らないように!!」

「ハッ!」

海軍との衝突が今再びなされる事になったのだった。

第24話「上陸のマリージョア」（後書き）

今回はマリージョア編の戦闘編を書きたいと思います。

女性に怖がられるとか2mの奴が言うせりふじゃないですよ、外見だけでいったらクローバーが安定です。

かたや巨人族と人相悪そうな奴ですからね、戦闘力は高いですけど。

第25話「侵入と混乱のマリージョア」（前書き）

前回で戦闘を書くといったのですが段階を踏ませていく結果となつて伸びてしまいました。
すいません。

ところで天竜人で女で語尾にアマスをつけるのがいたけど一人ぐらい原作介入で性格を良くした方がいいかな。

駄目と言つたら意見をお願いします。

第25話「侵入と混乱のマリージョア」

グラム Side In

「敵は一人だ、迎え撃て!!」

「お前らみたいなのが何人来ても、この俺を倒す事はできねえ!!」

そう言いながら殴って護衛を気絶させて屋敷の方向へと進んでいく。最初にこそ霸王色の覇気を使っていたのだが、進んでいく内に使うのがもどかしくなってきた。

炎を使って屋敷を燃やすにはまだ早いのだがどうも嫌な感じがする。

言ってみたら順調すぎるのだ、護衛が俺一人に集中するのはそう仕向けたからなのだがそれにしても、遠目で見る限りどうやらオルビアが屋敷の方へと入っていった。

フィッシャーの方は船の方の手配へと向かっている、此れで逃走への準備が整った。

ブルブルブル……

「電伝虫か……って事は。」

グラム Side Out

海軍 Side In

ブルブルブル……

「応答が無いという事は……」

「此れで『空駆け人』の位置は把握できたな」

「じゃあわつしは天竜人の保護に向かうからあゝ」

「わしらに『空駆け人』は任せとけえ、ボルサリーノ」

「こら、サカズキ。まずは天竜人が先決なのだからな、頼んだぞ」

「良いじゃろ、センゴク。誰でもあの敗北は忘れられん」

「そうだねえ、此処にいる5人全員がああ『空駆け人』に負けているんだから」

「おつるさん、あんたまでそういつたらワシの立場が無いだろうが」

ガチャツ

ドアが開いて海軍将校が言う

「すいませんが元帥殿、準備が整いました。」

「そうか、それでは全員『マリージョア』へと向かってくれ」

其の言葉と同時にこの部屋にいた海軍の上層部が消えるように出て行った。

海軍 Side Out

グラム Side In

「海軍がこっちに向かっているという事が、知らせないとな。」

そう言っただけにフィッシャーの居る方向へと進んでいく。

海軍が来るのは想定内ではあった。

まだ炎を使って屋敷を燃やすまでには至っていないが直にそうなるだろう。

船の方の手配は済んでいる、オルビアは既に突入しているので少しでも火種が出来たら、それで十分なのだ。

ドカンッ！！

音があつた方向をよく見たら大きな音とともに火の手が上がつたのが確認できた。

「本当にナイスタイミングだぜ、オルビア！！」

そう言つて走る速度を上げながらフィッシャーに接近していく。

あとは海軍の接近をフィッシャーに告げて、能力で火を大きくすれば奴隷解放のために混乱へと導くだけだ。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

「海軍がこっちに向かっているという事が、分かった。」

俺はグラムから海軍がこちらへ向かっているという情報を聞いた。海軍が来るのは想定内ではあつた。

屋敷が燃え始めたので早々と混乱の渦に巻き込まなくてはいけない。

船の方の手配は済んでいる、つまり後は多くの奴隷を逃がせばそれで良いのだ。

まずはあの屋敷だが……派手に暴れてやろうか。

フィッシャー Side Out

グラム Side In

フィッシャーに告げた後に一番近い屋敷に入り派手に暴れている俺。混乱で逃げ惑う侍従がいるが……そうだ、其れで良い。

天竜人なんて見捨てておけ、ほら船は向こうだ、速く逃げろ。

「お前は何者だえ!？」

「侵入者の一人だが分かっていなかったのか、あんなに侍従たちが逃げようとしているのに?」

「下々民の分際でこの私に……って、えっ?」

「身分なんぞ関係ない、首がねじ切れたまま……絶命しろ」

そして屋敷の中身を物色する、奴隷の首輪を外す鍵を発見した。

「此処が奴隷の部屋か、すさまじいな」

「あんだ、何者だ!」

「今から首輪を外して自由にするが、自由にして欲しいものだけ手を上げる」

其の言葉を言った瞬間全ての奴隷が手を上げて自由を求めていた。

「全員が自由になりたいのか、じゃあ鍵を開けるから並べよ!」

空けた瞬間全員が堰を切ったように出てくる、整列させて首輪を慎重に外していき、道案内は奴隷同士にさせて、俺は次の屋敷へと向かうことにする。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

「ここは魚人が多いな、どうやら当たりのようだ」

俺が入った屋敷の方はどうやら燃えるのが遅いのだが問題は無いようだ。

人が少ないため混乱そのものを大きくするにはいささか期待度が低い。

魚人の腕力を持ってすれば、わざわざ鍵を強奪しなくとも引きちぎる事が出来るので、次々に壊していく。

この爆発を利用する為に窓を割り、この壊れた首輪をまだ火の回りが遅い屋敷へ投げていく。

「念には念を押ししてと……お前達、人間も含めて歩けるならついて来い。船を用意している、逃げるためのな。」

そういつて船へと案内していく、どうやら同じ時間ぐらいたったよ
うで、グラムも別の屋敷から出て行き、又それとは別の屋敷へと向かう。

「人間も魚人も救いたいが、海軍次第だな。まだ来ないのがおかしいんだが……一体何をたくらんでいるんだ。」

フィッシャー Side Out

オルビア Side In

「どうやら計画は成功だし、逃げてもらわなきゃね」

私が入った屋敷の方は燃えるのが遅かったけれど、爆発が何処かで起こり混乱していた。

其のおかげで楽に奴隷の人たちを逃がすことが出来た、魚人や人間の人たちが沢山いた。

よくよく考えてみれば、わざわざ鍵を一回一回強奪しなくとも、此れ一つと連動しているんじゃないだろうか？

そう思ったので奴隷を開放した後は、急いで自分も燃えている屋敷から脱出をする。

「次はあの屋敷だね、それにしても私が燃やした数より多くなっているけど大丈夫かな？」

そう言っつて別の屋敷へと侵入していく、しかし其の途中で天竜人が落としたのか地面には電伝虫が転がっていた。

「こんな所に電伝虫ってことは、海軍が来るんだね。とりあえず警戒はしなくちゃ。」

オルビア Side Out

海軍 Side In

奴隷解放が始まって数時間後、海軍は多くの人数を引き連れて聖地『マリージョア』へと到着した。

「ようやく着いたか」

「さて、任務をはじめろぞい」

「ボルサリーノの分も頑張らないとねえ」

「ええか、指示を仰ぐぞ、おどれらあ」

「サカズキの部隊は一番燃えている所にいつてきな」

「クザンがあの最後に電伝虫が途切れた所じゃ」

「わかりました」

「じゃあ、行つてきます」

「わしらは今から天竜人の保護の方に回るから頼んだぞ」

そしてクザンはオルビアがいる屋敷へ……

サカズキはグラムのいる屋敷へと向かった。

ちなみにフィッシャーの場所にはストロベリー少将が向かった。

海軍 Side Out

第25話「侵入と混乱のマリージョア」(後書き)

次回こそはマリージョア編の戦闘を書きたいと思います。
短かったり予告無視したり、大変申し訳ございません。

第26話「激戦のマリージョア」(前書き)

今回こそ戦闘です。

第26話「激戦のマリージョア」

グラム Side In

海軍の海兵たちが上陸してきたが俺はさまざま屋敷で開放している為、きつと足取りをつかむのは無理だろう。

少尉や下っ端の奴らが稀にちょっとだけ入っているが、次に目を合わせた瞬間には気絶してしまい、全滅しているので無駄な行動にしかない。

気配として飛び切り大きいのが4個、普通から小さいのは数える必要が無いから考えない、飛び切り大きいといっても、殺気とかを撒き散らしているなどで大きくなるので、強さに比例しているわけではない。

それにしても気配が大きい奴以外は本当に弱いな、此れでは俺はおるかオルビアを止めるのも無理だぞ。

そう思いながら俺は又新しい屋敷に突入していった。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

此の屋敷を開放する事で、やっと俺は半分近い魚人と人間を船に乗り込ませることができた。正直な事を言えば俺が単独だったならば、魚人をできるだけ多く助けようとするが、グラムとオルビアが協力してくれているのであいつらに報いる形で人間もできるかぎり助け

ている。

それにしても此処にいるのは、嘗て億越えの船長とかだが悪い趣味だな……。

いつその事海でやられる方が良いだろうに。

他にも人魚や綺麗な女性の人間など……全く持って天竜人とやらの行動には反吐が出る。

だんだん海兵たちの人数が増えてきていた、グラムの方は大丈夫だがオルビアの方はどうだろうか？、知らせなくてはな。

そう思い俺はオルビアの方へと向かった。

フィッシャー Side Out

オルビア Side In

あの後私はさらに屋敷へと侵入して奴隷の女性達を開放している。船の方向が分からない人たちが多い為、私は屋敷の外で女性達へ船の方向を知らせている。

「此れでこの屋敷は終わりね」

「そんな所にいたのか、ニコ・オルビア」

「あつ、フィッシャーさん」

「海兵たちが来てうるつき始めた、じきお前の方にも来るだろう」

「なら急がなきゃ、有難うございます。」

そんな事をしていたらフィッシャーさんが来て海軍が来る事を教えてくれたので、私は別の屋敷へと向かっていった。

オルビア Side Out

??? Side In

最初の連絡から『空駆け人』も『知識の女王』も相当な距離を移動していた。

見つける事は難しいかとも思えるが、今回は『奴隷を解放する』というのがやつらにとって、大前提な為必ず屋敷を行き来しなくてはならない

そして其の予想は外れてはいなかった。

いま屋敷から出て行った奴……あれは『知識の女王』だろうか。どうやらあの屋敷に向かっていくようだ。

このまま追いかけて捕まえさせてもらおう、流石に『オハラが悪魔達』に何度も、苦汁を舐めさせられたら沽券に関わるのでな。

??? Side Out

オルビア Side In

私はフィッシャーさんが海軍が来る事を教えてくれた為に、急いで屋敷へと侵入して奴隷の女性達を開放している。

今まで沢山救ってきたのでノウハウを掴み速く救っていく、そしてこの屋敷も残すは扉一つとなった。

「この扉の向こうにいる人を解放したらこの屋敷は終わりね」

そういつて勢いよく扉を開ける……するとそこには。

「お姉さん、一体誰？」

私は屋敷の奥で蹲った3人の少女を見つけたので、その理由を知る為には話そうとした。

オルビア Side Out

???? Side In

私達に話しかけてきた女性は私達よりも年上で何より優しそうだった、その人はいきなり話したいと言い隣に腰掛けてきた。

どうやら私達のような奴隷を開放する為に来たのだろうが、どうもこの首輪は外せないと落胆した顔で言ってきた。

私達はその顔を見てこの人は全て正直に言ってるんだと信じて、此処に来るまでの経緯と名前について話した。

まずは自分の名前である『ボア・ハンコック』、そして妹の『マリ・ゴールド』と『サンダーソニア』を名乗った後に、自分達が九蛇海賊団という海賊団の見習いだった事、そんなある日『ヒューマン・シヨップ』で天竜人を買われて奴隷になった事、悪魔の実を食べさせられてしまった事、そしてあの醜い刺青を女性であった為に見せたが、話を聞いている内にその人は天竜人への嫌悪感をむき出しにして怒りと悲哀の籠った目をしていた。

それから暫くして涙を零しそうだったその人は私達を屋敷から脱出させようとしたが、どうやら大きな人がしかかも海軍のコートを身に

着けた人がこっちに近づいていた。

ハンコック Side Out

??? Side In

屋敷の中で色々な奴らが逃げていく間に他の奴らを見つげられるだろうと思って歩いてきたが、どうやら7〜8割近くの奴らが逃げ出した後がある。

そんな中探していたら前の方から小さい女が3人と大きい女が1人来ていたから俺は近づいていった。

すると大きい女が前に立って逃がそうとしているが、正直危険因子が目の前に居て他の奴にかまうほど馬鹿じゃないので俺は見逃して女の方に近づく。

「お前……ニコ・オルビアだな……」

「だとしたらどうするのかしら？」

「決まっている、お前を捕らえる」

「あの子達を見逃してOKなのかしら？」

「あの子供達が正直外に出ても大して害は無い、此処でお前の足止めもしくは捕縛が最優先だ」

「一応聞いわ……お名前は？」

「クザン」

「残念ね……ここで足止めされる訳には行かないわ」

屋敷の中で中将との戦いが始まるうとしていた……

クザン Side Out

グラム Side In

小さな女の子がこちらに向って歩いてきたので話を聞く。

どうやら原作のゴルゴン³姉妹らしくオルビアが逃がした為此処まで来たらしい、俺はフィツシャーの方へ行くよう促していた。

何故なら理由は簡単で並々ならぬ嫌な予感が体を駆け巡っていたからだ、この感覚はあいつだろう。

できる事ならばオルビアの手助けにも行きたいがこの状況で屋敷に入る事はできない、この感覚は懐かしいオハラで感じた感覚だからだ。

苛烈な絶対正義を掲げる男の怒気……いや憎悪とも取れる威圧感が着実に近づいていた。

そう思つて振り向いてみたら其の予想通りあいつがそこには居た……

「久しぶりだな……サカズキ」

「フンツ、やっぱり変わらんのう」

「今回はボルサリーノの奴はどうした？」

「奴は天竜人の護衛兼逃走補助じゃい」

「俺としては何事も無いままこの騒動を終わらせたかったんだがな、まあお前とはちゃんとした決着をつけないとな」

「悪いが此処で今度こそはお前の芽は摘ませてもらうぞお、『空駆け人』!!!」

そして俺達はオハラ以来2回目の戦いへ身を投じるのであった……

グラム Side Out

オルビア Side In

来たのは海軍中将だったらしくかなりの迫力があるけど、悪魔の実の能力ではこちらが疲労で倒れる前に勝つ手立てが有る。

それは同時展開で体を『留めて』能力の使用を『止める』事で一般人レベルにまで落ち込む。

だって動けないし能力使えないってただの棒立ちの案山子です、それなら私にだって勝つ事ができる。

そのためには接近がまずひとつの課題だ、両手が体に触れてしまえば一気に能力を使えば同時展開の条件が揃う。

「悪いが『アイスタイムカプセル』!!」

「わっ!!」

氷が足元から凍りつかせる為にせり上がって来たから飛んで避ける。其の距離を詰めてクザンさんが触れようとするが一瞬私の指先の方が速く触れる、そこで私は……

「能力の使用を『止める』」

「なっ、これは一体どういう事だ!？」

驚くのも無理は無い、何故なら海楼石でも無いのに能力が封じられたのだから。

まずは此れで第一段階が完了した。

クザンだってまさかそんな能力だとは気づかないし、そもそも情報

では悪魔の実など出なかった、其の為にクザンは戸惑っていた。

「まさか……これがお前さんの能力かい？」

「ええ、これが私の食べた悪魔の実『トメトメの実』の力ですよ」

もし事前に情報があつたならこつても簡単にやり込められなかっただろう、激しくこの事をクザンは悔いていた。

結果がこれでは悔しいのも無理は無い……自然系という最高の実を食べていながら、其の力を油断した為に封じられるという不始末、つまり解除されるまで己の身体能力に頼ってやり過ぎしかない。

しかも其れだけでなく、2度と触れられてはいけない理由がクザンには有つた、見聞色ではなく天然の勘次に触れられた瞬間が敗北だというのに気づいていた。

「やあ!!」

「くっ!!」

「ていつ!!」

「はっ!!」

クザンは避けに徹するしか方法が無かつた。何故ならば『触れられてはいけない』という事は、防御という行動も其の『触れられる』に含まれているからだ。

しかし其の均衡は少しずつ崩れだす。壁をぶち抜く事が出来ない方向へ誘導され、クザンは跳ぶ事も大きく動く事も出来なくなつていき遂に其の鬼ごつこの終わりが来た。

「残念ですが……捕まえました」

「本当に残念だよ、知ってたらこつはならなかった」

結局其の後クザンは気絶するまで攻撃を受ける羽目になった。そして息も絶え絶えになったオルビアは能力を解除して中将を一方的に倒した、つまり戦闘面でも役に立つという事を再認識して喜んでいた。

「さようならクザンさん……」

そう言つて屋敷の外へオルビアは進むのだった……

『燃える屋敷の決戦』

勝者 ニコ・オルビア

オルビア Side Out

グラム Side In

「オラア!!!」

「フンツ!!!」

「岩漿犬牙!!!」

「紙絵!!!」

「流星火山!!!」

「ふっ!!!、廻天乃力あ!!!」

「冥狗!!!」

お互いが拳をぶつけ合い、グラムがマグマを避けてサカズキが回転を受け流すといった一進一退の攻防が最初の方は有った。

しかしグラムが避け続けていく毎にサカズキが少しずつ食らい続けてきたダメージを大技で一気にひっくり返そうとする兆候を見せだした。

「大噴火！！」

「くっ！、紙絵！！」

「岩漿犬牙！！」

「廻壁かいへき！！」

「岩漿犬牙！！」

「月歩！！」

「大噴火！、冥狗！！」

「『エア・バズーカver. CO2』」

其の攻撃を避けても避けてもサカズキは大技を連打していきシトラは其の行動に半ば呆れを抱いていた。

「サカズキ……お前いい加減にしろよ……」

「ぐぬう……『大噴火』あ！！」

頭に血が上っているのか赤犬は大技で俺を屠ろうとする。

しかし「大噴火」や「流星火山」などの俺にとっては見聞色の覇気と新たに見つけた二酸化炭素だけの『エア・バズーカ』で相殺できる。

そして其の方法をサカズキ自身何度も見ているのにまだ連発する。

「これでどうだ？、『サンド・バズーカ』」

今度は地面を抉り取ってぶん投げる方式を取り目晦ましに使う。だが内心は喰らえば只で済む訳が無い、そして避けてても予測しない所への砲撃からラッキーパンチなどを考えれば精神的に消耗する。

「小賢しいわあ！！」

そうやって大きなマグマで相殺するがやはり最初の時に比べて精彩が無い、頭に血を上らせているのが原因だろう。もし冷静だったならこんな致命的な失敗を犯してはいない、ほんの少しのマグマで相殺してすぐに反撃に転じれる手を打つはずだ。しかも大技の連打で肩で息をしている、そんな大きな隙を見せられてしまえば決める所だ。一気に剃で懐に入り込みあの一撃の為に極限まで体を捻る。

「悪いが……今のお前には負けない」

「なっ、何時の間に居るんじやあ!!」

「この一撃で終わらせてやる……」
『輪廻天堂』りんねてんじょう「!!」

其の一撃で勝負はついた。

サカズキはそのまま崩れ落ちて、そのままフィッシャーとオルビアが合流して、全員で『マリージョア』から脱出する。

『マリージョアの決戦』

勝者 グラム・トランセオ・リクトウム

「さて、これでいいんだが」

「何か困っているのか、グラム」

「この先フィッシャーよ、お前はどつするんだ？」

「俺の心配か。俺は冒険家だから、どこかに流れていくだけだ。気にするな」

「そうか、船に乗らなくて良いのか。」

「いらねえよ、またな」

「又会おうな。フィッシャー」

「『魚人島』に来て俺がいたら歓迎してやるぜ」

そうやって俺達は別々の方向に舵を切った。

第26話「激戦のマリージョア」(後書き)

今回でマリージョア編が終わりました。

次回は後日談を書きたいと思います。

一応フィッシャーさんも戦いましたがカットしています、少将レベ
ルには原作でもぜんぜん苦戦してなかったのです。

第27話「未来計画」(前書き)

今回は後日談です。

第27話「未来計画」

グラム Side In

マリージョアでの目的は終了したが、此れで原作13年前という結構切羽詰った状況ではある。

もう少ししたら計画としてはシャンクスに会ったりゴア王国などといったものがある。

フィッシャーが確か死んでいたが何が理由かは知らない、だから少しの間『魚人島』の近くで様子見をするのが最適だろう。

10年前のルフィに会う事やゴア王国の火災と時間が前後していたら良いのだが。

とりあえずは計画を練る事だな、仲間に対しての悲劇だけは避けさせてもらつぜ。

グラム Side Out

アバロ Side In

マリージョアでの目的は終了したが、俺の個人的な意見としては、今回は出陣も無く能力を使う事もできなかったので、不完全燃焼と行ったところだ。

グラムは帰り際にフィッシャーというあの魚人と親しくなっていたが、よくよく考えてみたら何故魚人は蔑まれているのだろうか？

今回の事や人間の中にも醜い心を持った奴は幾らでもいるというのに。

まあ、魚人より人間の方が圧倒的に数が多いからかもしれないが、数の優位なんぞで偉ぶっているようじゃまだまだだな。

グラムの奴はどうやらこれからの計画を練っているようだが、俺はあいつより良い案を思いつくのはまれだから、あいつにそういう事は一任させている。

頼りにしているから今度も良い計画を頼むぜ、俺が活躍できるような場所もな、船長さんよ。

アバロ Side Out

サウロ Side In

今回の目的は終了したが、天竜人に喧嘩を売るなど海軍の時には考えられなかった。

グラムは帰り際にフィッシャーというあの魚人と親しくなっていたが、あの魚人はグラムに対してどのように考えておるんだろうか？

魚人は差別の歴史の為、人間を恨んでも仕方ないだろうに。

まあ、今回の事で少しである男がグラムと仲が良くなったら其れが一番良い事なのだが。

グラムの奴はどうやらこれからの計画を練っているようだが、どう

やら大きな事のようにだで、険しい顔をしているから分かりやすい。

もし、船員全員出陣ならやってやるが、どうも今すぐではないようだから気持ちの奥になおして置こう。

さて……買出しのメモも忘れてはいかんでよ。

サウロ Side Out

クローバー Side In

今回の目的は終了したが、かなり精神的に参った。

天竜人に喧嘩を売るなど正気の沙汰ではなく、海賊を含めても普通の人ならば考えられる訳が無い。

愚痴を沢山言っても仕方ないのだが、グラムさんは帰り際にフィッシュヤーというあの魚人と親しくなっていたが、あの人は魚人の差別の歴史を知っているのだろうか。

多分知らないだろうがかなり根深いものだ、其れを万が一解消できたらならそれで良いだろう。

そして何かしら計画を練っているようだがこれ以上肝を冷やすのはきつい。

うう……胃薬飲んどこう。

クローバー Side Out

オルビア Side In

マリージョアでの目的は終了したけれど、今回の行動で自分の能力について使い方が良く分かったし、戦闘面についても収穫としてはとても大きかった。

そして今回のことで懸賞金が跳ね上がったこともあって、ホクホク顔になってしまう。

フィッシャーさんとも親しくなれたし、『魚人島』に来ても良いと言ってくれた。

海底の楽園と名高い『魚人島』、一体どんな光景が広がっているのだろう……。

行った事が無い為とても期待してしまう、しかしグラムの顔を見たらまた計画を練るとき顔になっていた。

あの人を支える為にも『魚人島』は少しの間我慢ね、頑張ってるグラム。

オルビア Side Out

第27話「未来計画」(後書き)

今回は後日談です。

次回からは時間が飛び始めていきますがご了承ください。

第28話「白ひげとの遭遇」(前書き)

白ひげとの勝負ですがあとがきでアンケートを取ろうと思います。

第28話「白ひげとの遭遇」

グラム Side In

あのマリージョアの激戦から過ぎたある日、手配書を回し読みしていたから俺は気になって見させてもらったが、それをみて俺は苦笑いをせずには居られなかった。

なぜか俺の懸賞金が思ったより上がっていなかった、きっとサカズキには一度勝っている事が原因だろう。

だが驚くのは次の手配書を見てからだった。

『空駆け人』 グラム・トランセオ・リクトウム 懸賞金 7億7千万ベリ

『知識の女王』 ニコ・オルビア 懸賞金 5億2千万ベリ

なんとという事にオルビアが前回より倍以上も上がっていたのだ。

きっとクザンを倒した事や多くの人の脱走を補助した事が原因だろう、正直これを見てオルビアは何故かニヤついていた。

まあ、戦闘面では十分すぎるほどの収穫を得たのだから当然といえば当然だ。

現在俺達は海軍本部である『マリノフォード』から遠ざかって旅をしている、何故なら計画を練る際に海軍に遭遇するのは、ばつが悪いと思ったからだ。

そんなことが理由なのだが俺達は元気に航海を進めていた、目指すはポーネグリフとかだったのだが、もう9割が真相らしいので新世

界で行ってない『ワノ国』や最終地点である『ラフテル』に行けば全部が明らかになるだろう。

其のあとは海賊王とかではなく世界政府や天竜人の全てを暴露して隠居生活でもしようかと思う。

そんな事を考えていたら馬鹿でかい船が見えた、船首が鯨というのを見て俺は船を近づけた。

グラム Side Out

???? Side In

「オヤジ、誰か来たよい」

「船首とかはどんな奴だ？」

「『ワノ国』の鎌鼬って奴だよい」

「ならきつとあの『空駆け人』の所だな」

「そんな!!、わざわざ此処まで奴が来る必要があるのかよい!？」

「わからねえが……戦おうぜって言うなら歓迎だな」

「流石の『空駆け人』も『白ひげ』に喧嘩を売るわけが……」

そんな中船が近づいてきた、そして船に乗り込んで言われた一言が

……

「お前達がしろひげ海賊団、そしてそこにいるのが『白ひげ』であつているか？」

どうやら確認するつもりだったよい

マルコ Side Out

グラム Side In

どうやら確認を取った結果、白ひげ本人だったらしい、いやー原作より若いね。

だって呼吸器の鼻管とか点滴をつけてないもんな、此れなら戦う事を言っても医師達だって止めたりしないんじゃないのか？

そう思った俺は微笑みながら大きな声で叫んだ。

「俺はお前と戦いたい！！！」

其の言葉に対して返ってきた言葉は……

「グラララララ！！、良いぜかかって来い！！！」

其の返答に対して俺は白ひげの船……モビー・ディック号に自分の船を寄せた。

グラム Side Out

白ひげ Side In

「なっ……予想通りだったろう、マルコ」

「全く、笑いながら言っても説得力が無いよ」

「まあ、良いだろうが」

「戦うのはどうするつもりだよ？」

「あっちの奴ら全員がやる気だから、其れに見合っただやっださねえ

とな

そう言ったオヤジは立ち上がって気合を入れる。

「さて……と、薙刀も持ったし誰が一緒に行く？」

そしてオヤジはそのまま無人島へ向かって飛び降りた。

白ひげ Side Out

海軍 Side In

ブルルル……ガチャ

「はい、こちらセンゴク元帥」

「観察部隊から交戦の連絡がありました、元帥殿！！」

「誰と誰だ？」

「おそらく『四皇』です！！」

「あとの一人はどうなんだ？」

「不明で海賊船詳細な情報が無いです！！」

「観察部隊からの其の海賊船についての情報は！？」

「船にカマイタチの船首！、そして海賊旗は本を銜えたカマイタチと王冠を被ったカラカルが巨人の肩と膝に乗ってるといった奴です！！」

其れを聞いたセンゴクが頭を抱えた、半年前にマリージョアで大事件を起こしておきながら今度は四皇との交戦。

しかも奴の気性から考えて一番やばい奴を選ぶ、つまり『白ひげ』エドワード・ニューゲートとの交戦が濃厚だ。

「もう1人の方は『空駆け人』だ！、こちらは応援を送るから接近せずに気をつけるように……！」

全く……こっちからすれば次々に混乱を起こす。まさに『台風』のような奴だ。

第28話「白ひげとの遭遇」(後書き)

次回が白ひげ戦ですがアンケートの内容としてグラムVS白ひげは確定ですが

他のアバロやオルビアの戦う相手を募集したいと思います。

今回は全員(ロビンを除く)出陣なので長くなりますがどうかご意見をお願いします。

第29話「V S 白ひげ海賊団(前)」(前書き)

アンケートを貰った結果でばらついたのと、アバロに剣の強い奴をぶつけるというので花剣のビスタ、オルビアにマルコ、サウロにジヨズとクローバー以外全員決まりました。

傘下の海賊達がかきているようにしておけば、サウロVSリトルオーズJrなど出来たのですが申し訳ありません。

第29話「VS白ひげ海賊団(前)」

グラム Side In

無人島の真ん中で俺は今白ひげと睨み合ってる、どうやら霸王色の覇気は出してないらしい。

其れを抜きにしても……こうして向き合ってると思うのはやはり大きい。

世界最強の名に恥じない風格と強さを感じる、多分サンファンやデボンとサシで戦ってもこの男なら勝てるだろう。

そう思えば声をかけてよかった、白ひげとの遭遇などそう簡単に起こるものじゃない。

戦いに胸を躍らせて、俺は再び白ひげを睨み返した。

グラム Side Out

白ひげ Side In

この無人島の真ん中で戦う相手にはかなり良い奴だ、しかし何か雰囲気が見た目相応じゃねえ……

きつと大人びてるとかそういうのでもなく長命な種族の奴なんだろう。

これから始まる事に期待でもしてるのか、笑いながら睨んでやがる。

なら……とびきりの楽しみをくれてやるぜ、グラララララー!!

俺は足を浮かせてそのまま力一杯に地面に叩きつけた。

白ひげ Side Out

Other Side In

「まさか……いきなりやる気かよ!?!」

「おいおい……まじでやるのかよ」

「ヤバイだろ、下がるぞ」

そうしろひげ海賊団の船員が言ってから多くの奴らが散らばった。

しかし、何も起こる事は無かった。

「なっ………何でオヤジの『あれ』がおこらねえ!?!」

「まさか止める方法があるのか!?!」

そう言っでどよめく白ひげ海賊団、しかしこの真相は島の向こうにあった。

Other Side Out

グラム Side In

危なかった……、いきなりの地震攻撃をとっさに俺は地面に手を置くことで円状に衝撃を拡散させた。

一直線にしたのはきつと能力の事を知っていて円状に放てば逆の回転を伝わらせて無効化すると読んだのだろう。

しかし、それで攻撃の手を緩めるような男ではないと分かるのですぐさま次の攻撃に備える。

ギーン！！

一気に突っ込んできた白ひげの薙刀攻撃を鉄塊で防ぐ、そこから鉄塊を解いて剃で後ろへ飛ぶように逃げる。

「グララ……分かつてる様だな、薙刀にも力を付与させれるって事を」

「そうでもないよ、突っ込むなんて事はしないだろう」

「まあな……、中々の読みだがこれはどうだ！！」

一気に横に放たれた攻撃を紙絵で避ける、しかし其の後の縦攻撃は掠ってしまった……。

しかし其の後に来たのは薙刀を伝つての地震攻撃であった、つまりあの攻撃が全て布石だったのだ。

一気に月歩で逃げるが白ひげは只の跳躍で俺の後ろへ飛ぶ、そしてそのまま横に斬ってくるのを紙絵で避けて回転の力で空気の壁を作り着陸する。

「おいおい、この程度か？」

「何で……後ろに居る！！」

俺は叫びながらも後ろ回し蹴りを放つ、しかし僅かに後ろに下がって白ひげは回避する。

こちらとしては攻撃を休める気は無い、このまま連撃に入る。

「『嵐脚・回転木馬』!!」
「おっと」

薙刀の腹で受け流しながら回避するが、此処で俺は大技を仕掛ける為腕に力を込める。

「『螺旋槍』!!」
「うお!？」

腕で跳躍した後に一気に回転を加え突撃するという技だ、白ひげは受け止めきつたものの仰け反る。

着地寸前に低空の『エア・バズーカ』を放つがそれは薙刀を振ってかき消す。

だが其の瞬間に俺は体を捻り一気に飛び上がって拳を突き出す。

「『跳槍』!!」
「グハッ!!」

薙刀を地面スレスレに振った為顔付近への防御が間に合わず顔へと直撃する、そこから俺は手を鉄槌の形にして頭に向かい縦回転しながら急降下する。

「『満月小槌』!!」
「グッ!!」

遂に薙刀を手放して防御をしなくてはいけなくなったのか、白ひげは腕を交差して受け止めた。

「グラララララ、やるじゃねえか!!」

「そっちな……」

「まあ……薙刀も取れそうにねえから、『こっち』でやるか?」

そう言って白ひげは握りこぶしを作って腕に出来た力瘤を叩く……
つまり『拳』、殴り合いだ。

「望む所さ……」

「じゃあ行くぜ、小僧!!」

そう言いながら一気に接近する白ひげ、対してこっちは拳を作って体を捻る。

ドゴンッ!!

拳に地震の力を付与した白ひげの一撃と回転を加えた渾身の俺の一撃は相殺された、しかし白ひげはさらに足で蹴りに掛かっていた。

メキメキメキッ!!

腕の何倍の力を込められる足の一撃は防いだ腕ごとアバラをへし折り吹き飛ばした、そこに白ひげ海賊団の奴らの歓声が聞こえる。

「やっぱりオヤジは強え!!」

「流石の『空駆け人』もオヤジの目の前には形無しさ!!」

「其れで終わりなのか、小僧?」

「んな訳がねえだろう……廻れ!!、俺の回転細胞よ!!」

ギョルギョルギョル!!

体の中で其の音が鳴り響き腕とアバラの骨が治っていく。

「ガアアアア!!」

俺は雄たけびを上げて、一気に白ひげに向かって行った。もう小細工など必要ない、真正面からの殴り合いにしゃれ込もう!!

「ウオオオオ!!」

「ふんっ!!」

「ラア!!」

「ていつ!!」

「ガア!!」

「かつ!!」

俺の拳はことごとく白ひげに受け止められていくが少しずつ後退していく、気合ゆえの結果だろう。

「ハア!!」

「ちっ!!」

「又ンツ!!」

「くっ!!」

「ヤア!!」

「うお!?!」

此処まで下がったならあの一撃には十分だろう……最終決着に向け今まで以上に体を捻って拳にも力を込める。

「良いぜ、俺も全力で立ち向かってやる……」

そう言って白ひげも地震の力を込めて振りかぶる。

そしてお互いに拳を突き出した。

「『輪廻天掌』!!!」

「グララララア!!!」

しかしお互いの拳がぶつかる事は無く拳はお互いの腹に吸い込まれていった。

グラム Side Out

アバロ Side In

無人島の右端で、俺は今シルクハットをかぶった剣士……もといビスタとか言うやつを一方的に睨んでいる、どうやら白ひげとは違って霸王色の覇気は使えないらしい。

まあ、相手が霸王色の覇気を使ってもこっちは気絶する事は無いから良いんだが……こうして向き合って思うのはやはり只者ではない。

白ひげ海賊団の隊長ともなったら、其の實力はおよそ海軍の上層部とタメを張れるとも言われている。

そう思えばこの機会は僥倖ともいえる、こういった實力者と戦うのはそう簡単に起こるものじゃない。

これから戦いに胸を躍らせて、俺は血が出るほど強く拳を作った。

アバロ Side Out

ビスタ Side In

白ひげのオヤジの気紛れで戦う相手にしては気を抜けない奴だ、しかし何か同じ感じの雰囲気は凄く伝わってくる。

もしかしたら同じ様に剣術を使える奴なのかもしれない。

これから始まる事に気合を入れているのか、此れでもかと言つほど睨んでやがる。

でも……其れはもしかしたら空回りするかも知れないぞ。

俺は鞘に手を掛け居合いの構えを取った。

ビスタ Side Out

アバロ Side In

何だあれは……、今まで見たことも無い奇妙な構え方をしている。

同じ様に剣術を使うやつだったというわけか。

しかし、あのような構えは見たことが無い。

つまりあの構えは新世界のものであるという事だ。

こうなつたらこつちとしても出し惜しみをしていけない、即座に俺もカラカルへと変化する。

「おいおい……動物系ソオンの能力者だったのか」

「そうだ、不恰好な人獣型だけだな」

「これじゃあ、まるで狩りをする人と獣の図だ」

そう言いながらさらに奇妙な行動で近づいてくる。

しかしこちらは月歩で空を飛びさらに驚かせるためにある方法と剣で一気に後ろを取る。

「おい、何処を見ているんだ？」

「なっ、後ろか!？」

俺は後ろを取って後ろ回し蹴りを放つ、しかし剣で受け止められビスタは難を逃れる。

こちらとしては様子見をしたいので、このまま月歩による急降下で体勢を整える。

「どうやって後ろに行った？」

「秘密だ……其の歩法をやめろというメッセージのつもりだが」

其の言葉を言い終わり静寂が包む空間で先に動いたのはアバロの方だった。

「オラア!！」

「残念だったな……読んでいたぞ!！」

剣を使つての一撃はビスタに完全に読まれてしまい居合いの餌食になる。

「どうやったかは知らないが無傷とは、……強い奴だ」
「鉄塊をしないと負けていた、やはり……強い」

お互いが強さを認め合って三度向き合う、先に動くのは俺だ。
それだけは絶対に譲らない。

アバロ Side Out

サウロ Side In

無人島の下の方でワシはダイヤモンド・ジヨズと向き合っている、
海軍時代に手配書を見ていたので知ってはいたが、白ひげの船の3
番隊隊長のようだ。

まあ……普通に考えれば懸賞金が並の戦闘員に比べて高かったんだ
から気づきべきだっただよ。

まあ、相手が霸王色の覇気を持っていないだけでも今回の戦いは楽
なもんだ。

白ひげ海賊団の隊長ともなったら、其の実力はおよそ海軍の上層部
とタメを張れるとも言われている。

そう思えばこの機会は自分の力がどれ程のものになっているのかを
試せる格好の場所だ。

これから始まる戦いにワシは気持ちを切り替えた。

第29話「V S 白ひげ海賊団（前）」（後書き）

思ったより長くなるので前中後編に分けていきます。
考えて書くので遅くなると思いますがすみません。

第30話「V.S白ひげ海賊団(中)」(前書き)

今回で中編です。

第30話「VS白ひげ海賊団(中)」

アバロ Side In

このビスタとかいう奴との戦いは、きっと大きなものにはなるだろう。

俺の今の力を全て駆使して勝ってやるぜ、覚悟しな。

俺はビスタを睨み再び剣で接近をした。

アバロ Side Out

ビスタ Side In

この男はさつき斬る前に後ろを取られたが一体どのようなからくりを使ったのだろうか、幾ら頭で考えてもうまい仮説が立てられない。

しかしそのように考えていたら、なんと睨みながら先ほどと同じ速度で突っ込んでくる。

ならば……さつきと同じ様に斬るまでだ、覚悟しろ!!

そう思い私は剣を鞘に納めた。

ビスタ Side Out

アバロ Side In

大丈夫だ……、さつきとは違う方法で一気に形勢逆転させてやる。
一直線になったのは必然的なものだ、ビスタの奴は斬ろうと剣を鞘に収めている。

しかし、それで速度を緩めるような事は無い……距離を冷静になつて数える。

目の前まで30m、20m、10m……今だ！

俺は一気にあの姿になって速度をあげる、此れがさつき後ろを取つた方法だ。

さて、懐に飛び込みそのまま終わりにしてやるぜ、ビスタ！！

アバロ Side Out

ビスタ Side In

近づいてきた。無鉄砲に一直線のまま、先ほどと全く同じ速度で彼は近づいてきた。

普通に考えれば速度を変えれば良いのに。

早いまま速度を急に緩めても、射程範囲内に入ってしまうのだ。

しかし、彼にはそんな言葉など通じないだろう……ならば心置きなく斬らせてもらつまでだ！

ヒュンッ！！

「何ッ!？」

なんと彼を斬ったかと思っただが聞こえてきたのは風斬り音だけであった。

ビスタ Side Out

アバロ Side In

ビスタの奴の剣は当たらずに懐に飛び込むことに成功した。

さて……これから俺は勝たせてもらうぜ、覚悟しな。

俺は人獣型に変わってビスタを掴みそのまま力任せに投げる。

そして投げた方向に向かって、飛んでいくビスタに対して、獣型になって追いかけていく。

そして十分な助走をつけたところで、月歩で飛び上がり剣を抜く。

そして落下する方向へさらに月歩をし加速、其の勢いそのまま突きを繰り出す。

普通に迎撃するのならば無理だ……まだ俺には加速手段がある。

「『^{マオヤ}猫牙』!!」

アバロ Side Out

ビスタ Side In

彼は私を投げ飛ばした後に飛び上がった。

投げられた後、さらにあの速度を保ったまま走り、飛び上がった事で一瞬見逃したのだ。

上を見たら剣を抜いて、急降下してくる。どうやらこの一撃で決めるつもりらしい。

「面白い、受けてたとう!」

居合いではなく構えて迎え撃つ準備をする……しかし彼は其の一つ上をいつていた。

ビスタ Side Out

アバロ Side In

ビスタの奴の剣は当たらず俺の剣だけがビスタに刺さっていた。

俺は最後に鉄塊をして鉄の硬さとわずかな重さを加え速度を上げた。

それで俺は無傷のまま勝利した、このままおいていけば死ぬが決闘の為背負う。

そして俺は勝利の余韻とともに無人島を出る方向へ歩いていった。

「無人島決戦『剣の陣』」

勝者 アバロ・ピサロ

アバロ Side Out

サウロ Side In

悪いが……ワシより小さいなら方法は一つしかない、殴ってしまえば吹き飛ばし、蹴っても結局同じ結果だ。

「お前さんには悪いが此れで我慢してくれ」

「なにっ……うわっ!？」

グンツ!!

「そおれっ!!」

「うおおお!!?」

ワシは力ずくでジョズの奴をぶん投げた。

サウロ Side Out

ジョズ Side In

さすがは巨人族といった所か、白ひげ海賊団の中でもかなりの腕力を誇る俺を投げやがった。

ハグワール・D・サウロといえば元は海軍中将だった男だ、つまり簡単に勝てる男ではない。

噂で聞いたオハラでのバスターコールで軍艦を5隻沈める腕力へどれ程立ち向かえるかは分らんが、全力で相手しよう、行くぞ!!

そう思い俺は辺りにある大きな岩から一際大きい岩を持ち上げて投げつけた。

ジヨズ Side Out

サウロ Side In

ジヨズの奴がぶん投げてきた岩を拳の一発で砕く。

これでは埒が明かな、近づくでよ。

近づきワシはがっしり組み付く形でジヨズを掴む。

「こやつのはななんだで、普通の奴に比べて重いだよ」

「それも其のはず、この体を見れば分かる事だ。」

「なっ!?!」

ジヨズの奴の左半身がダイヤモンドへと変わっていた、しかしワシはダイヤモンドの弱点を知っておる。

さあ、来るがええ。

きちんとした対策なしにはワシの勝ちの確信は揺るがんでよ

サウロ Side Out

ジヨズ Side In

俺の肉体の硬さと突進力を生かした最大の一撃をお見舞いしようと、助走をつけて突っ込んでいく。

サウロは構えて迎えつつ用意をしているがこの一撃は負けない。

「ブリリアント・パンク!!」

ジヨズ Side Out

サウロ Side In

ジヨズの奴が助走をつけてワシに突っ込んでくる。

これは自信があるからできることだがワシは此れで勝つことが出来る。

まだ世間ではダイヤモンドは『砕けない』と思われているが其れは間違っておる。

実はダイヤモンドは『傷がつかない』だけで壊れるのはごく普通に起こるもんでよ。

だから……

サウロ Side Out

一応結果として残ったのはジヨズが大きく損傷を受け、戦う事が不可能となりサウロはジヨズを抱えたまま無人島を出た。

「無人島決戦『拳の陣』」

勝者 ハグワール・D・サウロ

オルビア Side In

無人島の上の方で、私はバナナみたいな髪のをした人……もといマルコとか言う人と向き合っている。、どうやら白ひげとは違って霸王色の覇気は使えないらしい。

まあ、相手が霸王色の覇気を使ってもこっちは気絶する事は無いから良いんだけど……こうして向き合っているのはやはり只者ではない。

気迫もそうだけど、白ひげ海賊団の中でも隊長ともなったら其の實力は高く、およそクザンさんぐらいを予測しておいた方がいいと思う。

そう思えばこの機会は僥倖ともいえる、この人に勝てば前の戦いで勝利はまぐれではないのだから。

これから始まる戦いに胸を躍らせて、私は気合を入れた。

オルビア Side Out

マルコ Side In

白ひげのオヤジの気紛れで戦う相手にしては気を抜けない奴だ、しかも何かその知れない感じがびしびし伝わってくるよい

もしかしたら實力は船にいた奴の中でも最上位なのかもしれないよ。

これから始まる事に気合を入れているのか、頬を叩いている。

でも……何で俺に限って紅一点なんだよ。

俺は飛び上がり、能力を使った。

マルコ Side Out

オルビア Side In

何だろうあれは……、今まで見たことも無い鳥が空を飛んでいる。

「動物系」^{ソオン}の能力者だったというわけか。

しかし、あのような鳥は見たことが無い。

つまりあのモデルはうわさに聞く『幻獣種』であるという事だ。

こうなったらこっちとしても出し惜しみをしていけない、即座に私を手を打ち合わせて集中する。もカラカルへと変化する。

「あなた……動物系」^{ソオン}の能力者だったのね」

「そうだよ、翼の時点でバレバレだが確かに合っているよ」

「これじゃあ、月歩で接近しなきゃあ駄目だ」

マルコさんは翼を広げて火を放つ。

しかしこちらは月歩で空を飛び、避けて距離を詰めていく。

だが相手は鳥、回転速度も高度もこちらより上で近づぐことが難しい。

牽制の為に時折低くして攻撃を放ってくるが、そのチャンスを活かすにはやはりこちらが触れて』とめる』しか手立ては無いのだ。

こちらとしては様子見をして、掴むタイミングを測るため慎重に戦ってくれば、大変楽になるのだけれど、そう簡単に事は運びそうに無い。

「逃げていてばかりでは駄目だよ」

「急降下して……こちらにプレッシャーでもかけているのかしら？」

「残念だが、そうではないんだよ！！」

「きゃあ!?!」

急降下をしてきたのはプレッシャーではなく、一度降りる事で相手の警戒心を解く為のマルコの心理作戦の上の攻撃だった。

しかしこの攻撃は気を張っていたオルビアによって阻止され、たいしたダメージにはならなかった。

「あれで無理とは、……用心深い女だよ」

「剃で一気に逃げないと負けていた、やはり……強い」

お互いが強さを認め合って向き合う、しかし先に動くのは禁物だ。その為慎重に相手の出方を伺う。

しかし先ほどのような方法もあるどうして戦えばいいんだろうか……

オルビアは珍しく戦いの中で苦悩していた……

オルビア Side Out

クローバー Side In

無人島の左端の方で俺はクリエルとか言うやつと向き合っている、
10番隊の隊長で両肩にはバズーカを携えている。

まあ……普通に考えれば負担が大きいかから使わないだろうが相手が
相手だから不思議ではない。

白ひげ海賊団の隊長ともなったら、其の實力はおよそ海軍の上層部
とタメを張れるとも言われている。

そう思えばこいつに勝てば俺もまた准将や少将と戦えるほど強いと
いうわけだ。

これから始まる戦いに俺は気持ち切り替えた。

第30話「VS白ひげ海賊団」(中)「(後書き)

次回でオルビアとクローバーの決着で其の後はW7のトムさんの死
刑阻止をやります。

一応ケンイチの小説でプロローグは書きました。
資料が無い為あちらの方は鈍行になりますがご了承ください。

第31話「VS白ひげ海賊団(後)」(前書き)

今回が後編です。

第31話「VS白ひげ海賊団(後)」

オルビア Side In

このマルコとかいう人の戦いは、きっと長丁場になるだろう。

私が苦悩するほど作戦を立てにくい相手、空を飛ばれるのはそれだけで辛いのだ。

私は月歩を使い其の後に落下を『とめる』方法を思いつく、しかし其れをしたところで相手が降りてしまったら解除して疲れが来るのでデメリットの面が強い。

こうなれば運の要素が絡んでくるけれど、一気に近づきカウンター気味に能力を使おう、そう思い私は次に備えた。

オルビア Side Out

マルコ Side In

この女はさっきの不意打ちのような攻撃も避けていた、なんと用心深い女だ。

しかしそのように考えていたら、相手は構えた状態で慎重に出方を伺っている。。

残念だが距離があればさっきのように牽制でそっちの出鼻を挫かせてもらっただけだよ。

そう思い俺は再び飛び上がった。

マルコ Side Out

オルビア Side In

一気に飛び上がって行ったが大丈夫だ……、さっきとは違う方法で
一気に形勢逆転させてやる。

あの炎自体に殺傷能力は無い、つまり体術で倒す為の布石なのだ。

しかし、それでも目の前をふさぐのは厄介だ……距離を冷静になっ
て数える。

およそ50mほどだろうか、その間降り注ぐ牽制の雨を掻い潜って
なんとかしてもチャンスを掴まなくては。

私は剃で一気に駆け抜けていく、一瞬で10mをつめることも不可
能でないこの歩法ならどうにか懐には飛び込めるだろう。

そしてそのまま月歩で飛び上がり触れて終わりにしてあげますよ、
マルコさん！！

オルビア Side Out

マルコ Side In

近づいてきた。想像していたものより速い速度であの女は近づいて
きた。

普通に考えれば目が塞がって掻い潜るのが難しいと言つのに。
万が一『見聞色の覇気』があるならば別だが、近づいたところでど
うする気だよい。

しかし、クザンを倒すほどの能力……用心に越した事はない！

構えていたが、女の方は着々と接近する、どうやら万が一が当たっ
てしまっていたようだ。

牽制の雨をくぐって此処に来たらだめだ、俺はそう思いさらに高度
を上げる。

マルコ Side Out

オルビア Side In

マルコさんの牽制の雨は当たらずに接近する事に成功した。

さて……高度を上げたから此処からが正念場だ、気合入れるぞ。

私は月歩で飛び上がり、最高の高度の状態で落下を『とめて』二段
ジャンプをする。

その際きつちりと剃も使つて、マルコさんがいる方向に向かって近
づく。

そして目の前で相対する事に成功した。

再び落下を『とめた』状態となっているのと、神経を使う事で肉体
と精神の疲れが溜まってくる。

此処で決めないと……きつと疲れて倒れてしまつたろう。

そのためにも私は嵐脚を能力を付加して叩き込む、2回ぐらい持つてよ……私の体。

オルビア Side Out

マルコ Side In

女は俺に接近して蹴りの構えをする。

武装色の覇気があるならば別だが、無いなら徒労に終わるよい。

それとも何か考えがあつて蹴るつもりか、防御の準備はしておく。

「来るっ！」

海楼石では無いのは読んでいた、しかしこんな悪魔の実が有つたなど俺は知らなかったよい。

マルコ Side Out

オルビア Side In

結果として作戦は成功した。

私は最後に嵐脚で防御を『とめて』、能力の使用を『とめた』。

其の為私の蹴りは威力を殺される事無く、マルコさんへと直撃した。

そのままマルコさんは落ちていき私は勝利したけど、でも疲れから来る眠気がピークに……zzz

そしてオルビアは後で運ばれるまで眠る事になった。

「無人島決戦『証の陣』」

勝者が睡眠した為 勝者無し

オルビア Side Out

クローバー Side In

悪いが……俺と同じ様に火器を使うならばこれは戦う距離を取らなくてはいけない。

「お前さんには悪いが此れで我慢してくれ」

「なにっ……うわっ!?!」

ドンッ!!

「うおおお!!」

「くそっ、いきなり連射するのか!?!」

俺は後退しながら連射をしてある程度の距離を取る、相手のバズーカよりこちらの方が射程距離が長いと此れで優位に立てる。

クローバー Side Out

クリエル Side In

さすがに連射をされてしまっただけでも身を隠して状況を伺うしかない。

こちらはバズーカで一気に破壊力で攻め立てていけばいい、開き直つて行くぞ！！

そう思い俺は辺りにある大きな岩から身を乗り出しバズーカ砲を互い違いに連射した。

クリエル Side Out

クローバー Side In

クリエルの奴が岩の上でバズーカ砲を連射する。

此れでは一向に埒が明かんな、危険だが近づいてみるか。

近くの岩に隠れる形で近づいていき俺もまたそこから狙って撃つ。

「しかし、こつも近づきにくいならチャンスは……」

「相手が近づいてきている、こつなればチャンスは……」

「弾切れの時だけだ。」

チャンスが速く来るのを願いながらも牽制の意味合いでそういいながらも俺は撃ち続けていく。

クローバー Side Out

クリエル Side In

あの男は俺のバズーカから逃れて接近してくる、当てたいが当てられずに玉が残り少なくなっていく。

しかし俺がそうであるようにあいつの方も弾切れが近い、ならば先んじて動いた方が気持ち楽になる。

「うおおおお！！」

俺はそう思い砲弾が減り軽い方のバズーカを持ち、其のバズーカに弾を一つだけ残り接近していく。

クリエル Side Out

クローバー Side In

クリエルの奴が一つだけのバズーカに弾を込めながら接近してくる。

俺も弾切れを起こしたので同じ様に弾を込めながら接近していく。

お互いが速く動きすぎた為に土煙が上がっていく、今まで銃やバズーカで打ち砕いた岩もあるだろう、しかしこれはお互いがピンチでお互いがチャンスなのだ。

このまま土煙が晴れて俺が近ければ俺の勝ち、違っていたら俺の負けだ。

しかし皮肉にもお互いが同時に其の言葉を言う事になった。

「手を上げる」

お互いが指か手を動かせば死に至るのでここでお互い引き分けと言
う事で無人島を出る事となった。

クローバー Side Out

「無人島決戦『火器の陣』」

引き分けの為 勝者無し

これで全ての戦いが終わった。

しかしお互いの船長が全員の戦いが終わったというのに一向に帰っ
てこない。

そしてクリエルとアバロが探しに行ったら中心部で二人が倒れてい
た。

「無人島決戦『長の陣』」

引き分けの為 勝者無し

「まさか……クロスカウンターで……」

「引き分けになつてるとは……」

それから傷を治してお互いに満足して船に戻るがどうやら白ひげは
俺の事を気に入ったらしく全員で勝負の後に宴を開いていたが俺は
そこで嫌な視線を感じていた。

「なあ……白ひげ、あいつは？」
「ああ……ティーチの野郎だな、何か気になるか」
「あいつは何か嫌な感じがするんだ、もしかしたらとんでもない事をするかもしれない」
「まあ、野心が有るからな」
「もし、あいつが船外でやばい事をしたら知らせるが気をつけといたほうが良い」
「そうだな、気をつけておこう」
「ちよつと気になる奴がいるんだが此処に今いるか？」
「誰だ？」
「サッチって奴だが」
「いるだろう、おい、サッチ!!」
「どうしたんだ、オヤジ？」
「コイツがお前の事が気になるらしい」
「悪いがちよつとこつちで話がある、来てくれ」
「まあ……いいが」
「お前さん、悪魔の実を持ってないか？」
「持ってたとして、そう簡単に話すかよ」
「いや、欲しいとかじゃないし話す気は無いから正直に頼む」
「……持つてるけど、どうかしたのか？」
「もし、それが凄い実だつて事がヤバイ奴にばれたら即座に白ひげに伝えるとかした方が良い」
「何でそんな事を言うんだよ」
「凄い実だつたら野心に溢れた洋梨みたいな奴が狙うかもしれないからな」
「へっ、ティーチに限ってそんな事は無いと思うぜ……」
そう言つてサッチは去つていった。

宴も終わり全員が寝静まつた頃俺は船の上で酒を飲みながら満月を

眺めていた、そうしていたら一人の男が俺に近づいてきた。

「ゼハハハハ！！、随分タフなんだな」

「まあ、のんびりと飲むのも好きなんでね」

「月見酒たあ、風流なもんが好きなのか？」

「それもそうだが……とりあえず俺は寝るからよ、お前さんも速く寝た方がよいぜ」

「ゼハハハハ、最後に聞きてえがいいか？」

「ああ……何だ？」

「どうしてオヤジの傘下に入らなかったんだ？」

「俺達は自由きままな旅をしているからな、それだけさ」

「分かったぜ、じゃあな！！」

そう言っつて俺達は寢床へと着いた。

第31話「VS白ひげ海賊団(後)」(後書き)

今回で白ひげ戦終了。次回はW7ですが短いのでご了承ください。
原作まであと少しです。

第32話「造船技師暗殺計画」(前書き)

今回は1年ほど時間が飛んでいます。

第32話「造船技師暗殺計画」

グラム Side In

白ひげとの戦いが終わって1年ほどたった、あれからお互いに交流は深くなっていったが時間軸にあわせて行動する時期が来た。

今回は『海列車』を作った造船技師である『コンゴウフグ』の魚人のトムが、原作で死刑判決を下されるのを食い止める為に行動を起こす。

空島の『音貝』^{トントイヤル}が無いがそれに代用を利かせることは出来る。

オルビアに能力を使ってもらい、『虚言を言う事をとめれば』『真実を言うことしかできない』

ユニエス・ロビーで暴れるわけじゃない、判決を覆すだけだ。

そういうわけでアバロに舵を『ウォーターセブン』の方向へ向けてもらおう、ここにいる半分の奴らはサイファーポールに少なからず因縁があるしな。

グラム Side Out

??? Side In

『海列車』を作った造船技師である『コンゴウフグ』の魚人を、死刑判決を下させるために俺は計画する。

魚人なんぞ所詮は魚だ、褒美を受けるに値しないし死刑になっても良いだろ。

それに何よりCP5からCP9まで上がるにはそれに応じた功績が必要になってくるだろう。

「スパングム長官、先ほどの砲弾での怪我は大丈夫ですか？」

「痛いに決まってるだろ！、一体あれは何なんだ!？」

「おおかた武装した船の仕業だと思いますが」

「ならその船は停泊する為にどこか行っただろ！そこまで行くぞ、舵をとりやがれ!！」

スパングム Side Out

グラム Side In

さて……と一応『ウォーターセブン』の裏町へ着き廃船島に置いてあった『BATTLE FRANKY』という、名前があったものに搭載された武器を取り上げ、それ以外にも黒電伝虫を置き準備をして……機能不全にしたり最初期から順に、数字が若い者を壊していく。

やっている最中に罪悪感はあるが人の命と引き換えになるならば仕方ない。

そして4隻ほど船を残して俺達は島から出て行った。

グラム Side Out

スパングム Side In

「スパンダム長官、多数の船が壊されて使えません!!」

「何だと!?!、くそが……せっかくの計画を」

「捻じりきれたようなものや蜂の巣になったようなもの、拳銃の果てには斬られたり拳で壊されたものまで」

「こんなのできるのは巨人と強い海賊どもだ、そいつらを徹底的に探すぞ!!」

「しかし長官、使える船もほんのわずかですがあります!」

「そうか、よしそれを使ってトムを死刑に追い込むぞ、準備しろお!!」

スパンダム Side Out

グラム Side In

黒電伝虫から盗聴の内容が聞こえる、これで証拠は少しだが手に入った。

これはガーガーと音を立てて部分的な言葉しか分からない年代物だ。何せ盗む技術がないため昔の海軍との小競り合いで奪っただけのものである。

後は司法戦への襲撃を止めてしまえば良い、そしてオルビアの力で解決だ。

何日もの間政府の船の影に隠れるのは苦勞する、アバロに代わって久々に舵でも取るか。

我慢比べなら負ける自身が無いからな。

そう思って俺はアバロに代わってもらって、司法船から隠れるように舵を切った。

第32話「造船技師暗殺計画」(後書き)

今回は短くつなぎとして書きました。

2個やるにも傍らは資料があるだけましです、本当に。

第33話「墓穴掘り」(前書き)

今回が終われば遂にフーシャ村の予定です。

第33話「墓穴掘り」

グラム Side In

司法船の陰に隠れて襲撃防止の為準備をする。

砲弾が相手ならば斬れるし、海王類を倒せる程度の火力で俺達は倒せない。

さて、成功すれば計画が頓挫してトムは無罪になる。

そして逆にお前らを有罪にしてやるから覚悟しろ、サイファーポール共よ。

そう思い望遠鏡でいつ船が接近するのかを心待ちにしていた。

グラム Side Out

スパングム Side In

トムの死刑を決定的にさせる計画もいよいよ大詰めだった。

「スパングム長官、砲弾での狙撃は大丈夫ですか？」

「大丈夫に決まってるだろ！、これで終わりにしてやるぜ」

「この武装した船の装備はたいしたものですね」

「その通りだ、この船は司法戦を襲撃する為に俺が有効活用してやるぜ！、これで昇進も確定だ！！」

計画が成功すると信じて疑わないスパングムはいやらしい笑みを浮かべて大声で叫んでいた。

スパンダム Side Out

グラム Side In

さて……と遂に望遠鏡で見ていた時より船が接近している。

海王類以上にタフな俺達を見てビックリするんだな、スパンダムよ。構えて待ち続けていたが砲撃は一向に來ない、一体何事かと思っただら……

『六輪咲き（セイスフルール）クラッチ!!』

「ロビン、何をやったんだ？」

「えっ、怖い人が居たからつい……」

その言葉を聞き望遠鏡で見たらなんと幹部クラスがのびていた。

まあ、不意打ちでやられたら無理だよな。

そのままロビンが幹部の人たちをクラッチしていく間に、俺達はその使えない船に乗り込んで一気に破壊する。

しかしその向こうで少年が大きな声で叫んでいるのも聞こえていた、多分カティ・フラム……もといフランキーだろう。

このままユニエス・ロビーへとトムを連行していく中にフランキーとアイスバーグも付き添う、無罪は確定だろうが一応俺とオルビアは、黒電伝虫を持った状態で司法船へ忍び込む用意をする。

黒いフードを被って仮面をつける。俺は牛の面をつけてオルビアはかぼちゃの面でひとまず変装完了、後は司法船へと乗り込みユニエス・ロビーまで眠っておく。

これで袋小路に追い詰めたぞ、スパンダム。

親子二代にわたって俺達の怒りを勝ったと思うんだな。

グラム Side Out

スパンダム Side In

「スパンダム長官、司法船がユニエス・ロビーへ向かいます。」

「分かってる、なんで俺達が使った船が壊れたんだ!!」

「分かりません、それにいきなり気絶した所も有りますし」

「全く、役に立たねえ奴らだぜ」

「しかし長官、今回はもうトムを死刑にする事はほぼ不可能です」

「ほぼだろう、まだどうにかできるはずだ!、テメエらも考えろ!」

スパンダム Side Out

グラム Side In

さて、乗り込んでいたがどうもスパンダムの怒声が大きい。

「無能は盲目というわけか、あれじゃあ部下も苦勞するな」

「私があいつに触れば良いの?、嫌なんだけど」

「悪いけど我慢してくれ、ご褒美あげるから」

「子供みたいな釣りかたして……」

「そうむくれるなって」

そう話しながら司法船に揺られて『ユニエス・ロビー』に到着した。

グラム Side Out

裁判所 Side In

「俺は今回の件においてではなく、今まであんな凶器を存在させた責任を問いかけてんだぞ、フランキー!!!」

アイスバーグはフランキーに対して激怒する。

当然だろう、海列車は完成して折角罪が消える。

つまり、10年前の罪が今その時を経て無罪になる事は間近だった。それが……水泡に帰す。

流石にこれはフランキーもアイスバーグの怒声にもも言えずに俯いてしまう、むしろ何か言えるはずがない。

「これでトムさんが無罪じゃなくなって政府に連れて行かれる事になったら……俺はお前を一生許さねえぞ!!! その所分かってんのか、フランキー!!!!」

フランキーの胸倉を怒りに任せて掴むアイスバーグだったが、そこへ親譲りなのか、嫌らしい声がかげられた。

「残念だったなあ、せつかくもう少しかったのに。その馬鹿一人のせいで、お前らはここで終わりだ!」

「お前は……くそつ、お前達だろ!、俺の船をあんな事に使ったのは!!!」

「何の事だ、証拠も無いのに何を「いや……証拠ならばあるぞ」、

誰だお前は？」

グラムがマントを脱ぐ、オルビアもそれに続いて脱ぐが……

「骸骨？」

「カボチャ？」

あれほど怒っていたアイスバーグとうつむいていたフランキーもこの奇妙な二人組みには目を向けずにはいらなかった。

「どういう見だ、お前らは？」

「黙れ、これを見てどうなるかを考えておけ」

「なっ、そいつは……」

「みでの通り、黒電伝虫だ、そして使い道が分かるならどうなると思っ？」

「お前ら、何がしたいんだ！」

裁判長が言っが関係ない、スイッチを入れる。

「慌てるな、証拠の証明だ。」

「止める、こいつを殺してもかまわ……」

「虚言を言う事を』とめる『」

「なっ……」

そこからはオルビアに触れたことよって、嘘が言えなくなったスパンダムによる証言が行われる事となり、延々とこの司法船の襲撃計画やその動機などいろいろな事を包み隠さずに言っ事になった。

「さて、これで裁判長、トムに対しての判決は？」

「当然無罪だが……スパンダムは『インペルダウン』へ言ってもら
う事になる」

「そうですか、良かったな、お前達」

仮面をつけたまま俺達は海列車で『ウォーターセブン』へと戻った。

裁判所 Side Out

グラム Side In

『ウォーターセブン』へと帰ってきた俺とオルビアを、待っていた
のはカティ・フラム……フランキーだった。

「あんな事をしたのはあんたたちなのか？」

「おい、フランキー、やめろ」

「うるせエ！、俺はこいつが俺の船を壊したかどうか聞いてんだ！
！、止めるんじゃないやねえよ、バカバグ！！」

フランキーは怒りに身を任せて俺に質問をする、しかしそれをア
イスバグが止めようとしたが俺は平然とその質問に答えた。

「悪いがカティ・フラム、確かに壊したのは俺だ」

ガンツ！！

フランキーは怒って俺を殴る、しかし俺にも理由があって船を破壊
したのだ、その理由を今から説明しよう。

「破壊したのは司法船への襲撃を考えたからだ、流石にあれだけの
船全てが砲撃をしてきたら、嫌でも砲弾は司法船に当たる、そして

その結果どうなる？」

その俺の質問に対してアイスバーグが答えた。

「トムさんが有罪になる可能性もある、そして特定のために必要最低限の船は、破壊したというわけですか」

「そういうわけだ、反省してこれからは気をつけることだな、フランキー君」

「分かったよ」

「今回はこの馬鹿の為にわざわざ有難うございました。」

「それなら夜に話があるから頼むけどこの場所に来てくれないか？」

それをアイスバーグが承諾してから時間が過ぎて夜となった。

「しかし……一体何のお話なのでしょうか？」

自分にどんな話があるのか、アイスバーグは疑問に感じているらしい。

まあ、もっともだろう。アイスバーグはトムの件にも、フランキーの件にも直接関わっていないから咎めるべき事も何も無い。

だが、俺の頼む事はアイスバーグでなくてはならない理由がある。

「ああ、君に頼みというか提案があつてね……」

「頼み、ですか？、一体どのような？」

「それは今から話すからしっかり聞いてくれ。」

そう、俺が話したのは、原作のガレーラ・カンパニーだ。

この『ウォーターセブン』にある造船所を1つに纏める事で、それまで他に足元を見られていた木材や鉄の購入をも有利とし、この都市を活性化させた方法だった。

俺が転生してきた現代でも、このような方法はある。

複数の企業が並び立っていれば、売る側は他が高く買うなら、そちらに売ってしまう、なんたってそうした方がいいからだ。

逆に買いたいと希望しても、そのお値段では……他の造船所からはくでという話が来てまして、で余計に高く売りつける。

競争意識というようなものが働かないという欠点などはあるが、少なくとも今よりもこの『ウォーターセブン』を活性化させるにはその方法が今において最善といえるだろう。

しばらく考えていたアイスバーグもその考えに至ったらしい、何度も道理が行くかの確認のように頷いていたが、ふと顔を上げて真剣な顔つきでこちらへと尋ねてきた。

「僅かとはいえ聞きたい事があるのですが」

「聞きたいことは答える、最もこちらが答えられる範囲でだが。」

もともと、アイスバーグが聞きたい事は多分こちらの想像通りの事だろう。

「では、まず……何故私にこのような提案をしたんですか？」

考えていたように予想通りの質問だった。

それに対しての答えは簡単だ。

他にこのような事を提案できる人がいない。

確かに、トムは誇りある優れた船大工だというの分かる……だが、それだけでも言える。

彼には、今の会社を大きくしようとかが、そういうような他の船大工ならば持っているであろう欲もそう言った意思もない。

ただ、優れた船を造りたいという正に職人の鑑だが、今回の件には不向きだというのが本音だ。

フランキーはこういうことに関しては論外である。

どちらかといえば武装船の専門だし、そもそも彼は街の人達から少々アレな目で見られている、もっとも今回の事でさらにその風潮が強くなったかも知れないけれど。

それに今回の事件でのトムさんの咆哮で多少は心構えが変わったとはいえ、まだまだこの街の他の住人や船大工には、そこまで何とかしようという気概は今のところないだろう。

そして今回の件では、まず人の信頼を得なければならぬ、諦めずに前へ前へと進む気概を持ち続けなければならない。

おそらく、それが可能な人材は目の前のアイスバーグのみだろう、その辺を説明すると、『そこまで見込まれるとは……これは、やるしかなさそうですね』、そう言ってニヤリとお互いに笑いあった。

「で、もう一つですが……貴方は何故このような事を考えたのです？ 只の海賊がこの『ウォーターセブン』の復興の事など、考える必

要などないはずですが？」

ああ、やはりそれか……その理由なんてのは聞くだけ野暮ってものさ。

「それは……秘密だぜ、ボーヤ」

そうやって俺達は『ウォーターセブン』を出て次の目的地へと出航した。

第33話「墓穴掘り」(後書き)

次回からフーシャ村、やっと……追いつける!!

第34話「赤髪と海王類」(前書き)

一応前作に追いつくまで秒読みです。

第34話「赤髪と海王類」

グラム Side In

航海は順調である、現在は『東の海』^{イーストフル}の『フーシャ村』へ向かって進んでいる。

アバロや他のやつらも最初は何故わざわざ逆走するのかを聞いていたが、正直計画的なものは何も無いから、徐々にシャボンティ以外の場所で羽休めをしようというわけだ。

あと、ここに来る間に俺達は海賊船を沈ませたがその際に徐々に刀を振った。

あとマストを能力で押し折ってみたら、相手さんの船が崩壊するという大惨事に繋がった。

いや……ちょっと魔がさしたんだよ、日常的にはそんな事していないよ。

そんな事を考えていたらどうやら『フーシャ村』が近づいてきた様だが、海賊船があるとアバロから告げられた。

あの海賊旗は確かシャボンティやどこかで聞いたような……もしかして『赤髪海賊団』ではないのか？

その時俺は船首に誰かが居るなんて気づいてなかったが。

グラム Side Out

??? Side In

俺は今、村の酒場で船員達と飲んでいる。

昼間から飲むなんて悪い奴だと？、そんな事は不定期な飲食が常の海賊からしたらどうでもいい事だ。

やる事もなくこの村を気に入ったから滞在して早一年

だが、俺に懐いてくるガキも居て悪い気はしない。

「このケチシャンクスめ！！、言わせておけば！！、俺はガキじゃない！！」

ガランガラン……！！

「少しきついが……邪魔するですよ」

「えらい多く居るもんだな」

「賑やかで良いわねえ」

「赤い髪の人って居るんだあ」

「あの海賊旗はどこかで聞いた事あると思ったが、やはりそうだったのか。」

「ここに居たなんて知らなかったけどね」

上から順にサウロ、アバロ、オルビア、ロビン、俺、クローバーだ。

「おお、『ウォルプタース』の面々か、初めてだが凄い顔ぶれだな」

「俺もまさか『赤髪』のシャンクスがここに居るとは思わなかった、偶然というのは凄いな」

「こっちに来て飲めよ、量はそんなに無いけどな」

「お言葉に甘えさせてもらっぜ」

俺達はお互いに敵味方の垣根を越えて飲んでいた。

シャンクス Side Out

???? Side In

バキッ!、ガランガラン……!!

木で出来た扉が乱暴に蹴られたせいで壊れてしまっ、そして大勢の人が店に入ってきた。

「邪魔するぜエ」

「んっ?」

「ほほう…これが海賊って輩かい…、初めて見たぜ間抜けた顔してやがる」

「失礼だな、お前」

「うるさいな、俺はこっちの女に注文があるんだ」

「で……俺達は山賊だ、が…別に店を荒らしに来た訳じゃねエ、酒を売ってくれ、樽で10個ほど」

「ごめんなさい、お酒は今ちょうど切らしてるんです」

「んん?、おかしい話だな海賊共が何か飲んでる様だが」

「ありや、水か?」

「ですから、今出てる酒で全部なので」

「これは悪い事をしたなア、俺達が店の酒飲み尽くしちゃったみたいで」

「少しは節度を持つべきだったな……」

「すまん」

「悪い」

「これでよかったらやるよ、まだ栓も開けてない（ねえ）」

バリイン！ バシヤツ！！

頭に酒の入ったびんを振り下ろされて、びんが砕け散り店内のカウンターに酒が飛び散った。

「！」

「！！！？」

「おい貴様達、この俺を誰だと思ってる」

ポタポタ

酒が滴って店内を汚しているというのに、山賊は俺達に話しかけてきた。

「あーあー、勿体無い事を……」

「折角の酒を粗末にしゃがって……」

「ナメたマネするんじゃないやねエ…、ビン二本程度じゃ寝酒にもなりやしねエぜ」

ポタポタ

「あーあー、折角綺麗だった床がびしょびしょだ」

「拭かないとな、雑巾どこだ？」

ぴら！

「これを見る、800万ベリーが俺の首に掛かってる、第一級のお尋ね者って訳だ」

「800万ベリーかよ、しょぼくれているな」

「言ってる…俺はな56人殺したのさ、てめエの様に生意気な奴をな」

「56人って人数を自慢する時点で小物だな」

「腑抜けが…この事が分かったら…今後気をつける、最も山と海じやもう会う事もなかるうがな」

カチャ…

割れた酒瓶の欠片をシャンクスが拾って何事も無かったように呟く。

「悪かったなあ、マキノさん。雑巾有るか？」

「あ…いえ、私がやります、それは」

「……」

ス…、ガシヤアン！

山賊は刀を鞘から抜いて皿や残っていた酒瓶を割ってさらに店内を汚した。

「掃除が好きらしいな、これ位の方がやり甲斐があるだろう…!!」

「ケツ、じゃあな腰ヌケ共」

「酒がねエンじゃ話にならねエ、別の町に行くぜ」

その時二人の子供が店の扉の前に立って怒っていた。

「取り消せ！、シャンクス達は腰抜けじゃないぞ!!」

「父さんは貴方なんか目じゃないんだから!!」
「ほう……ガキが……こっちに来い……!!」

そう言つて男の子とロビンは連れ去れて行つた。

ヒグマ Side Out

Other Side In

「船長さん達大丈夫ですか!?、ケガは？」

「あー、大丈夫問題ない」

「くっ!!」

「ぷっ!!」

二人の船長はお互い顔を見合せて笑つていた。

「笑つてる場合じゃないですよ、グラム!!」

「頭もルフィの奴が攫われちまつたぞ!!」

「何い!!、どこに連れて行かれた!？」

「全員で探したら文句ねえだろ」

「アバロ……」

「ベックマン……」

「頭!!、ゴムゴムの実が無い!!」

「ルウ、多分一緒に取られたんだろ」

「とりあえず行こうぜ!、急がないと」

Other Side Out

ルフィ&ロビン Side In

「くそオ！！！！、俺に謝れ！！！！」

「この野郎！！！！」

ブン！！

頬をつままれた状態でルフィが殴ろうとするが、相手に難なく避けられる。

「ゴム人間とは……なんておかしな生き物がいるんだろっつなア……！！」

グイツ！！

つままれた頬をそのまま体ごと投げられる。

「！！」

ドドツ……！！

投げられたルフィは受身を取れずそのまま地面に叩きつけられた。

「う……！！」

「畜生！！！！、絶対許さねエ！！！！」

「新種発見だ……見世物小屋にでも売り飛ばしやあ、結構な金になりそうだな」

「……二分咲き（ドス・フルール）」

「驚いたぞ……！！、ガキ」

「えっ……！！」

「まさかこっちも新種とはな……、だが怒らせたら駄目だ」

「それにお前らの気に障るような事を俺が言っただか？」

「言ったわ、謝って!!」

「そうだ、謝れ!!この野郎!!」

しかしその言葉は山賊たちはルフィとロビンを踏みつけて、身動きをとれないようにしていたために実行されず、また山賊たちは謝るつもりも無かった。

「その子達を放してくれ!!、頼む!!」

「その子達は何をしたのかは知らんしあんた達と争う気もない、失礼でなければ金は払う!!、その子達を助けてくれ!!」

「!、村長」

「村長さん……」

「さすがは年寄りだな、世の中の渡り方を知ってる」

「だが駄目だ!!、もうこいつらは助からねエ、なんせこの俺を怒らせたんだからな……!!、こんな青臭いガキ共にたてつかれたとあっちゃあ、不愉快極まりねエぜ、俺は……!!」

グシャグシャ!!

踏みながら靴を擦り付けるようにして嫌がらせをしていた、ロビンも同じく踏まれている為動転して能力が使えなかった。

「…悪いのはお前らだ、この山ざる!!」

「そうよ、謝りなさい!!」

「よし、売り飛ばすのはやめだ、殺しちまおう、ここで」

そういつて刀を鞘から抜き、ヒグマは遂に拳ではない力行使してきた。

「た…頼む!!、見逃してくれ!!」

「騒いでる方向に向かって行って正解だったか」

「！」

「そうだな……」

「ルフィ、お前の拳は銃の様に強いんじゃないのか？」

「……………！！……………！！うるせエ！！」

「何の用だ、間抜けな海賊共」

「何って助けに来たんだが」

「ここから一歩でもこいつらに近づいたら撃つぜ」

そういつて山賊は銃を抜いて脅しをかけてきた。

「へへへへ！！」

「そうかい……」

「そんな下らん脅しなんぞにびびる訳無いだろう」

スタスタ……

しかしそんな脅しにびびるグラムとシャンクスではなく、平然と山賊たちに向かって進んでいった。

「おい、聞こえてねえのか！？」

「撃つのなら殺す覚悟と死ぬ覚悟を持てよ」

「そうだぜ、銃を抜いたからには命を賭けるよ」

「あぁっ！？」

「「そいつは威しの道具じゃねえって事だ……」」

ラッキー・ルウが銃を撃ち、サウロが木を引っこ抜いて投げつける

ドンッ！！ バキバキバキッ！！！！

そしてラッキー・ルウに頭を打ち抜かれ、サウロに木を投げつけられて山賊の仲間のいくらかが息絶えた。

ドサツ……！！

その倒れた奴らを見て山賊たちは驚いていた。

「……！！」

「……！！」

「……！！」

「な……！！、卑怯だぞ！」

「卑怯？」

「くだらねえ」

「甘エ事言ってんじゃねエ、聖者でも相手にしてるつもりか」

「「お前らの目の前に居るのは海賊だぜ」」

「かつ、海賊の分際で……」

「「良いか、山賊……俺達は酒や食い物を頭からかけられようが、つばを吐きかけられようが、大抵の事は笑って見過ごしてやる」」

「「……だがな……、どんな理由があろうと……」」

「俺は友達を傷つける奴は……」

「俺は大切な人達に危害を加える奴を……」

「「許さない……！！」」

「シヤンクス……」

「父さん……」

「何が許さないだ！、お前らやつちまえ……！！」

「俺がやる「待て、俺にやらせる」……分かった」

ベン・ベックマンに変わってグラムが剣を抜いた状態で向かっていく。

「さて……おめえら覚悟は出来てんだろうなあ……！」

「オオオオー……ッ……！」

ザクッ！、ピチャ……！、ズバツ……！！

『レフィリア』の切れ味は凄まじく、それを見て流石のシャンクスも驚いていた。

「なんて刀だ、刀ごと人が斬れている……！」

「さて、うぬぼれるなよ、山賊……！！！」

「……！！！」

「俺を倒したければ海軍本部からヤバイ奴を連れてくるんだな」

「……つええ……！」

「くそっ、こんなところで死んでたまるか……！」

ポウン……！！

地面に何かを叩きつけたら煙が舞い上がった。

「……？」

「煙幕だ……！！！」

「来い、ガキ共……！！！」

「うわっ……！！、くそ……！！、はなせ、はなせエ……！！！」

「そうよ、ゴホ…触ら…ないで…！」

「ルフィ…！」

「ロビン…！」

「落ち着けよ、方向は気配で分かるし、悪魔の実を食べたなら海に
ポイとしたら終わりだろ。」

「……という事は」

「「海岸か…！」」

「行くぜ、グラム…！」

「飛ばしてくれ、シャンクス…！」

「…意外と頭が回るんだな、お前」

「船長の狼狽をどうにかするのが副船長の務めだからな」

ルフィ&ロビン Side Out

Other Side In

「ふう…ふう…、どうにか逃げてやったぜ！、まさか山賊が海に逃
げたとは思っまい…！」

「さて、ためエらは人質として連れてきたがもう用なしだ！」

「海王類の餌にでもなりな、あばよ」

ドン ……

そういつてヒグマはルフィとロビンを海へと突き落とした。

「くそ！！、くそ！！、あいつら！！クズのくせに……………！！、一
発も殴れなかった……………！！、畜生……………！！……畜生お……………！！」
「残念ね……………」

ドボン！！

悔しい思いを吐露していたルフィとロビン、しかしむなしくも海へと着水してしまった。

「はははははは、あーっはっはっは……………」

バシャバシャ！！

泳げない為にもがく二人、だがもがくだけでは進めず、そのまま浮くのを維持することしか出来なかった。

「ん……………！！、がぼっ、ん……………！！」

「がぼ……………ぶはっ……………！！、ば」

「……………！！？」

ザバア……………

腹をすかせた海王類が現れた、しかし規格外の大きさである、その大きさは船を丸呑みできるほどだった。

「グルルルル……………」

「は？、な……………何この怪物は……………！！！！」

「ぎゃああああー……っ!!」

バキバキ、バクン!!

ヒグマが驚き逃げる隙さえ与えず、船ごとヒグマを食ってしまったのだった。

ギョロツ!!

そしてその海王類はヒグマだけでは満足できなかったのか、その大きな目をルフィとロビンに向けて、その方向へと向かっていった。

バシャバシャ

泳げない為、もがくが進めないのは、さっきからしている為百も承知である。

だが、もがいてでも進まない、食べられてしまう為、必死にロビンとルフィはもがいていた。

「そんな…」

「うわあああ、がば…ば…!!、ば…誰か…助けば…!!」

ガバア!!

遂に大きな口をあけて迫ってくる海王類、もはやなすすべないと思えたロビン。しかし、

「ひっ……」

「うわあああああ」

ガギツ!!

すんでのところまで牙が止まって、恐る恐る目を開けてみると、そこには父の姿と赤髪の人の姿があった。

「間に合ったな……」

「……!!、シャンクス」

「ゴブ……大丈夫か？」

「父さん!？」

「シャンクス……頼……ゴブ……むぞ」

「ああ……」

『失せる』

その言葉を言っただけでシャンクスが睨むと海王類は震えてなるべく遠い所に行った、やはりこの時から霸王色の覇気を持っていたか。

「怖かっただろ……、二人とも？」

「ガブ……ゴブ、らい……ひょうぶか？」

「でも、父さん……」

「ロ……ビン……泣くんじゃない、もう大人なんだろ？」

「泣くな、男の子だろ？」

「だけだよ……おっさんの……」

「……だけ……父さんの……」

「腕が!!」

グラムの腕から先が無かった、なんせ億越えが二人いるとはいえ一人がカナヅチなのに必死こいた結果、追いついた方がいいがグラムの

方は着水からの防御が間に合わなかったのだ。

そのため海王類を殴り倒す事もできず腕を食いちぎられた、娘が泣いてる所で申し訳ないがグラムの方は能力による回転細胞で回復できる。

「大丈夫だ、あいつは凄い奴なんだから」

「そう…だぞ、だか……ら酒……場まで……頼…ゴボ…む…ぞ…ゲボ」

其の後酒場までシャンクスに担いでもらい回転細胞を使って千切れ腕を回復、皆驚いているが気にしていない。

ルフィには事情とゴムゴムの実について話したら驚いて口を大きく開いていた、俺としてはシャンクスの腕が食われなかっただけ良かったと思っっている。

それから俺はルフィにゴムゴムの効果的な使い方をお教えたが、これから先どのように才能が開花するのは本人次第だ。

シャンクスも同じ様に教えてくれたが、俺はシャンクスに剣技の型をお教えたもらった。

さすがは『鷹の目』と互角の剣士というのは伊達じゃなく凄い教え方が上手だった、というか持っている剣が凄すぎて驚いていた。

Other Side Out

そして…あの海王類の日から数ヶ月経ったある日の事。

「あれから数ヶ月か、速いものだな……」

「もうシャンクス達はこの航海で村には戻ってこないのか？」

「ああ、一年近く拠点にしたがサヨナラだ」

「其れにルフィ、もう航海に連れて行ってくれってシャンクスには頼まないのか？」

「良いよ、俺は自分で海賊になるって決めたんだ」

「そうか……それは良かった、なあシャンクス？」

「ハハハッ、お前なんか海賊になれるか!!!」

「なる!!!、俺はいつかこの一味にも負けない仲間を集めて!!!、世界一の財宝見つけて!!!、海賊王になってやる!!!」

「ほう!!!、俺達を超えるのか」

「……………、じゃあ……」

「パサ……」

自分のトレードマークでもある、麦藁帽子をルフィの頭の上に乗せた。

「この帽子をお前に預ける」

「!!」

「俺の大切な帽子だ」

「……………!!!」

「立派な海賊になったら返しに来いよ、待っている」

「良いのか……大事なものを証にして？」

「ああ、良いんだ」

「まあ、お前次第だから強くは言えねえがな」

「ところで、お前はどうするんだ？」

「俺はまだここに滞在するよ、何か楽しそうだからな」

「じゃあ、又会おうぜ」

「今度も酒盛りできたら良いな」

「お互い生きてたら又いつかできるさ」

「あいつは大きくなるぜ」

「ああ、なんせ俺のガキの頃にそっくりだ」

「^{いかり}錨を上げるオ！！！！、帆を張れ！！！！、出発だ！！！！」

そう言ってシャンクスは船を出港させた。

さて……俺の方はもう少ししたら『ゴア王国』にでも行きますかな。

第34話「赤髪と海王類」(後書き)

時系列で言えばドラゴンとの遭遇をなしにしてフィッシュャーさんと再会を考えております。

第35話「塵芥（ゴミ）の中で芽生えるもの」（前書き）

久々に1日3話投稿、一応これで追いつきました。

第35話「塵芥（ゴミ）の中で芽生えるもの」

グラム Side In

シヤンクスがこの街を離れてからそう月日が経たない内にルフィは誰かに連れ去られた。

当然それが誰かわかっている俺はそいつが離れてから『ゴア王国』へ侵入した、オルビアや他の奴らはこの臭いに弱いと思ったので待機してもらった。

「それにしても……こんなにも量が有ったら悪臭もうなぎ上りだな」
一人愚痴りながら歩を進めていくが格好はルフィにはれない様にバングナにダウンジャケット、そしてジーパンというラフなタイプにした。

軽快に動いてなおかつサングラスを装着、髪の毛をオールバックにしたら『怪しい男』と言う噂と共に歩ける。

山賊ダダンの家思ったより遠かったけど海の上の様にあからさまに怪しい奴に絡む奴などいない、そのため快適に歩けた。

「ここだな……」

目の前にあるのは大きなログハウス、礼儀正しくノックをしてと……

「失礼する」

「なんだい、変な奴はお断りだよ!」

「酷いな、ちよつと数日前ここに子供が入るのを見たんだが……誰が連れてきたんだ？」

「あんたガープを知ってんのかい？」

「そうか……あいつならやりかねんな、ちなみに俺はあいつに勝つた事の有る男だ」

「何だつて！？、あの化け物みたいな奴を！！」

「とりあえずガキがどこに行ったのか教えて欲しいんだがな」

「わからねえがそこらぶらつけば、見付かるだろうよ」
「なら、そうするか……失礼した」

グラム Side Out

??? SIDE

「あいつ内緒話聞いてたぞ……エース」

「そうだな……どうする？」

「殺そう」

「よし、殺しちまおう」

スタスタ……

「ここまで来たが、居ないみたいだな」

しかしグラムがそのすぐ後ろに居た為、金のありかは分かられていたのである。

そして地面からはみ出た金を見て一言。

「金か……、埋め方が雑だな」

「おい、エース！！」

「どうしたんだ、サボ？」

「変なおっさんが海賊貯金見てる!!」

「何!?!」

「全く……管理ができてないな、これくらい綺麗にしとけば良いだろ」

「あのおっさん、埋め直してるぞ」

「一体何がしたいんだ?」

「まあ、良いか」

「それよりあいつを殺さないとな」

E I S & a m p ; サボ S i d e O u t

ルフィ S i d e I n

「俺知らなかったぞ!、E I S があんなに金……」

ドンツ!!

余所見よそみをしていた為大柄の男にルフィはぶつかってしまった。

「おい……ガキ、金は何だった?」

「いや……何でもねえ」

「ちょうど俺達の船の金がなくなって困ってたんだ、教えてもらおうか」

「嫌だ!!、教えたくねえ」

「なら実力行使だ!!、こっちに来て!!」

ルフィ S i d e O u t

E I S & a m p ; サボ S i d e I n

「連れてかれたけどどうするんだ、エース」
「どうするも、一応海賊貯金は埋め直されてるからばれない」
「あいつが喋ったら、俺達が脅されてしまうからな」
「様子見が一番だな、サボ」

1時間後……

「白状しろ!!、ガキ!」

ゴンツ!!

口を割らせる為に暴力でルフィに尋問をする海賊達、しかしルフィはそこまでやられておきながら喋る事は無かった。

「…俺は知らねえ」

「嘘付いてんじゃねえ!!」

「最初の口笛から怪しいんだよ!!」

グシャ!!

再び殴る海賊、しかし返ってくる言葉は依然として変わらなかった。

「俺は絶対に喋らねえ!!」

「殺してから探すか……」

「もう飽きてきたしな」

「あいつ…何で言わねえんだよ!!」

「言ったら助かんのに……」

「見てられねえ、助けるぞ!!」

「どつやるんだよ!!」

「行き当たりばったりだ、武器が有るだろ!!」

「待て……」

「誰だ、早くしないと危ないんだよ!!」

「俺もあのガキの為ならちよつと力を貸してやるっ……」

「なっ、お前は海賊貯金見てた……」

「一体どうする気だよ?」

「あんまり使う気は無いのだが……」

「それは?」

「煙玉だ、突入する前にちゃんと位置とか覚えるんだぞ」

「大丈夫だ、それならもう覚えてる」

「こつちもだぜ」

「なら……行くぞ!!」

ガチャ!!

勢いよくドアを開けてサボがルフィの方向へと駆け出し、エースが武器を持ち食い止めようとする。

「なっ、誰だ!?!」

ボンッ!!

その言葉にグラムは一言も言わずに似煙球を投げて動揺を誘った。

「何だ、この煙は!?!」

「おい、お前こつちに来い!!」

「えっ……」

「早く!!」

「くそっ、視界が悪いぜ!!」

「さてと、ここは大人に任せて逃げるんだ」

「なっ、あんたは逃げない気かよ!!」
「そんな事はどうでもいいから行け、それが得策だろ」
「でも……あんたを見捨てては行けねえ!!」
「全く……お人好しな奴だな、お前は」
「悪いけど先行つとくぞ、エース!!」

そう言つてサボはルフィを抱えたまま一目散に走つて行つた。

「おっさんは何で関係ない俺達の為にここまでするんだ?」

「お前らが昔の俺みたいに海賊になろうと希望に満ち溢れていたからな」

「おっさん、海賊だったのか……」

「まあ……本当の所は……」

「本当の所は……?」

「ガキはガキで……大人は大人でカツコ付けたい時があるんだよ!!」

その後サボとルフィの逃亡と同時にポルシェーミ達の絶叫がこの場所に響いたという。

そしてそれから数日後あのポルシェーミとかいう奴らとの騒動からルフィたちは仲が良くなつた、俺はちよくちよくダダンの所に酒を持って顔を見せたりしているが今やつてる主な事は……

「ガキ共!!、待ちやがれ!!」

「待つてやらねーよ!!」

「旨かつたな、エース!!」

「俺、腹一杯だぞ!!」

スタスタ……

この様に飯屋まで歩きながら尾行し、食い逃げをしている3人の金額の補填と組み手の相手である。

「まーた、あいつらか……」

「クソ！、逃げられた……ってあんた誰だ？」

「あいつ等のご飯代、幾らだったんだと思ってね」

「1万5千ベリーだよ、こんな事続いてちゃ商売上がったりだ！」

「3万ベリーだ……、釣りは要らない」

「えっ、何であんたが……」

「お詫びと食事代って事でな……すまなかった」

「で、又ガキ共の尻拭いかい？」

「まあ、あいつ等の食べる量を考えたらどんな所も大打撃だから詫び料込みだな」

「それにしてもこの酒は旨いね」

「一応色んな所を回っているから旨いのは見つかるんだ」

「ん……又どこか行くのかい？」

「稽古付けてやらないとな……、少しお仕置きの意味も込めて」

「ああ、行つてきな」

グラム Side Out

エース Side In

「そうか、サボは貴族だったのか……」

「この事を言ったら嫌われると思ったからな……」

「大丈夫だよ、サボ！！」

「ルフィ……」

「俺達友達だ！、そんな事で嫌ったりしねえ！！」

「良い奴らを友達に持ったな、サボ」

「グラム！！」

「そう言えば……お前ら食い逃げしただろ？」

ギクツ！！

図星のことを言われて動揺する三人、しかし開き直ってエースがこんなことを言ってきた。

「何でグラムが知ってるんだよ！！」

「そうだぞ、明らかに死角を狙ったのに！！」

「気配で分かるんだよ！！、そして稽古つけてやるから位置に付け！！」

「俺が一番だな……」

「エース、頑張れよー！！」

「さて……、お仕置きの時間だぜえ！！」

ドカツ、バキ、メキツ！！

とりあえず割愛させて頂くと3人とも一撃でKOさせてお仕置きは完了させましたが其の後目を覚ましてからはまともに稽古をつけておいた。

「やっぱり強え……」

「一撃が……遠いな」

「今日……も負けた」

「さて、家に戻るぞ。又明日もやるからな」

「……はい……」

そして俺達はダダンの家に戻るのだった。

エース Side Out

グラム Side In

お仕置きしたのは良いが……

「貴族ねえ……」

正直貴族に対するイメージは最悪だ、自分以外は屑だと考えて其の考えを阻害する奴は皆殺ししたり良い印象の為に媚を売っていく。

天竜人の時点で貴族のイメージは最悪だったがこの先貴族がひどい事を息子であるサボにまで及ばせるなら俺はサボを自分の船に乗せても良いと思っている。

「正直イレギュラーな奴である俺が入って時間軸が変だし、そこはどうなるかな」

ブルルル…ブルルル……

しかしそんな事を考えていたら3年ぶりに電伝虫が鳴る。

「久しぶりだな、グラム」

「その声は聞き覚えがあるが、あんたはまさか……フィッシャー・タイガー!？」

本当に懐かしい奴からの依頼で俺達はこの日の夜にゴア王国を出航

する事になった。

第35話「塵芥（ゴミ）の中で芽生えるもの」（後書き）

次回からフィッシャー生還編始まります。

第36話「理解されぬ悲しみ」(前書き)

今回と次回がフィッシャーさん回の予定です。

第36話「理解されぬ悲しみ」

今回はフィッシャーが3年前の奴隷の時に助けた子供を、故郷へとたどり着かせるために行動していたのだが、その子供の心を開きやすくする為に人間である俺達に協力を持ちかけたという訳だ。

グラム Side In

それを聞いたのがおよそ2週間前、いまや『カームベルト 風の帯』を抜けて合流地点の場所まで向かっている。

3年ぶりに出会う前の手配書で見たら懸賞金がかけられていた、やはりあの時の大脱走などで海軍から目を付けられてしまったのだろう。

そう考えていたらどうやら前方に船が見えた、あれはフィッシャーか？

とりあえず手を振って知らせる、しかしそれにしてもあいつの風貌は変わらないな。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

今回俺達が頼まれた事は3年前に奴隷だったという少女を故郷に無事に帰らせるといったものだ。

何故あいつに協力を持ちかけたかというと、人間ならば俺達魚人よ

りも同じ人間がいたほうが、心を開くのも幾分速いかと思ったので俺は、久しぶりに奴に連絡をすることにした。

あいつはあの日からさらに問題を起こしただろうか、なんたって見れば見るほど問題を起こす奴だったからな。

そんな事を考えていたら手を振った奴の姿が見えた、全く……旅行気分といった所か。

少しばかり俺は苦笑いをして奴の船が隣に来るのを待つことにした。

フィッシャー Side Out

グラム Side In

船が近づくと俺はタイガーから飛び移るように言われ、飛び移ったらそのまま船長室へと案内されていった。

「久しぶりだな、タイガー」

話す前に挨拶、砕けた感じになるのはきつと堅苦しいのがお互い苦手だからだ。

「変わらないな、お前は」

「そういうお前も格好は変わっていない」

「お頭、なんですか、その人間は？」

鼻が特徴的な魚人が俺を威嚇する、多分アーンだな。

「アーン、こいつは『マリージョア』と一緒に協力した人間だ」

「シャハハハ、冗談は行けねえ、大アニキ、こんな人間が……」
ガンツ！！

俺に偉そうに言っていたアーロンをフィッシャーが叩く。

「何すんだよお！！大アニキ！！」

「こいつはな魚人、そのものを知らねえ、その意味が分かるか？」
「えっ……」

「しかも俺以上に天竜人を嫌うから、むしろ俺たちの味方だ」

「そうか……すまねえ、大アニキが言っんなら信じてみるか……」

「それで送り届ける奴ってのは？」

「今は厨房に居るはずだ、気にするな」

「分かった、じゃあ見に行くか。」

そういつてフィッシャーが居る船長室から俺は出て行った。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

「タイの大アニキ、前回の海賊とのいざこざで『エターナルポース永久指針』が壊れ
ちまつてるぜ」

「わかった、どうにかする。悪いが今から俺は厨房に行ってくる、
お前も体を休ませておけ」

「そうか、任せるぜ、大アニキにな」

俺は厨房へ向かい、コアラに質問した。

「おい、コアラ、人間の人が居たら嬉しいか？」
「えっ……」

「俺の知り合いの人間が近くにいるがどうする」
「別にいいです……こっちの方が楽しそうだから」

そしてそこにジンベエが入ってきた。

「一応聞きたいことがあるんじやが、お頭」

「何だ、ジンベエ？」

「人間は何でワシらを怯えるのかじゃ」

「きつとそれはな……」

「だって……何も知らないから」

「知れば何か変わるのか」

バタン！！

厨房の扉が慌ただしく開きそこにハチが入ってくる。

「ニユ〜、お頭やつたぞ〜」

「何じゃ、ハチ、慌ておつて」

「ジンベエさん、お頭のいつてた人間が……」

「グラムがどうしたんだ？」

「コアラの故郷の『エターナルポース永久指針』を海賊船から見つけてくれたんだ」

「全くあいつらしいな、一発で見つけてしまつとはな、航海を再開するぞ、舵を取れ！！」

フィッシャー Side Out

『エターナルポース永久指針』を手に入れた俺とグラム達は、コアラを故郷に帰す為に航海を続けた。

グラムの奴はグラムの奴で、物資のある町でアラディンと買いに行き、ハチが大王イカを仕留め、ある冬島で雪を見て騒ぎ俺たちと一緒に宴を催していた。

そんな楽しかった航海も数週間経ち、俺たちはコアラの故郷『フルシャウト島』へと到着した。

グラム Side In

「コアラ！船から降りろ、お前の故郷だ……！！」

「はい」

「お前の村はどこだ、入り口まで俺がついて行こう」

「悪いが俺もついていくぜ、短いとはいえせつかく一緒にしてきたんだ」

「そうか……なら来い」

「うおお行くなよ、コアラと一緒に旅しようぜ」

「そうだ、良い子だよオ、おめー人間なのに」

「泣くなよ、お前ら」

「あたし村の皆に言うよ！！、魚人には良い人たちが沢山いるって！！」

「おめー元気でなー！！、コアラ」

マクロたちは号泣して、ハチとアラディンは手を振って見送った。

こちらはこちらでサウロやアバロが手を振って別れを惜しんでいた。

そして入り口まで行ってコアラを無事に送り届けた後、俺とフィッシュァーは手を振って島から出て行く方向へと歩いていった……しかし

ガチャー！！

島の出口近くの海岸で海軍に囲まれて銃口を俺達は向けられていた。

「抵抗はしないで頂こうか」

「お前はまず何者だ、見たところ海軍本部の将校だが？」

「私はストロベリー」『本部少将』である、グラム・トランセオとフ
イッシャー・タイガー、お前ら2人の罪名は分かっているな？」

「何でここに海軍が……」

「一体誰が誰が垂れ込みやがったんだ……！！！」

「グラム・トランセオの方が『天竜人殺害』と『襲撃』など……フ
イッシャー・タイガーは『逃亡』と『襲撃』、この島のこの場所
の騒ぎは島民達も理解している。」

「結局それがお前らのやり方が、人ならばわが娘を送り届けたのだ
から……少しぐらい感謝すれば良いだろうがあ……！！！」

フルシャウト島へ向かって叫ぶがそれはむなしく響くだけで、引
き金が引かれ銃口から弾丸がでる、俺たちは不意打ちの戦いに身を
投じることとなった。

第36話「理解されぬ悲しみ」(後書き)

かなりグダりました、すいません。

第37話「涙と血」(前書き)

原作の資料の関係で遅くなりました、すみません

第37話「涙と血」

グラム Side In

一斉射撃が始まる、フィッシャーを庇うには数が多すぎて少し難しい。

「ぐああああ!!」

「フィッシャー……大丈夫か」

銃弾を雨霰の様に食らう俺達、そんな中で問いかけるなど馬鹿らしい事だがしてしまう。

「何だこいつら、生命力がおかしいぞ!!」

「え?」

ボコオン!!!

「オラア!!」

ズガン!!

「うわ~~~~!!」

「何でこんなにも頑丈なんだ、同じ人間だろ!?!」

「マリージョアを襲撃するほどだ、気にせず攻撃を続ける!!」

「おのれ、海軍~~~~!!」

「船長を放しな!!」

「なっ、うわああああ!!」

「退避せよ、もはやここは危険だ!!!」

魚人海賊団とアバロ達の救援もあり助かった、そしてそのまま船へと戻る。

フィッシャーが危険な状態であつたので急いで運んだ。

グラム Side Out

フィッシャー Side In

「お頭っ!!!何バカな事言つてんだ!!!」

「血を流しすぎてる!!!すぐに輸血せにゃあんたの命が!!!」

「お頭の血は珍しい型だ……ウチの船員クルーにゃ同じ血液の奴がいねんだ!!!」

「だが……この海軍船にストックされてた血なら……ハア”人間”の……血だろう……!!!、ハア……」

「そつだ、人間と俺たちには同じ血液が流れてる!!!、人間の血は使えるんだ、命が助かる!!!」

「だからとにかく輸血を……」

「入れるな!!!、ハア……」

「!!!?」

「ハア……そんな血で生き長らえたくはねエ!!!」

「汚らわしい血だ!!!……それは俺達魚人族を蔑み続けた血だ!!!」

「!!!」

「!?!?」

「恩など受けない!!!、情けなど受けない!!!」

「……お頭……!?!?」

「俺は人間に屈しないっ!!!……ハア……ハア……」

「?」

「……お前らやグラム達には……言いたくなかつた……おれは最後

の旅で……」

「!?!」

「旅立つて程なく……ハア……捕まっちゃったんだ!?!、マリージョアに……数年……!?!」

「え!?!?」

「俺は!?!?! 奴隷だった!?!」

「!?!?」

「何じゃと……!?!」

「そこで見たのは……!?!」

「……!?!」

「人間の”狂気”……」

「お頭」

「命からがら逃げ出したが……目の当たりにした奴隷達を放っては置けなかった、ハア……ハア」

「……良く聞け、俺は思うままに生き……!?!……結果オトヒメ王妃を……ひどく邪魔しちゃったが……!?!、あの人は……正しい、誰でも平和が良いに決まってる!?!」

「……だが……本当に島を変えられるのは……コアラの様な何も知らねエ”次の世代”だ……!?!」

「……!?!」

「……だから頼む!?!、お前らは島に何も『伝えるな』!?!、俺たちに起きた”悲劇”を!?!、人間達への”怒り”を!?!」

「この世にやア心の優しい人間達はいっぱいいるんだ!?!! そんな事は分かっている!?!!、なのに……死んで消えゆく者達が!?!恨みだけこの世に残すなんて滑稽だろう!?!」

「……頭じゃあ分かかっていても……!?!!俺はもう心の鬼が邪魔をす

る、体が……その血を拒絶する……!!」

「俺はもう……!!人間を……!!!!愛せねエ……!!!!」

「フィッシャー……今は少しだけ眠れ」

その言葉を聞いた直後、俺は意識を手放した。

フィッシャー Side Out

グラム Side In

霸王色の覇気でフィッシャーを気絶させた後、俺は急いで魚人海賊団の奴らに呼びかけた。

気絶したのは傷ついていたからだろう、普段なら無理なはずだ。

「お前ら、急いで俺の血液型を見てくれ!!」

「庇ってるあんたからも血はかなり出ている、出来ても一命を取り留めるかはわからない!!」

「0から変わるならするべきだ、そうだろう!!」

「分かった、恨まんでくれよ」

「お頭が一命を取り留めるギリギリまで、悪いがもらおう………すまない」

そういつて俺の腕から血を取った所フィッシャーを同様の血液型だったようで、魚人海賊団の奴らはギリギリまでとってフィッシャーの命を繋ぎとめようとした、人間を愛せないなど言っな、俺とお前は友人だろう……そう思って俺は意識を手放した。

グラム Side Out

暗い世界が目の前に広がるのかと思えば見覚えのある天井、これは俺たちの船じゃあないのか。

「俺は大丈夫だったのか……?」

「お頭が目を覚ましたぞ!!」

「お前ら……」

「グラムさんが頑固なお頭を気絶させなきゃ無理だったぜ」

「あいつが……そうか」

「お頭の言葉にシヨックを受けてたが……」

「全くだ、人間を愛せないなんて言いやがって」

「グラム!!、なんで俺に人間の血を輸血した!!」

「勘違いすんな、それは俺の血だ」

「お頭、奇跡的にも血液型が合っていたんだ」

「何だと……」

「俺とお前が一緒だったから良かったんだ、俺の血なら文句言わないと思っただけだからな」

「くそっ!!」

「生き残れただけでも十分だぜ、全ての奴隷にとってお前は一生の大恩人なんだ、魚人島の英雄なんだぜ、胸張れよ」

「そう言ってくれるとは、嬉しいねえ……」

「納得してくれてよかったよ……またいつか会おうぜ」

そして今回の航海は終了した、人がいつの日か魚人を毛嫌いしませんように……そう願いながら俺達は別れ、俺は再びフィッシャー村へと帰ることにした。

第37話「涙と血」(後書き)

グラムは横槍を入れず聞いていました、かばっても良かったんですが、強引にというほうが良いかなと思ったのでこちらでの生還とさせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1137q/>

ONE PIECE 秘境と悪魔の実を持つ青年

2011年9月24日22時07分発行